
裏切りの剣

晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏切りの剣

【Nコード】

N2718X

【作者名】

晶

【あらすじ】

真選組の面々に迫る影。

泥を塗られ、探られ、命を狙われる。

渦巻く策略と陰謀。
はたして…。

プロローグ（前書き）

予告してました、真選組メインのお話です。

前ほどさくさくと更新しないかもしれませぬ。

気長に生ぬる〜く、見守っていただけるとうれしいです（笑）

では、どうぞ。

プロローグ

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

近藤勲、土方十四郎、 沖田総悟：名前は聞いたことがあるだろうか？
そう。この三人が、名実共に真選組の顔だ。

これを消せば真選組の解体は容易いだろう。

まずは奴らの懐に入り込み内情を探ること……。
いいか？決して気取られるなよ。

探り、付け入り、寝首を搔け。

どんな手を使ってもいい。

奴らを……

• • • • •
• • • • •
• • • • •
• • • • •
• • • • •
• • • • •
• • • • •
• • • • •
• • • • •
• • • • •
• • • • •

消せ。

プロローグ（後書き）

最初と最後の謎の点は文字数かせぎです…（笑）

200字ないと投稿できないんですね。

無能

どうなってやがる…。

武装警察真選組、副長の土方は、自室にて新聞記事に連日記される
“話題のニュース”に苦い顔を向けていた。

『真選組、また！？ 攘夷浪士取り逃がす』

記事にでかかど踊る文面は、自分たちの失態をありありと綴っている。

「あゝ。無能の副長だ」

障子の隙間からひょっこり顔を覗かせたのは、一番隊隊長、沖田だ。
相変わらず毒を吐く沖田に呆れた視線を送りながら、土方は記事から目を逸らす。

「総悟…。言つとくがてめえもだぞ？もう少し危機感持ったらどうだ」

「えゝ。俺は知りやせゝん。言われた通り現場に行ってるだけですもん」

「いつも命令になんて従わねえ奴が調子いい事言ってるじゃねえよ」

「そんな。俺はいつもどんな命令にも従うしか術すべがない従順な兵士じゃないですか（てゆうかマジ勘弁しろよ真面目に調査しろよ土方）」

「怪しい言い方すんな！！てか最後の方向か聞こえたよ！？」

結局いつものように言い争いになったところで、もうひとつ、声が入ってきた。

「しかし事は深刻だなあ」

「近藤さん！」

ぶらぶらと廊下を歩いていたらしい局長の近藤は、言葉とは裏腹に呑気だ。

隣には監察の山崎がいる。

「いったいどうしてこんなことに…」

「山崎イ〜てめえちゃんと地味に監察してんのか？お前の調査の時点でバレバレなんじゃねえの？地味しか取り柄ねえんだからちゃんとやれ愚図が」

沖田はいつの間にかだらけきつた態度で畳に寝そべり毒を吐く。上司の前とか相手が年上とか、そんなことは全く気にしていないようだ。

だが、山崎も監察のプライドなのかさすがに怒ったように声を荒げて反論した。

「何言ってますか！俺は地味ですよ！いつもバリバリ地味ですよ！調査中ミントンに興じててもバレない地味さですよ！」

「真面目に働けええええ！」

山崎の不真面目な仕事ぶりの暴露に、今度は土方が声を荒げる。

「やつぱてめえのせいなんじゃないの？ねえ。てめえのミントンがバレてんじゃないの？」

「ち、違いますよ！最近では真面目にやつてるし…それに、俺が調査した件以外でも取り逃がしてんじゃないですか！」

確かに、山崎の言う通りだった。

最近の任務失敗ぶりは異常だ。

コソコソと攘夷浪士たちの不正を調査して、確実に捕えられる計画を練っても、すんでのところまで逃げられる。

それも一度や二度ではないのだ。

明らかにイライラとして煙草に火をつける土方を横目に、沖田が大きな欠伸をする。

「あれじゃないですかイ？ある人が近付くとマヨネーズ臭がするからバレるんじゃないですか？」

「俺か！？俺のせいだっけか！？」

「まあまあ。仲間内で争っても仕方ないだろう」

また喧嘩が始まりそうになったところで、近藤が止めに入る。

それに乗じて、山崎も思い出したように話し出した。

「あ、そうだ副長。三日後の黒犬一派の会合ですが、場所、割れましたよ」

「今度こそ気取られてないんだろうな？」

「…た、多分」

土方が、イライラしたままの視線を山崎に向けると、その山崎は自信なさ気に答える。

まあ、山崎を責めても仕方ない。

土方は、ふう、とため息をついた。

「まあいい。今回は逃げられても対応できるように包囲網を広く張ろう。配置説明するぞ。隊士たちを集める！」

「わ、分かりました！」

山崎は、鞭を打たれた馬のように勢いよく部屋を飛び出す。

これ以上失態を繰り返すわけにはいかない。

対策を練らなくては。

だらだらと寝そべる沖田と、呑気に笑う近藤を尻目に土方はひとり奥歯を噛み締めた。

年下の少年（前書き）

今回登場する少年、誰だよお前ってなるかもしれませんが、後々出てきます。

年下の少年

作戦会議を終えて沖田がぶらぶらと庭を歩いていると、向かいからひとりの少年が駆けてきた。

「あつ！沖田隊長だ〜！」

隊服に身を包んでいるから隊士なのだろうが、駆け寄ってきた少年はあまりに若い。自分と同じか、少し下くらいか。

セツトしているのが寝癖なのかよく分からないハネた髪にくりりとした両目。

長い睫毛に紅潮した頬はまるで女みたいだ。

「…誰だっけお前？」

「六番隊副隊長補佐、きさきたける貴寄猛です！最近入隊して…俺、沖田隊長に憧れてるんすよ！」

沖田が尋ねると、少年、猛はぴしっと敬礼をして、大きな目をこちらに向ける。

「ふーん。何で？」

「俺と三つしか変わらないのに…真選組一の剣の使い手だって、田舎にいたときから聞いてて。勝手に目標にしてたんす」

「つーことは十五か。」

それにしても、自分が冷めているのもあるが、随分と子どもっぽい。

無邪気にはしゃぐ猛を見ながら、沖田は薄く笑みを浮かべた。

「へえ。俺のファンならまずしなきゃならねえことがあるぜイ」

「な、何ですか？」

沖田のニヒルな笑みに、緊張がはしる。

猛はごくりと喉を鳴らす。

「そう、俺の日課の…土方殺…」

「くだらんこと吹き込むなっ！！」

恐ろしい言葉を漏らしかけた沖田を、土方のでかい声が止める。

猛は少し不思議そうな顔をするが、すぐに姿勢を正して土方に向き直った。

「副長！おはようございます」

「おー。え〜と…」

元気に挨拶をする猛に、土方は少し、目を泳がせる。

多分名前を覚えていない。

知ってか知らずか、猛はまた、丁寧に名を名乗った。

「六番隊副隊長補佐、貴寄猛です！」

完全に“そういえばそうだった”みたいな顔をする土方に、沖田は呆れたように嫌味を言う。

「自分が面接した奴ぐらいしつかり覚えといたらどうですかイ」

「一人で何人面接したと思ってんだ。…つってもお前は覚えてるよ。最年少天才少年だろ」

どうやら、名前以外は覚えていたらしい。

土方がそう言うと、猛は少し照れて、焦ったように言葉を返した。

「いえ！まだまだ皆さんの足元にも及ばないっス！」

「入隊前試験で学力体力共にAランクだったんだぞこいつ。おまけに謙虚ときた。目標とする奴を間違えるなよ」

今度は土方が沖田に嫌味っぽく言うと、またいがみ合いが始まる、と、思ったのだが、それは間に割ってきた猛によって防がれた。

「沖田隊長もやったんですか？入隊前試験」

「ん？あア。やったな〜そっいゃ」

記憶が曖昧らしい沖田に代わって、土方が答える。

「俺ら結成前からいた組は形式的にだけだな。こいつは…どっちもGランクだ」

「えっ？沖田隊長は昔っから超天才だったって…」

土方が口にした試験結果に、猛は驚きを隠せずに声をあげる。真相を確かめようと沖田を見るも、当の本人はすました顔をしているだけだ。

猛が答えを求めるように視線を戻してくるので、土方はまた話し出した。

「確かに昔から剣の腕は良かったが…学力テストでは寝るわ体力テストでは試験官に斬りかかるわ…最悪だったね」

当時を思い出してか顔をしかめ、沖田を睨む土方だったが、沖田自身は、そーでしたかねイ、ととぼけてみせるだけだ。

そんなふたりを代わる代わる見ていた猛だったが急に、ふふっ、と声を零した。

「ふっ…あははっやっぱスゲーや沖田隊長！俺なんていい点とるだけに必死だったのに…ますますファンになりました」

「はア！？」

そんな風に笑う猛に土方が呆れたように言ったところで、渡り廊下を歩いていた六番隊の隊長、井上がこちらに向かって怒鳴り声を上げた。

「お〜いタケ！何やってる！仕事しろ〜」

「あ、は〜い！」

どうやらこの少年、仕事の途中で抜け出して来たらしい。
猛は土方と沖田に一礼すると、失礼します、とその場をあとにした。

「かわいい奴じゃねえですかイ」

沖田が、ニヤニヤと笑いながら言う。
きつとまた、余計なことを考えている。

そう、従順なペットを手に入れた、そんな顔。

「…あいつ入隊させたのは間違いだったかな」

命の危険が二倍になった気がして、土方は身震いしたのだった。

お互い様

「またかよ…」

対策は練った。

先行して現場に向かう隊士たちは私服、覆面パトカーで向かわせた。

後から駆け付ける自分たちも普段の巡回を装い、ごくごく少数で、バラバラに現場に向かった。

…それなのに。

土方たちが到着したところには会合場所はもぬけの殻。そして…。

「副長！周辺を包囲させてた隊士たちの方でも収穫ゼロであります
」！」

用心して退路に張っておいた包囲網も、あっさりすり抜けられたらしい。

「…お前、どこの隊の奴だっけ？」

報告をしてきた隊士は見慣れない顔だった。この少数精鋭の中にいるのだから、それなりの地位にはいるはずだが。

「二番隊副隊長補佐、花井新太はないあらたであります！」

身の丈六尺ほどはありそうなひよろりとしたつり目の男は、身長に見合ったやたらとでかい声で名乗り、敬礼をした。

そういえば先日面接した新人にこんな奴もいたか。

土方はそう古くもない記憶を掘り起こして、ああ、と声を漏らした。

「そうか。ご苦労さん」

もう一度敬礼をして、走り去って行く隊士を見送っていると、後ろから急に声をかけられた。

「やっぱりダメじゃねえですか」

沖田だ。

まるで他人事のように言う沖田に土方は、うるせえな、と返すとそのままぼつりと呟いた。

「しかし…情報が漏れてるとしか思えねえなこりゃ」

沖田の眉がびくりと動く。

「スパイでもいるって言うんですかイ？」

「かもな」

「怪しいのは最近入隊した連中、ですか」

土方は煙草を吹かしながら、可能性としてはな、と一言、横目で沖田を見遣る。

「まア伊東の件で随分隊士も減ったし…その穴埋めで入隊した連中はあの時のごたごたで素性の調査も適当だったからな」

「だったら面接した土方さんの責任ですね」

「あんな数一人で捌ききれるかっ！それにほとんどが幕府推薦の奴らだ。入れざるをえなかつたんだよっ！」

ただでさえ苛ついているのに沖田の言葉で当時の苛立ちまで思い出して、土方はいつもに増して不機嫌オーラを纏う。

当の沖田は涼しい顔をしているが、何も知らない周りの隊士たちは完全に萎縮している。

そんななか山崎は、勇敢にも土方に話しかけた。

「だ、だけど最近では情報漏洩を避けてほとんどの隊士たちには現場に着くまで詳しい作戦内容は言っていないでしょう？」

いやに下手に出て話しかけてくる山崎の態度を見て自分の今の物凄い形相に気付いたのか、土方は、ふっと息を吐き不機嫌な態度を改めた。

「だったらかなり絞れるな。新人の中でその情報を知り得た奴を洗え」

「分かりましたア！」

心なしかいつもよりしつかりと敬礼をして、山崎は調査に駆けていく。

それを見ながら沖田が誰にともなく呟いた。

「仲間をつたぐるなんて。嫌な仕事でさア」

「仕方ねえだろ。ここまで情報だだ漏れなんだ。こっちから動かねえと寝首搔かれるぜ」

「まだ少し不機嫌だが、土方はいつもの冷静さを取り戻して言う。が…。」

「あゝ。そういえば最近よく空から植木鉢が降ってきたり車に執拗にストーキングされたりしたな」

「お前それめっちゃめっちゃ命狙われてんじゃねえか！日頃てめえに怨みを持つ誰かの犯行じゃねえの！？」

「やだなア。土方さんにとっては日常茶飯事でしょう？」

「犯人は全部お前だけどねっ！」

先程の殺伐とした空気こそないが、土方は再び声を荒げた。
だが結局、呆れたように息をついた。

「だいたいお前は…っっ！」

沖田の方を向いた土方の動きが一瞬止まる。

沖田の黒い隊服に赤い光が走り、それはちょうど胸の辺りでぴたりと止まった。

光の飛んできた方向に目をやる。そこには…。

ふいに自分の方を見たかと思っただけなのに、深刻な顔をして背後を振り返る土方に沖田は怪訝な顔を向ける。

「どうしたんですか？土方さ…」

危ねエ!!!

沖田の体が、ドン、と弾かれる。

パン！

渴いた男がして、血しぶきが舞う。

土方は僅かに顔を歪め、う、と小さく呻いた。

「トシ！」

「副長！」

異変に気付き、近くにいた近藤と山崎が駆け寄ってくる。

「騒ぐな。掠っただけだ。それよりあそこ、長銃か何か持った奴がいるぞ！逃がすなっ！」

土方は撃たれた右腕を左の手で抑え、止血しつつ顎で正面の廃ビルを示す。

「は、はいっ！」

山崎はそのまま、踵を返して隊士たちを集め、ビルへ向かう。

近藤も心配そうにこちらを振り返りながら沖田に、ここは頼むぞ、と言つと山崎たちを追っていった。

「ちつ。痛ってーなア。骨もイッたな多分…。こりゃ完全にお前、狙われてるぞ。総悟」

掠っただけ、さっきはそう言ったが、銃弾は完全に土方の右の腕を

撃ち抜いていた。

止血のために黒い上着を脱ぐと、あらわになった中の白いシャツが血に染まって真っ赤になっているのが見える。

「…余計な事、してんじゃねエよ」

突き飛ばされて腰をついたまま、沖田が目も合わせないで呟くと、土方は呆れたように鼻で笑った。

「素直に礼も言えねえのかてめえは」

土方は首に巻いたスカーフを外し、左手と口を使ってそれを傷口に巻き付け器用に止血をする。

沖田はそれを手伝うでもなく、ちらりと見てはまた目を逸らした。

「…大きなお世話だつてんだ」

「まー…お前から素直に礼が貰えるなんて思ってたがな」

止血を終えた土方は、すつと立ち上がり沖田に背を向ける。

「とりあえず身の回りには気いつける。お前はいつつも、他人は護れるが自分^{てめえ}は護れてねえからな」

そう、言い残すと土方はそのまま行ってしまった。

廃ビルへと消えていく土方を見遣りながら、沖田がまたひとつ、呟いた。

「…お互い様だったんだ。クソ野郎」

お互い様（後書き）

隊士の身長表現で使った六尺は2メートル一歩手前くらいです。

多分…（笑）

我慢（前書き）

ちらつと主役登場（笑）

我慢

全治三週間…。

やはり骨にヒビが入っていたらしく、腕にはギプスが付けられた。

利き腕を動かさせないだけでストレスが溜まるのに、前方から更にストレスの元がやって来た。

「あれ〜？土方君何ソレ？ついにキャラ立ちのために小道具使いだしたの？包帯キャラなの？」

やって来た銀髪は案の定自分に絡んできた。

「違えよ馬鹿」

一応は“一般市民”であるこいつらは、斬って捨てることができない分、攘夷浪士よりも厄介だ。

適当に受け流す土方だったが、今度は横のガキが絡んできた。

「ふんっ！骨折してきたからってクラスの主役になれるのは一瞬アール！私の調査では松葉杖の方が注目を集める時間が長いネ」

なぜか得意げに言う神楽の肩を、ぽん、と叩いて銀時が続ける。

「普段話し相手がいない奴が怪我見せびらかして声かけてもらおうとしてんだ。悲しいね」

「ふっ浅はかな考えアルな」

土方を馬鹿にしたように笑う万事屋ほかふたりの後ろから、一応は常識人、メガネの少年が現れた。

「そつだとしたらあんたらめちやくちや釣られてますけどね」

今はこいつらの相手をしている元気もない。

土方がわざとらしくため息をついてその場を去ろうとすると、銀時と神楽はその態度にイラついたらしい。眉間に思いつきりシワを作った。

「…おい、神楽。ギプスに何か卑猥な言葉書いてこい」

「イエッサー」

「くだらねえことすんな！」

さすがに飛び掛かってくる神楽を無視することはできずに、土方は観念したように立ち止まった。

「ところでこんなとこで何してんですか？」

新八が尋ねると、

「そーだよな。昼間からぶらぶらと何してんの？働けよ税金泥棒」

銀時が当然のように茶化してくる。

「“巡回”だ！てめえらと一緒にすんな！」

言っと土方は苛立ちを堪えるように目を閉じる。

あんまり顔を見ないようにしよう。いちいち腹立つ。

が、土方の努力も虚しく、銀時は“地雷”に触れた。

「今世間で話題の“無能”がア〜？」

もう怒りは爆発寸前。だが、時間の無駄、そう言い聞かせて土方は何とかもう一度堪えた。

「いや、まあいい。駄目な二トに構ってる暇はねえんだ。お前ら総悟見なかったか？」

そう。自分は今巡回がてら途中で消えた沖田を捜しているんだ。街をぶらついていたのである。つこいつらなら、遭遇しているかもしれない。

だが、その考えは新八によってあっさりと否定された。

「一緒じゃないんですか？」

だから聞いてんだよ、なんて思ったが、知らないなら用はない。また、土方が去ろうとすると…。

「またどっかでサボってんじゃねえの。“無能”らしく」

「て、め、え……っ。さらっと流したのにネチネチ絡んでくんない！姑
かつー！」

堪えきれずに、ついに土方の怒りは爆発した。
そうなることやはり、横の神楽も参戦する。

「料理全てをマヨネーズまみれにする嫁なんて文句言われても仕方
ないアル」

「俺アマヨネーズに文句つける家になんて嫁がねえ」

「あれは誰でも文句つけたくなるでしょ。丹精込めて作った料理に
あんなことされたらちゃぶ台ひっくり返すね」

「てめえにだけは言われたくねえ！」

三人が話の論点がずれていることも気にせず言い争っていると、不
意に土方が動きを止めた。

胸ポケットの携帯が鳴ったのだ。

「もしもし。…山崎か。どうした？……あア、分かった。すぐ戻る」

用件だけの短い電話を済ますと、土方は携帯をしまった。

「てことで行くわ。じゃあな。てめえらもしっかり働けよ」

そう言い残すと、土方はさっさと行ってしまふ。

そんな土方を見遣りながら、新八が小さく、あっ、と零した。

「あの傷、どーしたんですかね？」

そういえば、いじるばかりで何故怪我をしたかなんて聞いていなかった。

銀時と神楽もいま気が付いたというように顔を見合わせた。

「さあ。DSに命狙われたとか、こけたとかそんなんだろ。どーせ」

我慢（後書き）

全治何日とかは適当です。骨折とかしたことはないから知らない……）
^^；

容疑者たち

ある隊士たちの入隊時の写真つきの履歴書と山崎の調査報告書を手
に、土方が呟く。

「怪しいのは四人、か」

山崎は、はい、と一言、自分も手にした資料に目を向けながら、調
査報告を始めた。

「まず一人目、花井新太。はないあらた幕府の重鎮の息子で二番隊副隊長補佐を
させてます。完全なコネ入隊ですね。入隊前試験では学力体力共に
Dランクです」

写真に映るのは、ひよろりとした長身でつり目の男。そういえば
この間、黒犬一派の会合に乗り込もうとした現場で見つけたか。

土方は、山崎の調べた詳しい経歴をざっと見ると、次、と続きを促
した。

「はい。二人目、一色隆太郎。いっしきりゅうたろう五番隊書記。天皇一家の遠縁の出ら
しいです。彼は学力B、体力Cランク」

色白で面長、切れ長の目は男に使っていいのかは分からないが“京
美人”といった雰囲気だ。

柔らかく笑っているが、心の奥では何を考えているのか分からない、
そんな表情。

次。

「三人目、貴寄猛^{きよきたける}。彼はまだ十五です。六番隊副隊長補佐で、五人の中で彼だけは一般家庭の出で：副長たちと同じ武州出身です。学力体力共にAランク」

長い睫毛にあちこちはねた髪。写真の少年は懐っこい笑顔を浮かべている。

先日、沖田のファンだとか言っていたちびっこだ。

次。

「最後、四人目は、瀬戸准平^{せじゅんぺい}。五番隊の一隊士ですが、隊長の武田さんと飲み友達らしくて：武田隊長、飲むと口が軽いでしょ？もしかしたらつて。彼の母親は大阪の豪商、父親は法務省のお偉いさんだとかで家族ぐるみで中央と深い繋がりを持つとか。ちなみに瀬戸は母親姓。父親は婿養子ですね。学力D体力Bランクです」

武田か……。腕は確かだから隊長に据えているが、山崎の言うように少々口が軽い。

写真の男は、ド派手な金髪をハーファップにした、口の上手そうないかにも関西の商人の息子、といった感じだ。

「身分的にはこいつが一番怪しいな」

簡単な報告が終わり土方が呟くと、山崎は資料から目を離し、土方を見た。

「どうしましょう」

「とりあえずこのことは内密にして動向を探れ。ただ真選組おれたちを貶めたいだけの愉快犯か、組織ぐるみで真選組おれたちを潰そうとしているのか分からない以上…派手な動きはできねえだろ」

「でも…商人や天人は散々邪魔してるんで分かりますが、皇室に睨まれる覚えはないし…。それに中央にとっちゃ俺たちは自軍の手駒でしょう？それが俺たちを潰そうとしてるってというのは…」

「阿呆。幕府は勝手ばかりする俺たちを常に疎ましがってるよ。皇室はそもそも幕府を嫌ってるだろっ」

命じられた調査とはいえ仲間を疑うのだ。
バレたら隊士たちの信用を失うことはおろか、彼らの“お家元”からも睨まれるだろう。

そして、その仕事をするのは自分…。

山崎はあからさまに情けない顔をしてため息をついた。

「また危ない仕事か…やだな」

「それが監察てめえの仕事だろ」

五番隊

土方が山崎に極秘調査を命じたちようどその頃、五番隊隊舎では、調査対象にあがっていた隊士がひとり、渡り廊下をふらりと歩きながら電話を耳元に寄せる。

『隆、どうや？真選組は』

「なかなか面白いですよ。少し芋臭いですが」

男の物腰は柔らかい。が、言葉の端々には何となく刺があるようにも感じる。

『はっはっは。仕方ないやろ。田舎侍の集まりやさかいにな』

電話の相手は女らしい。

女の話というのはすぐに逸れるものだ。

男はにこやかに、しかし迷惑ささえ感じさせるような声色で言った。

「何の、ご用ですか？」

電話の向こうで女は相変わらずの男の態度を、ふん、と鼻で笑い、言う。

『…わらわの言ったこと、覚えたはりますな？』

「ええ。確かに。お役目は果たしましょう」

『それやったらええねや』

女はただ、釘をさしたかっただけらしい。それだけ言つと満足そうに電話を切つてしまった。

男は、ツー、という携帯の終話音を聞きながらため息をつく。

と、廊下の向こうから厄介な金髪男が現れた。

「いつし〜きく〜ん、誰と電話してたん？」

同じ隊で同期だからか、この金髪頭、瀬戸准平は普段からやたらと自分に話しかけてきた。

正直面倒だったが、それでも男、一色隆太郎は、にこやかに答える。

「…故郷の叔母ですよ」

「故郷か。京都やっけ？」

瀬戸は故郷を思つてか、少し懐かしそうに笑つと、こちらに問い掛ける。

どうやらここでも脈絡のない会話をしなくてはならないらしい。一色はこっさりため息をついて、言った。

「そうですよ。瀬戸君は大阪でしたか」

「せやで。てか一色くん、何で関西弁使わへんの？同じ関西勢同士、故郷の言葉を広げようや〜」

一色は多少のイントネーションは乱れるが、標準語を使う。つまりところ瀬戸はこれが気に入くないらしい。

「僕は生まれは京都ですが…江戸（えいご）に来てからも長いですからね」

「ふうん…」

しばし、会話が途切れる。一色は瀬戸に目的地を思い出させてやることにした。

「ところで“それ”は？」

瀬戸の手のなかにあった酒瓶を指摘したのだ。

「あ、せやった！隊長にパシられてたんや」

瀬戸が焦ったように言うのとちょうど同じくして、五番隊隊長の武田が赤い顔で部屋から顔を覗かせた。

「じゅ〜んペー！…！」

「すぐ行きます〜！！！」

目つきと声から見て武田は相当酔っているらしい。よく見ると瀬戸もほんのり顔が赤い。

「こんな時間から酒ですか？」

まだ夕食前、日も落ちきっていないというのに…。

一色が笑顔ながら少々呆れたように言うと、瀬戸も呆れ顔を返した。

「そ。うちの隊長、よお飲むねや〜。付き合うのも大変やわ」

「ほどほどになさいね」

「お〜。ほなな」

話もちょうど終わったところでもう一度武田の聲がして、瀬戸は急いで駆けていった。

「すみません。お待たせしました〜」

武田は、おせえよ、と瀬戸の手から酒瓶を引ったくり、すっかり座った目で瀬戸に問いかけた。

「お前、一色と同期だったか？仲いいの？」

「ああ、ハイ〜。仲ええつちゅーか…同じ関西出身やし…？」

瀬戸の答えははっきりしないから、多分こいつが一方的に絡んでい

るんだろう。

聞いたはいいがさほど興味がなかったのか、武田は、ふん、と軽く返すと瀬戸を自分の前に座らせた。

「まあ、そんなことはいい。飲むぞー!!」

「はい」

カチン、とおちよこを鳴らすと、長い長い晩酌の時間が始まった。

五番隊（後書き）

武田さんがどんな人か分かんないですが、
実在した武田さんはお喋りな人だったみたいなのでそうしました。

原作でも出たことありましたっけ…？

悪い知らせ

「夜の巡回増えたよな〜」

夜の街、ぶらぶらと巡回業務にあたるふたりの隊士のうち、ひとりが愚痴を零す。

「副長だよ。最近いつつも敵に逃げられるだろ？結構上からお叱り受けてるみたいだよ〜」

そう。ここ数日、土方の命で隊士たちは日夜巡回に駆り出された。今までもしていなかった訳ではないが、最近は巡回に出る数も、時間も増やされている。

「まあさすがにこんだけ失態が続くとな〜」

「だよな〜」

隊士たちが気の抜けた顔で談笑しながらだらだらと歩いている、と…。

「なあにだべってんだ？あア？」

「ふ、ふふ副長！」

「す、すみません！！」

近頃、隊士たちはすっかり弛んでいた。

伊東の件から大きな事件もなく、というか事件になる前に逃げられるのだが、小競り合いはあってもある程度の平和が続いていたからだろうか。

これなら、無能と言われても仕方がない。

土方はため息をついて眉間を抑えた。

「ったく…散歩じゃねえんだぞ…。ところでお前ら、総悟見なかったか？」

そういえば、土方の巡回のペアは沖田だったはず。

「えっ？また逃げられ…じゃなくてはぐれたんスか？」

沖田が勝手に消えるのはいつものこと。だからつい口を滑らせかけたこの隊士は自分の言葉を慌てて訂正した。

「…見てねえならいい。さっさと仕事戻れ」

土方はとりあえず聞き流してくれたいらしい。

ふたりの隊士は安堵して、はい！と敬礼をして持ち場に戻った。

「総悟の奴…どこ行きやがった」

・
・
・

巡回中、近藤がペアの隊士と缶コーヒー片手にしばし中休みをとっている、正面の路地を見慣れた栗毛が横切った。

ペアの隊士を待たせ追いかけると思った通り、沖田がひとり歩いていた。

「総悟？何してるんだ？確かトシと巡回じゃなかったか」

近藤に気付いた沖田は少しばつが悪そうな顔を見ると、目を逸らし呟いた。

「…はぐれちまったんでさア」

「そうか？じゃあ電話して…」「いいです」「」

今の時代は便利だ。はぐれたって、ボタン数プッシュでお互いの位置を確認できる。

そう思い懐から携帯を取り出した近藤の手を沖田が止める。

「…？どうした」

「何で最近ヤローとはっぴかりペアなんですか。他の奴らはちゃんとローテーションでしょ」

沖田はまるで拗ねた子どものように眉を寄せて言う。確かに元々行動を共にすることが多かったが、最近は特にそれが顕著だ。恐らく、意図的なものだろう。

土方からその意図は聞いているであろう近藤はあからさまに困った態度でしどろもどろに答えた。

「それはその…お前の事が好きなんじゃないか？」

「気色悪いこと言わねえで下せえ」

返事に困ったらしい近藤はそのまま沖田に尋ね返す。

「お前こそ…最近いつも俺たちを避けてやしないか？単独行動ばかりして」

沖田の眉がほんの少し、ぴくりと微かに動く。

「俺アいつもこんな感じですよ」

「違うな」

近藤は、先程とは違ってかわって真剣な顔で沖田を見遣る。

「何が…」

沖田が言いかけたとき、近藤の手の平の携帯が鳴った。

「はい。ん？ザキか。…おい、落ち着いて話せ！」

電話の向こうの山崎は相当慌てているらしい。

傍にいる沖田には内容は聞こえないが、電話越しに漏れる声からあちら側の緊迫した状況が伝わってくる。

「何！？トシが！？」

近藤の口から、今はあまり聞きたくなかった名前が飛び出す。

近藤の表情がみるみる固くなる…。

土方ヤローに何かあった。

近藤が電話を切るのを待ちきれず、沖田は横から問いかける。

「どうしたんです？」

近藤は電話に耳を当てたまま、青い顔でこちらを向いた。

「トシが……やられたー!」

と根性(前書き)

戦闘シーンは苦手です…。

ど根性

やられた…。

怪しい奴を見つけて後を追ったら、これだ。

最近敵に逃げられてばかりで躍起になっていたからかもしれない。

これ以上真選組に、近藤さんに泥を塗るわけにはいかない、そんな気持ちからだったのかもしれない。

こんな簡単な罠にかかるとは。

とある港の倉庫街…このドンパチにはうってつけの場所で、気が付くと土方は数十人の浪士たちに囲まれていた。

単独行動中は敵を見つけても深追いはするな…。いつも部下には言ってきたことだ。

まさか自分への教訓になるなんてな。

土方は、ふつと自嘲ぎみに笑った。

「何が可笑しい？」

危機的状況にもかかわらず笑みを浮かべる土方に、取り囲む浪士たちは怪訝な顔を向ける。

「別に？そつちから来てくれるなんざ都合だと思っただけだ。…全員まとめてブタ箱送りにしてやるよ」

浪士たちは一瞬目を丸くした後、馬鹿にしたようにげらげらと笑いだした。

「ぎゃはは！手負いのくせにこの人数に一人で挑む気がア！？お笑いだぜ！」

「たった一人に倒されて笑い者になんのはてめえらだ（やつべえええ！携帯忘れたアアア！！）」

何言ってるの？俺、なんて思いながらも携帯れんらくしゅだんを持たない土方は刀を構えるしかない。邪魔なギプスを放り投げて左手に刀を持つ。

それを確認して、周りの男たちも一斉に刀を構えた。

「たたみかける！」

「ふん。手間が省けるぜ（あー。ヤベーなこりゃ死ぬかも）」

土方の心の声なんて知るよしもない浪士たちは、一斉に斬りかかってくる。

ガキイイーン！！

耳をつんざく金属音がしたかと思うと、ゴミくずのように数人の男が吹っ飛んだ。

「何だ。腕はたいしたことねえな」

ゴミくずたちの中心で、土方が笑う。

これなら…。

なんとか蹴散らせる、そう思い始めた時、パン、と音がして黒い弾が土方の右頬を掠めた。

「銃弾！？またかよっ！！」

周囲を見回すと、幾人かの浪士たちが刀を捨て、代わりに短銃を構えている。

「ちっ…侍なら刀で勝負しろってんだ」

苛立ちぎみに言う土方だったが、自分を取り囲む連中はたった一人に数十人で向かってくる奴らだ。そもそも土道なんて持ち合わせてはいないだろう。

銃弾を刀で弾き、そのまま器用に体をねじって斬りかかってくる浪士をいなす。

浪士たちは卑怯者らしく土方の痛んだ右側ばかりを狙ってくる。

自分の右側、振り下ろされる刀の柄つかごと浪士の手を掴んで引っ張り倒す。

そこまではよかったが…。

「…っつー!!」

浪士を引っ張った衝撃で、撃たれた右腕に痛みが走って土方は一瞬だけ、集中を途切れさせてしまった。

これがいけなかった。

動きを止めようと土方の足を狙って飛んでくる弾丸を、ギリギリのところまで避け損なう。

左の足に衝撃が走り、土方は、ぐ、と唸って膝をついた。

「今だ！かかれ！」

ここぞとばかりに浪士たちは一斉に飛び掛かってくる。

こんな単純な畏にかかって死ぬなんざ、それこそ真選組副長の名折れだ。

傷は痛い。戦局は不利。

だけど引く訳にはいかない。

泥臭い田舎侍の、ど根性つてヤツを見せてやるっじゃねえか。

土方は痛みに堪え、左手の刀をぐっと握った。

・
・
・
・

気が付くと辺りは血の海。

ぜえぜえと肩で息をして、意地だけでそこに意識を留めている、そんな感じだ。

血だまりの中に立つ自分はきつと酷い顔をしているだろう。

「化け物だ……」

血だらけでゆらりゆらりと揺れながらもこちらを睨みつける土方に、生き残った浪士のひとりが呟いた。

土方から発される気迫は、まばらに残る浪士たちにこれ以上の攻撃を憚はばからせた。

男のうち数人が、ひ、と後ずさる。

「じ、冗談じゃねえ……！」

「金より命だ……！」

ひとりの浪士がその場を逃げ出すと、他の浪士たちも一斉に逃げいく。

もう動くものはなくなったそこで、土方はどさりと崩れ落ちた。

素直じゃない

病院の薄暗い廊下。

ぼうつと灯る手術中のランプは、電気が切れかかっているのか頼りなげに光を放っている。

山崎から知らせを受けて駆け付けた近藤は、このランプを見ながら、そわそわと立ったり座ったりを繰り返している。傍らには同じく心配そうに立つ山崎と、落ち着いた様子で、だが苦痛とも取れるような苦い表情を浮かべた沖田が座っている。

と、ランプが消えて重厚感ある扉が開いた。

「あの、トシは…」

扉から現れた医師に、近藤が一番に駆け寄る。

「大丈夫。一命は取り留めました。うまく体を庇ったんでしょう。後遺症の残る可能性もほぼないかと」

マスクを取った医師の上がった口角を見て、近藤はやっと安堵の息をついた。

続いて手術室から現れたストレッチャーに駆け寄ろうとすると、明日には面会できますよ、と医師にとめられてしまった。

「ありがとうございますっ」

近藤、そして山崎は医師に礼を言つと、ようやく椅子に腰を落ち着かせた。

「はあ。お前から連絡受けたときは心臓が止まるかと思つたぞ。まるでトシが死んだみたいに言うから」

落ち着きを取り戻した近藤が、山崎をからかうように言う。

「いや、あれはビビりますって！！副長、血だらけでぴくりとも動かなかつたんですから！ホントもうちょっと発見が遅かつたらヤバかつたですね…」

自分がかかなり動転していたのを思い起こして、山崎は照れ笑いを浮かべながら言い訳するように返した。

「なんにしても助かってよかった」

近藤がいつもの笑顔を向けると、山崎も緊張の緩んだ顔で、はい、

と答えた。

「でもまあ…片腕で、しかも一人でよくあんな大量の攘夷浪士を…
やっぱ恐ろしい人ですね」

副長の携帯が繋がらない、そう思って仕方なく周辺を捜し回っていた山崎が目にしたのは、自分が捜していた人物が血だらけで横たわる姿だった。

周辺には同じく血だらけでそこらに転がる大量の浪人衆。

浪士の中には苦しげに呻く連中もいたが、中央の土方はピクリとも動かずにそこにいた。

あまりの光景に気が動転して、山崎は救急車を呼ぶのも忘れて近藤に電話をかけていたのだ。

「あ、すみません。ちょっと入院の手続きとかしてきます」

「ん？ああ、悪いな」

山崎は急に思い出したように言うと、病院の暗い廊下の先に消えていった。

「総悟、とりあえず今日は帰るぞ」

近藤は再度、ふう、と息をつくくと、隣でやけに大人しく座る沖田に声をかける。

「…総悟？」

黙ったままの沖田に、近藤が不思議そうに問いかける。

「…俺のせい、ですよね」

しばらく黙っていた沖田にもう一度声をかけようとした時、その沖田がぽつりと呟いた。

「ん？」

「片腕の土方さんを一人にしゃした…」

視線を落としこちらを見ない沖田に、近藤は、こいつは全く、と少し呆れたように笑った。

「…トシにも責任はあるさ。手負いでぶらついて…あいつはもーちよっと普段からいろんな奴に怨みをかってる事を自覚しねえとな」

沖田は一瞬、驚いたように大きな目で近藤を見ると、またすぐその目を逸らす。

「…近藤さんもいろいろ標的にされてるでしょ」

「ははっ。お前もな。名が売ればしょうがねえよ。…今回の事だつて自分が狙われてるから…トシがお前を庇って撃たれたから…これ以上巻き込まないために、俺たちを避けてたんだらう？」

沖田の単独行動の理由^{わけ}…。

近藤はとうに気が付いていたらしい。
と、いうことは当然土方も…。

「…土方さんは…俺が狙われてるから俺とばかりペア組みたがったんでしょ」

「そうだな」

「片腕のくせに…他人護ろうなんざ、馬鹿ですよ」

「…そうだな」

普段命を狙っている自分を助けるために躍起になるなんて、馬鹿な人だ。

そんな馬鹿を巻き込まないように避けていたのに。

「そついでと」が…嫌いです」

お互いを気にかけてはいるくせにいつもいがみ合う。

近藤は素直じゃないふたりに、やれやれ、と苦笑いを浮かべたのだ
った。

目覚め

死んだ、と、思った。

この意識はどこにあるのだろう。ひょっとして、あの世にでも行く途中なのか。

ぼんやりそんな事を考えていると、ふいに激痛に襲われて、土方は目を醒ました。

どうやらまだ死んではいなかったらしい。

痛む体を無理矢理起こして辺りを見回すと、ここが病院であることが分かった。

自分に起こったことを思い出そうとしばらくぼんやりしていると、病室の入口から賑やかな声が飛んできた。

「おお、トシ！目を醒ましたか！」

「近藤さん」

近藤はにこにこ笑ってこちらに近付くと、手にした大きなカゴをベットの傍らの棚に載せた。

「これ、みんなから。見舞いだ」

カゴの中には溢れんばかりのマヨネーズ。

「こつちの特大業務用が俺、明太子入りが総悟、カロリーハーフが…」

「あ、いや…もういい。サンキュ」

確かにマヨネーズは好きだが見舞いの品が僅か数百円ってどうなんだろう。

土方が複雑な思いでカゴを見つめているのを特に気にも止めずに、近藤は話し出した。

「傷はどうだ？」

「大分落ち着いてるが…しばらくは使い物になりそうもねえな」

記憶はないが、自分は随分眠っていたらしい。あちこちにある傷は、まだ痛むが薄い皮で塞がっているらしかった。

だがやはり、まだ戦うどころか自由に動き回るのもキツそうだ。

話しているうちに傷の経緯を思い出して、土方は申し訳なさそうに

呟いた。

「…悪い。馬鹿なことして迷惑かける」

「いや、お前のおかげで久しぶりに浪人を大量検挙できた。でもまあ、動かねえでできる仕事はやってもらうぞ。今まで任せつきりだったから全然わからん」

そう言うと近藤はどこからか出してきた大量の書類を土方の目の前、備え付けの机にどさつと積み上げた。

土方は思わず顔を引きつらせる。

それもそのはず、積み上げられた書類は本当に大量だった。

その容赦のない量は土方に、本当は単独行動のこと怒ってんじゃねえの？、と思わせるほどのもの…。

「…そういや、総悟は？」

土方は書類から目を背けて近藤に尋ねる。

自分がこのザマだが、確か沖田も狙われていた。

心配しているのか探るように尋ねてくる土方に、近藤は、安心しろ、とニカつと笑った。

「今日は非番だから屯所で寝てるよ。一緒に来いって言ったんだがな。相変わらず単独行動しようとするから、巡回は俺とペアだ」

「そうか。だったら大丈夫だな」

土方が、ふつと一息ついたところで、また騒がしい声がひとつ、部屋に入ってきた。

「副長、お見舞いきました！」

「山崎か」

部屋に入るなり、山崎は近藤の方を向いた。

「あ、局長。とっつあんが電話繋がらないってキレてます」

「ま、まじで？病院だから電源切ってたんだ。ちょっと電話してくる！」

そう言うと近藤は、焦った様子で部屋を出て行った。

出て行く近藤を目だけで見送ると、山崎はポケットから取り出したあるモノを土方に手渡した。

「はい副長。お見舞いです」

黒ごまマヨネーズ……。

またマニアックな……。

「…サンキユ」

「またも微妙な顔をする土方だったが山崎は気付かずに、報告を、とガサガサ懐を探ってメモを取り出した。」

「副長を襲った浪士たちですが…特にどこの派閥の者だったのでないそうです。生き残った奴に尋問しても、知らない男に金で雇われた、の一点張りです…」

「そついや言ってたな。金より命、とか」

「それに、と土方は付け足す。」

「奴ら、結構いい武器使ってたな…ありゃそんじょそこらのモンが用意できる代物じゃないぜ」

「それです。現場に残された銃の型を調べたんですが…市場ではお目にかかれない高価なもの…それこそ幕府か朝廷か、力のある役人、商人にしか手に入らないような…」

「土方は考えるように目を細め、ふん、と鼻で笑う。」

「いよいよあの四人が怪しいな。調査は進んでるのか」

「そうですね…明日からちょっと西へ行こうかと」

「京都に大阪、か」

京都は一色の、大阪は瀬戸の故郷だ。

土方の問いに山崎は、こくり、と頷いて話し続ける。

「今日はこれから元入国管理局の局長と話をさせていただきます」

「そーか。頼んだぞ」

「はい。それじゃ、お大事に」

土方が、おう、と短く返すのを見届けて、山崎は踵を返す。

「山崎」

なぜだか土方に呼び止められて、山崎は立ち止まり振り返る。

「はい？」

「サンキュな」

突然のお礼に、なんだっけ？と一瞬考える。調査は仕事だし、この

人はいつも^{ひん}勞いの言葉なんてくれない。マヨネーズのお礼はもらっ
たし…。

ああ、今回助けたことが。

やっと訳が分かって、山崎は、ニッと笑った。

「…いーえっ」

・
・
・

「局長、副長に護衛付けた方がよくないですか？」

「ん？」

病院からの帰り道、山崎は電話で松平に怒鳴られてヘトヘトになっ
ていた近藤と合流し、話しかけた。

「今回の件：明らかに副長狙われてたでしょ。武器も場所も事前に
しっかり用意されてたし…。それに尋問した浪士たちが言ったん
です。『副長を殺せ』と言われたって」

さつきは怪我人を気遣って一応ふせておいたが、自分が狙われている
事実には土方自身も薄々感じているだろう。

近藤も護衛には賛成だが、ううん、と唸る。

「そうだなあ…だがあいつ、素直に護衛なんか付けるかな」

そんなことに隊士を割くくらいなら仕事しろ、土方ならそう言うだ
ろう。

山崎も少し考えて、やがて、あ、と声をあげた。

「そうだ。隊士に怪我したフリさせて入院させましょうか」

「そりゃあいい！敵の目も欺ける」

近藤も山崎の案に賛成する。

そうと決まればさっそく準備を、そう思ったが、山崎は言いづらそ
うに近藤を見た。

「ただ俺、これからちょっとやるのが…」

「そうか？じゃあ俺が手配しよう」

近藤はいともあっさりこの雑務を引き受ける。

組織のトップに雑用を振るのもどうかと思ったが、山崎は、すいません、と一言残すと仕事へと向かった。

元入国管理局局長

「おかしいな…この辺りにいるって聞いたんだけど…」

近藤と別れた後、山崎は公園に来ていた。

公園のある一角には、何と云うか…世捨て人たちのダンボールの家がある。

次々とその“家”をめくつてく山崎だが、目当ての人物どころか人の姿すら見つけられない。

「いないなあ…こつちもいな…」

さすがにこんな小さな箱にはいないだろう。そう思いつつめぐりあげた何個目かのみかん箱。

箱いっぱい詰まった中の人物と目が合う。
ぐるぐる眼鏡の、ムサシっぽい人…。

「……………」
「……………」

そつとみかん箱のフタを下ろす。

何にも見なかった。うん。

「…いないなあ」

山崎が再びダンボールめくりに戻ると、後ろから声をかけられた。

「ジミー君何してんの？」

振り返った先にいたのは哀れんだような目を向ける…

「だ、旦那っ！」

「何か君も…大変だね。頑張ってる」

ちよつと焦った様子の山崎を見て、何も見てないからね、とそのまま立ち去ろうとする銀時に、山崎はさらに焦ったように返す。

「いやちよつと待って！何に！？何に頑張ってる？」

「えっ…ダンボールハウス作り？仕事クビになって路上生活デビューなんでしょ？」

「違いますよっ！人捜しです！！…そう旦那、あの人も知り合いましたよね」

この銀髪と今回の捜し人は、どういう繋がりか知らないがたまに一緒にいるところを見かける。

丁度いい。事情は隠して居所だけ聞き出そう。

「ん？誰？」

「長谷川泰三さん」

そう、元入国管理局局長で、信じられないが今は無職家なしの、だ。

意外な名前に、銀時は不思議そうな表情を浮かべた後、何かを悟ったように生暖かい視線を山崎に向けた。

「長谷川さん？何だ。やっぱりダンボールハウス作り教えてもらおうじゃん」

「違いますって！ちょっと入国管理局時代の話を…ととっ！」

しまった…！

山崎は滑らせた口を急いで塞ぐも、もう遅い。

銀時はニヤリと、意地悪な笑みを浮かべた。

「…何？何か面白そうな話じゃん」

「い、いやいやいや…何でもないっ！何でもないですからっ！！」

焦る山崎に、銀時はさらに意地悪くニヤニヤと笑う。

「え〜？別にいいけど。でも長谷川さん、すっげ分かりにくいところにいるんだけどな〜。ウォーー！ばりに見つからないんだけどなあ」

「ウォ、ウォーリー…」

「そうだよ。もう『ウォーー！をさがせ』の鍵くらい見つからないよ。久しぶりに探してやろうと思ったのに全ての鍵に赤ペンで丸がつけられてた時の絶望感…昔の俺馬鹿っ！！」

「何の話ですか」

山崎が冷静さを取り戻して突っ込むと、銀時も、とにかく、と一息ついた。

「まあ見つけないの大変だから。頑張つて。ちょっと銀さんウォーリー探したくなってきた」

じゃーね〜、と手を振りどんどん小さくなっていく銀時の後ろ姿…。

これは極秘任務…。

でも、今日中にカタを付けたいしウォー　ーなんて探している暇はない…。

「あ、あの…旦那っ」

銀時は、ニヤリと笑って振り返る。

「…なに〜?」

「誰にも言わないでくださいね…?」

・
・
・

監察として、秘密は守ってきたはずだ。
でもなぜかいつもこの男相手には、なんかかんやで話してしまう。

ベンチに腰掛けたため息をつく山崎の横で、ふてぶてしく座った銀時は、ふ〜ん、と唸った。

「成る程。スパイね〜。それであんなケガしてたんだ。おたくの副長さん」

山崎は、そうですね、と軽く相槌をうち、本題に入る。
話したからにはさっさと長谷川の居場所を教えてもらわなくては。

「で、どこにいるんですか？長谷が…」

山崎が尋ねようとした丁度その時…。

「あれエ〜？銀さん。何してんの？俺ん家で」

やって来た声に名前を呼ばれた銀時はもちろん、山崎も顔を向ける。

そこには、なかなか見つからないはずの捜し人が立っていた。

「長谷川さんこそ何してたの〜？またパチンコ？」

「聞いてよ〜また負けちゃってさ」

銀時は長谷川に気付くと、特に悪びれる様子もなく談笑しはじめた。

「えっ…？あの…長谷川、さん？」

自分が騙されていた事実を確認するように、山崎が遠慮がちに声をかける。

すると、長谷川の表情がみるみる変わった。

「うわっ真選組っ！警察が俺の家に何の用だああ！俺は立ち退いてやんないからねっ！！」

最近、迷惑防止条例とか公園の管理者からの要請で、ホームレスがダンボール家を撤去される例がよく見受けられる。

長谷川は、山崎の訪問がその類のものだと思ったのだろう。

山崎は、違う、と否定しようとするも、完全に勘違いした長谷川は山崎に向かって石やら雑草やらを拾って投げつけはじめた。

「いやっ！！違っっ！！ちよっ…旦那！」

説明をする隙も与えてもらえず、山崎は事情を知る銀時に助けを求め、銀時は自分だけ安全な位置でニヤニヤ笑っているだけ。

結局攻撃が止んで話ができしたのは、長谷川が疲れた数分後のことだった。

元入国管理局局長（後書き）

『ウォー　ーをさがせ』ってまだあるのかな。

ちっちゃい時よくやりました。あいつ、赤と白のしましまとかいう
奇抜な格好してるくせになかなか見つからないんですよね…。

そんな訳で次回も『ウォーリーをさがせ』をよろしくっ！　（違っ）
笑）

噂

「何だ。それならそうと言ってくれよ〜」

「いや、言う隙が…まあいいや」

物を投げつけられて数分、やっと落ち着いた長谷川に話を聞きたいだけだ、と伝えて酒と煙草を持たせた。

それでもはじめは疑っていた長谷川だったが、やっときた銀時の助け舟もあって、ようやくと威嚇を解いた。

「瀬戸？あゝ…法務省の瀬戸誠十郎か…」

問題の四人の隊士のうちのひとり、瀬戸准平。

元入国管理局の局長である長谷川は、やはり准平の父親、誠十郎と顔見知りのようだった。

だが、長谷川は、ううん、と眉を寄せる。

「確かに入国管理局は法務省の管轄だけど…俺は局長つつつてもただのコネ入社ですぐクビになったからな。ハツの親父さんに連れられて行った食事会で一回会った程度だわ」

なんだ…。

山崎が明らかにがっかりしたように肩を落とす。

もらった酒と煙草を見遣り、さすがに申し訳なさそうに長谷川が、でも、と呟いた。

「噂程度でいいなら…。一部局内で流れていたもんだけど」

「噂？」

完全にやる気を失っていた山崎の瞳に、光が戻る。

それを確認して、長谷川はまた話し出した。

「奥さんの実家が商売人だろ？やっぱ幕府重鎮とか金持ちの天人は大切なお客様なわけだな。

だから、瀬戸は自らの権限を使って密輸品見逃したり密入国斡旋したりして自分たちの利益を上げてる…って噂だ。

まあ、確証はないがあながちただの噂でもないと思うぜ。央国星のあの馬鹿皇子がいい例だろ？」

馬鹿皇子改め八夕皇子…。

あの皇子が持ち込むえいりあんは毎回この星で問題を起こす。
長谷川にとつては人生転落の原因。

銀時も、巻き込まれた幾度かの嫌な記憶を思い出して顔をしかめた。

「あゝ…ありや完全に入国審査に引つ掛かってしかるべきだよな」

「そんなこんなで不正を取り締まる警察組織とは当然仲悪いわけだ。
最近では表面化されねえが昔は瀬戸と松平つつたら犬猿の仲で有名
だったし」

「とつとあんど…?」

思わぬところで思わぬ名前が飛び出して、山崎が声を上げる。
長谷川は、そうそう、と二、三度頷くと付け足した。

「なんか同期らしいよ。あのふたり」

ばっちり詳しい事情まで聞いていた銀時が、ふうん、と鼻を鳴らす。

「こりゃあ…立派な動機じゃねえか」

「そうですね…。調べる価値はありそうだ…。ありがとついでいま
す。長谷川さん」

山崎は顎に手を当てて少し考えると、顔を上げて長谷川に礼を言った。

「いいってことよ」

出会い頭とは打って変わっておおらかに笑う長谷川に、銀時が何となく面白くなさそうに呟いた。

「何か…初めて役に立ったんじゃないかね？」

「初めて！？そんなこと…っ！！…あるか？」

まあ、そうか？と首を傾げる長谷川に、銀時は、ちっ、と舌打ちした。

「主役の俺でさえちゃんと出てないのに何か腹立つ」

「まあ今回べつに何をすることもなく土方さんと山崎さんに絡んで無理矢理登場してるだけですもんね」

「うおっ新八っ！お前いたのかっ」

突然乱入してきた声に銀時が大袈裟に驚く。

そういえば、話している最中、キラッキラ眼鏡の反射光があったよ
うな。

新八は少し不機嫌そうに言う。

「いますよずっと。ちなみに神楽ちゃんもあつちで定春と遊んでます」

新八の指す方には、公園できゃっきゃと遊ぶ神楽と定春…。
そつだ。暇だから定春の散歩に来たんだつた。

「小説だと台詞がなきゃ抹殺されたも同然だからな…。仕方ない。
これからもその回のメインっばい奴に絡みまくるか」

あまりにがつついて登場しようとする銀時に、山崎は、この人とても主役とは思えないな、とこっさり思ったのだった。

疑惑

ぶらりぶらり、栗毛で整った顔の青年が街を歩く。

いつもはかつちりとした黒い隊服に身を包み、一小隊の長なんてしている彼だったが、今日は非番らしくラフな群青の着物に刀、といったシンプルな出で立ちだ。

青年は、何かを感じるのか時折立ち止まり、ぼんやりしてはまた歩きだす。

それを何度か繰り返した後、さて、と呟き人気のない路地裏に消えた。

見られている…。

沖田が始めにそう感じたのは、屯所から出て二、三分ほど歩いたところ、そんな時だった。

索敵能力には自信があるのに、向けられる殺気の出所がイマイチよく分からない。

と言っか、殺気が現れたり消えたりしているのだ。

ちょっと確かめてみるか…。

沖田は背後を少し気にしながら、大通りを外れ路地裏に入っていた。

「暗殺にはもってこいのところまで来てやったぜイ。何の用でイ」

腰の刀に手をかけ、挑発するように言う。

土方のことがあったところだ。若干の緊張はあるが、感じる殺気はそれ程強いものでもないし、まず気付かれている時点で大した使い手ではないだろう。

路地の入口、何かが動いた。

「こねえならこっちから…」

沖田が一步、踏み出したところで入口のそれが姿を現した。

「は、はは…バレちゃった」

ぴよこり、と顔を出したハネた髪。身を包む黒い制服は、自分がいとも着ているものと同じだ。

困ったように笑う少年の長い睫毛が揺れる。

「お前…」

現れたのは確かつい数日前、突然話しかけてきた少年だ。名は…貴寄猛、といったか。

「なんだって俺の後なんかつけてやがる」

沖田が、怪訝そうな目つきで猛を睨む。

「ええと俺、沖田隊長のファンですから」

それはこの間聞いた。でも、そんなこと理由にならない。問いかけにしどろもどろ答える猛に、沖田は語気を強める。

「男にストーカーされるたア…いい気分じゃねえな。場合によつちやあ…」

視線は猛を睨んだまま腰の刀を握り直す沖田を見て、猛はわたわたと慌てだす。

「ま、待って下さい！これには事情が…」

「事情？」

「ええと…」

猛がまた言いにくそうに口ごもると、沖田は、ふ、と息を吐いて刀を抜いた。

「わあ！言いますよ！」

自分も“武装警察”の一員。当然刀は持っているが、真選組一の剣の腕を持つこの人に自分なんか敵う訳がない。

猛は、観念したように話し出した。

「最近、沖田隊長が狙われてるって聞いて…しかも副長もあんなことがあったでしょ？で、今日沖田隊長がひとりで屯所を出ていくのを見たんで、つい…」

「お前が俺を…護るつもりだったのかイ？」

まだ疑っているのか、沖田は猛への攻撃体勢は解いたものの、抜いた刀を納めないまま意地悪に笑う。

「いえいえ、そんなおこがましいことは！ただ俺、足だけは自信あるんで何かあったら応援呼ぶくらいはできるかと」

沖田が睨むからか謙虚さゆえか、猛はぶんぶん和大袈裟に顔の前で手を振って否定した後、しょんぼりしたように下を向いた。

「俺は土方^{あいつ}みてえに携帯忘れたりしねーよ」

「そーっスよね…はは…」

少なくとも“今は”猛に敵意がないことを確認し、沖田はようやく僅かに残した敵意も解いた。

でもじゃあ、さっきまでの殺意は何だったのか。

猛^{こいつ}が、それとも他の誰かか…。

考えても今となっては分からない。

「だけどまア、狙われてんのは確かみてえだ」

沖田が呟き、また刀を構える。

猛は驚いたように沖田の視線の先、自分の背後を振り返る。

そこにいたのは…。

「！」

「真選組一番隊隊長、沖田総悟だな？」

抜き身の刀を持った、男が五人。

どうやら狙いは沖田らしい。
皆屈強な体つきで、華奢な自分たちはどうしても不利に見える。

「応援をつ…！」

先程言っていたように、沖田の助けになるため…。
応援を呼ぼうと息巻く猛を、沖田は静かに制止した。

「大丈夫だ。大した数じゃねえや。お前は邪魔になんねえように隅
つこに隠れてな」

沖田はそう言つて猛を下がらせると、前に出て刀を構える。

五人の男は一斉に沖田に飛び掛かる。

だが、所詮相手はそこらのチンピラ集団。
統率された兵士とは違い、どうしても力量によって少しずつ“ずれ
”が生じる。

一人目の男が振り下ろした刀、沖田はこれを軽々かわすと男の足を
引っ掛ける。

転びそうになる男を剣圧だけで吹っ飛ばし、二人目の男に思いつ切
りぶつける。

三人目の男が怯んだところで、背後に回って斬りつけると、怒った
残る二人が今度はできるだけ息を合わせて沖田に向かってくる。

左から来た男の刀を左手に持った鞘で払い、興奮して刀を振りかぶりすぎた右の男には、がら空きの胴体に一太刀くれてやる。

一瞬にして仲間を失った最後の男にはもう現れた時の勢いはなく、最後はあっさり沖田に斬り捨てられた。

「す、すごい…」

目の前で繰り広げられた鮮やかとも言える光景に、猛は口をあんぐりと大きく開ける。

「感心してる暇があるなら誰か呼んでこいつらしょっぴけ。俺ア今日は非番で手錠も何も持ってねえからな」

放心状態の猛の肩を、とん、と叩くと、沖田はそのまま猛の、折り重なって倒れる男たちの横を通り過ぎ路地裏を出ていく。

「は、はいっ！」

沖田に肩を叩かれた猛の方はというと、やっと我に返ったように返事をした後、男たちを連行するため携帯を取り出し応援を呼んだ。

沖田は去り際、そんな猛の様子を横目で見ながら、考える。

自分が感じていた殺意は、あの五人のチンピラが発したものであったのか…？

確かに、大した使い手ではない、殺意を感じた時はそう思ったが、本当にそうだろうか。

気配はバレバレだが、どこに潜んでいるのかは全く気付かせない。

なんと言おうか、缶蹴りでわざと鬼に自分の存在を明かしてくる奴のような、そんな感じ…。

そういった場合そいつの目的は、鬼の攪乱か、仲間を助ける、もしくは隠すことにある。

先程蹴散らしたチンピラにそんな器用なことができたとは思えない。

だとしたら、猛、か…？

猛が俺を人気がないところに誘導するため…あのチンピラたちの殺意を隠すために決して自らの位置は気取らせず、わざと殺意を漏らして自分の存在を誇示した…？

でも、だったら俺が路地裏に入った時点で自らの姿を現す必要はなかったんじゃないか。

もしかしたら俺が猛あいつに疑いを向けるように誰かが仕組んだことの可能性も…。

珍しく「ちや」「ちや」考えていると、だんだんと頭がこんがらがって
沖田は、「ちっ」と舌打ちをした。

考えすぎるのは性に合わない。

「屯所で寝なおすか…」

呟くと、沖田はそのまま帰路についた。

接触

「ちっ…」

出張準備も済んだし、そろそろ出かけるか。

山崎が小さくまとめた風呂敷を担ぎ、屯所を出発しようとしたところ…。

「ん?」

自分とは逆に屯所に向かってくる私服の沖田と目が合った。声をかけようとして、異変に気付く。

「沖田隊長!どーしたんですか!その血!」

遠目では分からなかったが、沖田の群青の着物にはところどころ血が飛び散っていた。

驚き目を白黒させる山崎とは対象的に、沖田はけろりと簡単に答えた。

「ん?あア。返り血でイ」

「って襲われたんですか!」

「あ。まアな。つーか何その荷物」

沖田はさらりと答えると、山崎が担ぐ風呂敷を指す。

どつやら沖田に怪我はないらしいが、あまりに適当に話を流されて、山崎は何となく言葉をつつかえさせつつ言った。

「えっ、あ、ああ…。今日から俺、西国の方に出張なんですよ」

「…ふーん。じゃあ、じゃが こタコ焼き味と八ッ橋買ってきて」

当然のように土産をせびる沖田に、山崎はさっきまでの心配も忘れて苦笑を浮かべた。

「遊びに行くんじゃないんですから…」

「…何しに行くんでイ」

「えっいやそれは…」

沖田の視線が、急に鋭くなる。

知らないことを言ってしまった…。一応極秘任務なんだった。

明らかに、しまった、というような表情で顔ごと目を逸らす山崎に
沖田は何かを悟ったように鼻で笑った。

「土方ヤローか。まあいいや。それより出かける前にちょっといいか」

「何ですか？」

あれ、何だかあっさり解放された。

てっきり問い詰められると思っていた山崎は、ほっとしたように答えた、が…。

「貴寄猛…って、分かるか？」

山崎の肩がびくりと揺れる。

またも答えにくい沖田の質問を、山崎はとりあえず適当に「まかそうと試みる。

「え、ええと。六番隊副隊長補佐ですよ。はは…」

苦しい受け答え…。

沖田は疑わしげに目を細めてしばらく山崎を見ると、やがて小さく呟いた。

「…分かった」

「え？なにが…」

「てめえが何か隠してることと、口止めしてる奴が誰か、だ」

「あ、あの…そのオ…何のことぞ?」

「だからてめえがこれ以上言えねーのは分かった。あとは命じた本人に直接聞くからいい」

汗だくになりながらとぼける山崎は、沖田の推定を事実だと告げていた。

それだけ言い残すと、沖田は満足したように屯所の中へ消えて行ってしまった。

「ふー…。また副長にどやされるよ」

山崎は眩き、重い気持ちを背負いながらとぼとぼと歩きだした。

・
・
・

着替えを済ませて、もうひと眠りするか、そう思った時にはもう夕食まで間もない時間となっていた。

今寝たら中途半端だと思い、沖田はなんとなく屯所内をぶらぶら散歩する。

と、目の端にやけにでかい影が映った。

なんとなく怪しいその影の主を物陰からそつと見遣ると、それはつり目で背の高い男…。

真選組の黒い隊服を着ているが、あれはどこの隊の奴だったか。

じつと観察していると、その隊士はキョロキョロと周囲を警戒するように見回すと、なぜだか今は誰もいないはずの副長室に入っていた。

「?」

何のつもりだろう。

隠れて部屋を覗き見る沖田に気付くことなく、隊士は土方の机に何かを置くと、すぐにそそくさと部屋から出ていった。

隊士が十分に離れたのを確認し、沖田は副長室に入り先程隊士が机に置いたそれに目を向ける。

「これは…」

それは、土方の携帯だった。

先日土方はこいつを忘れたせいで応援を呼べず、一人で戦うはめになったんだっただか。

なぜあいつがこれを？

「どづいづこつたイ…」

沖田は携帯を拾い上げ、隊士の消えた方に怪訝そうな眼差しを向けた。

・
・
・

「は〜」

いつまでたつても片付かない書類の山に、土方はうんざりして今日何回目かのため息をついた。

書類を持ってきた近藤も、別に一日二日でこれをやれと言っていた訳ではないが、何もしないのはしないで病人生活はかなり退屈だった。

右隣は無口なガキだし、左隣にいたじいさんは移動か退院か、とりあえずどこかへ消えた。

早く体を治すには休養するのが一番いいことは分かっているのだが、目の前の書類の数が自分の入院期間のように思えて、さっさと終わらせてしまいたくなる。

土方がまた大きなため息をつくとき、空いたはずの左のベッドから声がした。

「ため息をつくとき幸せが逃げてしまいますよ」

いつの間そこに来たのか、ベッドの上には若い男がいた。

隣の気配に気付かないほどに自分は書類に熱中していたのだろうか。

いや、そんなことより…。

「お前は…」

「僕のこと、お分かりですか」

にこにここと笑う色白で面長の顔、切れ長の目…。
最近よく見た顔が、そこにいた。

「そりゃあ自分で面接した奴くらいはな。五番隊の一色隆太郎、だ
ろ？」

本当は写真を見たから覚えていただけだか…。

土方が言うと、一色はまた、にこりと笑って衣服の隙間から包帯の
巻かれた胴体を見せた。

「はい。ちょっとへマをできてしまった。隣で少し、お世話になります」

「…そーか」

怪我は嘘だな…。

土方は長年の勘ですぐに見抜く。

恐らく護衛…。しかしすごいタイミングだな…手配したのは山崎の奴か？

怪しむ心を気取られないように、土方はまた書類に顔を向ける。

敵だと決まった訳ではないが、隣にいられてはおちおち寝てもらえない。

だが、怪しいこの男を直々に見張れる。

土方のそんな思いを知ってか知らずか、一色はまたにっこりと微笑んだ。

接触（後書き）

みんな怪しい＼（＾Ｏ＾）／笑

商いの国

商いの国…。

天下の台所、なんて二つ名があるのも頷ける。

建ち並ぶ商店の軒先から、がやがやと賑やかな声が飛び交う。
色とりどりの店の装飾は、いかにも派手好きなのこの土地に似合う。

「活気があるなあ〜」

山崎は大阪に来ていた。

一瞬、仕事のことなんて忘れて食べ歩きでもしようか、そんな思いが浮かぶ。

だが思いが浮かぶ度に一緒に土方の顔も浮かび、ぶんぶんと首を振った。

まじめに、まじめに。

そう思った矢先、美味しそうなソースの香りとともに大きな声に呼び止められた。

「兄ちゃん！ちょっと食べて行かへん？ウチのお好みは世界一やで

」

店先から手招きする割烹着の女。その後ろの扉からは、確かに食欲をそそる大阪名物、お好み焼きの香りが漏れだす。

「や、いいです」

山崎が香りの誘惑に負けそうになりながらもなんとか断ると、その短い言葉のイントネーションで女が、はっとした。

「なんや兄ちゃん東のモンかいな！ほんなら尚更お好み食べなあかんやん！」

「いいですって。あんぱん常備してるんで。それより、瀬戸さんって家この辺にあります？」

しつこく絡む女をかわそうと話題を無理矢理自分に持っていく。

女は少し驚いて、瀬戸はんのお客さん？にしては身なりが…、と呟いて不躰にも山崎を頭の先から足の先まで、値踏みするように視線を上下させた。

「いやあ、その…奉公です。奉公に来たんですよ」

「ああ。下働きかいな。兄ちゃんも大変やな」

「はは…」

女は納得して哀れんだような顔をすると、店の奥から地図まで持ってきて道を教えてくれた。

「ありがとうございます。ご婦人」

「いややわ〜ご婦人やて。あんた、ええ子そうやから教えといたるわ」

「？」

山崎が丁寧^{ていねい}に礼を言うと、女は“ご婦人”の響きが気に入ったのか、上機嫌で話した。

「瀬戸家は今、胡平様^{こへい}、あ、あそこの七代目の頭首^{かぶ}な。その胡平様^{こへい}がご病気^{まひ}やから娘の真幸様^{まゆき}が取り仕切つとんねんけど…これが気の強いお人^{ひと}でな。よお警察とも喧嘩^{けんか}しとんねや」

「警察と…？」

「やっぱりな、あそこまでの商売人^{しょうばい}やと色んな裏の人^{うら}らと繋がり持つみたいなんや。で、当然警察に睨^{にら}まれるやろ？そのたんびに喧嘩^{けんか}してるんやで」

「へ、へえ…」

「しかも真幸様の旦那は法務省のお偉方ときた。密輸密売し放題つて噂や。お江戸の警察はほんま何やってるんやろね」

興奮ぎみに話す女に、そのお江戸の警察は僕らです、なんて言えるはずもなく山崎は、はは…、と苦笑いをした。

その笑いが萎縮したためのものだと勘違いしたらしく、女はバシバシと励ますように山崎を叩く。

「そんなビビらんで大丈夫やて！下働きが真幸様に会う機会なんかほとんどないわ！」

「は、はア…」

痛すぎる鼓舞に若干引きながらも山崎は、頑張りや、なんて手を振る女に一礼すると、そのまま瀬戸家へ向かった。

商いの国（後書き）

くおまけ

銀「ね、俺ら次いつ出れんの？」

新「この間出たじゃないですか。さりげに銀さんだけ二話に渡って台詞あったでしょ」

神「私なんてここ最近しゃべってもないアル」

銀「あんなんちヨイ役じゃん。ジミー君なんか電話出演も入れたらほぼ出さずぱりだよ。しかも今回から数話ジミー君回が続くらしいし。誰が喜ぶの？」

新「…まあ、作者が真選組メインを公言してるから仕方ないんじゃないですか。それに山崎さんにだってファンはいますよ」

神「あんなモン組織票ネ」

近「一番可哀相なの俺じゃない？メインの大將なのになんか独りだけ蚊帳の外だし…てか俺も命狙われリストに入ってたはずなのに何か…」

銀「げ！真選組が出てくんな！脇役でも俺らより出てるだろ！」

神「そうアル！ここは私たちの憩いの場！」

神銀「立ち去れ」（呪）」「

山「なんか…必死だなあ…」

瀬戸家

瀬戸家前。

「うわぁ…すごいな」

山崎の目の前には、物凄くでかくて、物凄く派手な建物が建っていた。

五階建てくらいで高さはそれほどないが、敷地面積がとにかく広い。視力云々の問題ではなく、地上からでは家の全景を見ることができないほどだ。

城を模したその建物は、一階全てが商店、その上にはオフィス階が続く、最上階に瀬戸家の人間の生活スペースがあるらしかった。

一階の商店は外側こそ庶民にも解放的だが、奥に行くほど金持ちしか入れない特別な店になるらしく、山崎も途中で警備員にそれ以上の進行を阻まれた。

山崎は、死角からそつとその侵入禁止区域に石を投げ入れてみる。

《一階“ろ・九五六”侵入者》

警備員のひとりが無線機で何かを伝えた瞬間、物凄い数の警備員が集まり周囲を警戒して見回した後、石に気が付く。

安全が確認されると警備員たちは特に話をするともなく静かに石を回収してまたどこかへ消えた。

「こ、怖…っ！センサーでも付いてるのかな…。こりゃ侵入は無理だな」

瀬戸家についての話は道中、幾人かの街の人間に聞いたが、どれもよくない噂ばかりだった。

だがそれらはやはり全てが噂の範囲内で、土方に報告できそうなものはあまりない。

大阪まできて収穫ゼロってやばくね？

山崎がそんなことを考えながら瀬戸家の外壁沿いを目的もなく歩いていると…。

「ええ加減にしてくれんか！」

威勢のいい、女の声。

物陰に身を隠し声のした方を見遣ると、以前瀬戸准平の素性調査をした時に目にした顔が、裏口のような所から現れた。

准平の母でこの当主の娘、瀬戸真幸だ。

裏口からは他に、追い出されるような形で制服の男が二人、飛び出してきた。

「ウチは真面目に商売やつとるだけや。警察なんか介入されることはあらへんで！」

真幸は怒りをあらわにして制服二人を怒鳴る。
どうやら二人組は地元の警察らしい。

「いや、だからっ！」

「しかしですね……」

真幸がギャーギャーと怒鳴り続けるものだから、警察官は言い分を伝えるどころか言葉を挟むことすらできない。

「あれが瀬戸真幸……」

山崎が呟く。

短く整えられた黒髪に大きな黒目がちの目、高価そうな着物の彼女

は一応美人の部類に入るのだろうが、鬼のような形相でそれも台なしだ。

真幸に追い立てられて、結局警察官二人は何も言い返すこともできずに締め出された。

「はあ…勘弁してほしいのはこつちやわ。あんまり手え出すな言われたり不正は暴け言われたり…ほんでなんやかんやで来たら追い返されるだけやろ？」

仕方なく帰路につく二人組のひとりがため息をつきながら愚痴を零すと、横のもうひとりも苦笑いをして答える。

「要するにあれや。手え出すな言うんは甘い汁啜つとる連中、出せ言うんはおこぼれ貰えへんかった連中やろ」

「警察も腐つたなあ〜」

警察官ふたりは、ほんまになあ〜、なんて言いつつもはや諦めたようにケラケラ笑う。

腐った上層部にも、それを笑って済ます彼らにも…。

こつそりと聞いていた山崎はなんとも言えない悔しさのようなものを感じ拳を握った。

お喋りな警察官たちはさらに話を続ける。

「でも甘い汁啜ってた連中も瀬戸が最近力付けすぎやー言うて危機感持つとるらしいで。なんや中央までもが捜査に乗り出したとか」

「やから最近はお撃命令の方が増えてんのか」

「そーゆーこつちや。なんや近々中央の松平公お抱えの真選組まで動き出すって噂もあるみたいやわ」

まさかのタイミングで自分たちの名を出され、山崎は思わず声を上げそうになる。

もちろんそんな話聞いていない。

だが、そこまで話が広がるほど瀬戸が力をつけているのかもしれない。

「真選組かア〜。あ〜でもあれの婿は法務省のモンやからな〜。瀬戸家が力持てば持つほど婿の中央での権力も上がる訳や。自分らの地位脅かすかもしれんからそりや必死にもなるわな」

「ほんま下つ端は辛いでえ〜」

成る程ね…。

またへらへら笑いながら遠ざかっていく二人組を見送り、目の前の馬鹿でかい屋敷を眺めて、山崎はため息をついた。

「にしても…西の人間はよく喋るなあ」

瀬戸家（後書き）

銀「出張回か…通りすがりに偶然を装って“なにやってんの”で出演計画はムリがあるな」

新「あんたいつもそんなことしてたんだけ…」

神「可哀相な主人公ネ」

企む影、近づく影

大阪から京都に着いた時には、すっかり夜中になっていた。

天人襲来から一気に文明が進み、建物は高層化し、きらびやかなネオンが光る江戸や大阪とは違い、ここ京都は未だ時間が止まったかのように古いにしえからの姿をほぼそのままの状態で保っている。

きらきらかに装飾された豪華な建物も洒落た店もない。だがそれが逆に、他を寄せ付けない高貴さと魅力を醸し出している。

「あれが御所、かあ」

山崎は建物から少し離れた丘から双眼鏡で天皇の住まい、京都御所を見ていた。

建物を囲うようにしてつくられたお堀は、現代の技術をもってすれば簡単に乗り越えられそうだ。

だが、御所自体の神聖な雰囲気と、瀬戸家に負けず劣らずの数の警備員が、簡単に侵入できないことを物語っている。

「流石にすごい警備だ……。かといって申請したって俺みたいのが中に入るのは無理だしなあ……」

どうしたものと考えるも答えは出ず、退屈してバードウォッチングなんて始めようとした時、御所にほど近い小さな竹林にちらりと動く影が見えて、双眼鏡を動かす。

「あれは…一色家の頭首、宗松公…」

よく見ると口元が動いている。誰かと話している…？

「！」

宗松が少し動いた隙間から、対面に立つ女が見えた。

あれは確か、天皇の弟君おとうじの乳母…。

こんな夜中に二人きりでいったい何を…？
何にしても怪しいことに変わりはない。

行ってみよう。

山崎は立ち上がり、急ぎ音を立てないように竹林へと向かった。

・
・
・
・

「ところで宗松…あんさんの息子…うまくやってるんやろうな」

「ええ」

山崎が現場に向かうと、タイミングよく談笑を終えた二人がちょうど話の本題に入る、といったところだった。

山崎は持ち前の地味パワーで、気付かれないが会話は聞こえるギリギリの位置まで気配を断ち近付く。

「組織を壊すには足場から、言うてな」

壊す…？

穏やかではない乳母の呟きに緊張が走る。

山崎は全神経を耳に集中させる。

「早く孝暗様たかくらがお国の頂点に立つんを見たいわあ」

孝暗様、天皇の弟君だ。

この乳母は幕府から朝廷へ、実権を取り戻そうと考えているらしい。

だけど、今の天皇は兄の彰治様のはず。

弟君に政権がまわってくることはない。

山崎の思いを代弁するように、宗松が言う。

「彰治様は…どうしはるんで？」

「あれはあかん。征夷大將軍の坊ほん以上にただの人形や。適当に始末するしかないんちゃう。やっぱり孝暗様こそ頂点に立つに相応しい、そうやる？」

「左様ですな」

この乳母、幕府のみならず現天皇の彰治様まで手にかけるつもりらしい。

腹を痛めた子ではないが育ての親として、孝暗様に並々ならぬ愛情を感じているのだろう。

乳母は更に続ける。

「何百年…朝廷が国を治めてきたのに將軍やら天人やら…あんなポツと出の新参者にでかい顔されるなんか阿呆らしいやないの」

そう言つと、乳母は念を押すように宗松を睨む。

「せやから隆には頑張ってもらわなあかねや」

睨まれた宗松は特に動じた様子もなく、はい、と返すと少し笑って朗報を告げた。

「隆太郎ですが…今、副長の護衛をしとるそうですわ」

！

「そらええな！寝首搔くにはもってこいやないの」

護衛…？

それってまさか、近藤に依頼した副長の護衛…？

山崎が混乱している間に、話は収束へ向かう。

「朝廷が権力を取り戻した暁には…あんたもそれなりの地位に引き上げたさかいにな」

「ありがたき幸せ」

話を終え林から出ていく二人から慌てて隠れ、山崎は思う。

なんてこった…。

土方が“何者か”に命を狙われているから護衛を付けるよう、近藤に提案した。
それなのにもよって狙っているかもしれない張本人を護衛に付けるなんて…。

いや、ごちゃごちゃ考えてる場合じゃない…！

「副長に電話…って、病院だからダメじゃん！じゃあ、局長に…」

しかし、近藤の電話は繋がらない…。

だんだんと焦りが増してくる。

一刻も早く帰らなくては。

副長…っ！

・
・
・

すっかり夜も更けた、江戸の街。

真つ当な人間は明日に備えて眠っている時間だから、当然ここ、大江戸病院の患者たちも皆すやすやと寝息を立てている。

もちろん土方も、昼間書類と睨めっこしていて疲れたのだろう。
目を閉じ、静かに肩を上下させている。

そんななか、動く影がひとつ。

影はそっとベッドを降り、寝ている隣の男に手を伸ばす。

完全に眠っている…。

伸ばした手が首元へ進み、影が怪しく笑みを浮かべた。

突然の訪問者

眠るのは重傷の怪我人。

片手で喉元に体重をかけ、片手で体を押さえ付けければ簡単にその上
下する肩の動きは止められるだろう。

男は残酷なほど冷たい眼差しで寝ている男に手をのばす…。

「何のマネだ？」

ゆらりと睫毛が揺れたかと思うと、男と男の目が合った。

土方の開いた瞳孔が睨むように手の主を見上げる。

「起きてらしたんですか」

「今な」

にこり、と微笑んで一色は別段乱れもしない土方の布団を整える。

「お風邪をひかれては困りますから」

「護衛として、か？」

一色は“護衛”という言葉にわざとらしく驚き、やがてまた目を細めた。

「バレていましたか」

「隣のじいさんが突然どいたし、タイミング的にもな。それにお前常に刀持ってるだろ」

そう言つて土方が目を向けた辺りから、一色はおもむろに脇差を取り出して、降参した、というように息をついた。

「その通りです。参りましたね…局長に怒られてしまつ」

脇差をしまい苦笑する一色を土方はなおも睨み、問う。

「怒るのは近藤さんだけか？」

「…どついでしょう？」

わざとやっているのか、こいつのしらばっくれ方は白々しい。

何を問つてもにこにこ適当に流す一色に、土方は、ふん、と鼻で笑つと目を閉じた。

「とにかく俺アこんな状態だ。しっかり頼むわ」

「はい。お任せ下さい」

にっこりと笑ってそのままベッドに戻っていく一色の背中を確認し、土方はまた眠りについた。

・
・
・

チユンチユンと朝の鳥たちが鳴いて、そろそろ目を開けようか、土方がそう思った時…。

再び言い知れぬ殺気が土方を襲った。

またあいつか…？

でも、今日のそれは昨日のとは比べものにならないほど強く、息苦しく身動きがとれない。

身動き、が…。

アレ？これおかしくね？
全く体が動かねえ…。

もしかして金縛り…いやいやいや違う！そんなのいからね！金縛り
ってあれだ。脳みそは起きてるが体は寝てるっていう状態のことで
…アレ？逆だっけ？

とにかく目え開かない金縛りは全部夢らしいよ…って誰に言っ
てんの俺？

てゆーかアレ？

目、開く…

「土方さん」

そこにはオバケでも幽霊でも何でもない、だがそれらより冷たい眼
差しの沖田が立っていた。

「そ、総悟…！？どうしたんだ」

ほっとしつつもまだ動悸が治まらない土方が少々どもる。
というか、なぜかまだ体は重く、動かない。

「どうしたって、見舞いに決まってるさア」

けろりと言う沖田の視線は何だか変だ。自分を見ていない。
沖田の視線を追い、自分の腹の辺りを見てみると…。

黄色…？

マヨネーズ、大量のマヨネーズだ。

ベッドの上、顔以外全てに覆いかぶさるようにマヨネーズが敷き詰められている（しかも業務用特大サイズ）。それはもう、身動きが取れないほどに。

「何コレ天国！？いやいや騙されるな俺。イジメだよね！？」

「え〜。喜ぶと思って持ってきやしたのに」

「限度があるだろ…。てゆうかお前が見舞いに来るとか…どうせ何かあるんだろ」

どうにかこうにか、マヨ山から抜け出しながら土方が言うと、沖田はニヤリと笑った。

「当たり前。聞きたいことがありやして」

話したそうとして、沖田はチラリと横の一色を見遣る。

一色は視線の意味に気付きベッドから体を起こした。

「ああ…。じゃあ僕は席を外しますね」

だが、こんな開放的な空間で話すことでもないだろう、そう思った土方は立ち上がる一色を制止した。

「いや、いい。俺たちが動こう」

「大丈夫なんですかイ？」

なんやかんや言っても怪我人。さすがの沖田も若干気を遣って尋ねる。

さつきその怪我人の上にマヨネーズ積み上げたくせに…そう思った土方だが、時間の浪費は避けたい。ぐっと言葉を飲み込んだ。

「ちょっと動くくらいは何でもねえよ。小便にも行ってんだから」

「何だ。てつきり“コレ”で屈辱受けてるのかと思ってやした」

どこから持って来たのか、沖田が手にするは尿瓶しひびん。

ベッドから動けない重病人が用を足すとき、手伝ってくれる看護師さんが持って来る“あれ”だ。

やっぱりプライドが許さない。土方は断固“それ”を拒否し、看護師が止めるのも聞かず痛んだ体を引きずりながら毎回自分で廁へ行っていた。

「それだけは絶対に嫌だ」

「ええ？ドMには最高のご褒美なんですよ？」

「誰がドMだ！」

そんなこんなで、ふたりはいつもの如く騒ぎながら屋上へと向かう。

そんなふたりの背中を、一色は真剣に、睨むような目つきで見送った。

疑わしきは

屋上。

土方はひとつしかない出入口に見張るように体を向け、柵にもたれて対面の沖田に問う。

「で？話つてのは？」

「山崎に何調べさせてるんで？」

「何でもねえよ」

何となく予想がついていた問いに、土方はとぼけてみせる。

「いい情報持ってきたんですけどね」

「…情報ならウチの監察が集めるからいらねえよ」

案の定なかなか折れない土方に、沖田は最後の手段に出ることになった。

「じゃあコレ、壊しちゃおうかな」

沖田がポケットから取り出したのは、土方の携帯。

沖田は携帯の端と端を持ち、パカパカ携帯を反対側にパカパカしようとして力を込める。

「！！何でお前が俺の携帯を…てゆーか折れる折れる！」

ミシミシと音を立てる自分の携帯を目の前に土方が明らかに焦りの色を見せると、それが沖田のドS本能を掻き立てたらしい。

さらに携帯に力を込める。

「ちょっといろいろありやしてね。まあこれだって情報機器でしょ。山崎がいたらいいんでしょ。」

「アホか！携帯の方が山崎なんかよりよっぽど賢いしハイスペックだろ！」

「酷い」

いつの間にか目を離していた扉から飛んだ声…。

山崎だ。

ちっとも存在に気付かなかった。
さすが地味…。

「あ、山崎…。お帰り」

・
・
・

「まあ、そーゆーワケですよ」モグモグモグ

「ふうん。スパイ探しねえ」ポリポリポリ

「マヨネーズが合うな。たこ焼き味」ニュイ〜ン、ポリポリ

山崎の土産、じゃが　こと八ッ橋を食べながら三人は輪になって話
す。

「で？どうだったんだ？出張費使うだけの価値ある情報は得られた
んだろうな」ニュイ〜ン、モグモグ

「うえ…。はい。まずは瀬戸。あそこの父親、誠十郎は嫁の商売の
為に密輸密売を斡旋してる疑いがあるらしいです。最近力を持ちす
ぎだっつてんで中央から睨まれてるとか。しかもとっつぁんと同期で
昔から仲悪いみたいですね」ポリポリ

「それで警察組織を潰そうとしてるってえわけだ。…奇抜な味だな。
八ッ橋ソーダ味」モグモグ

「可能性としてですが」ポリポリポリ

山崎は一旦口の中のものを飲み込み一息つくと、また話し出す。

「で、一色。秘密裏に天皇の弟君、孝暗様の乳母とつるんでました。乳母は孝暗様に天皇を継がせたいらしくて、現天皇の彰治様を排した後、中央を切り崩し朝廷権力を回復させようとしてるみたいです。その手始めが真選組のようですね」ムシヤムシヤ

「結果的にどつちも怪しかったか」ニユイーン、ポリポリポリ

思った通り、怪しいふたりの情報に土方が鼻を鳴らす。

山崎があらかたの報告を終えたことで一旦落ち着いた話だったが、
沖田が、でも、とまた切り出す。

「怪しいのは残りのふたりもですぜい」ポリッ

「どついうこつた？」ズゾゾゾ

「コレ」ポリポリフキフキ

沖田が、先程の土方の携帯を掲げる。何故か油でギトギトしている。
フキフキ

「誰が持ってたと思います？」モグモグモグ

「持ってたも何も部屋に忘れてただけで…」ニユイ〜ン

「違いますア。普段電話がかかって来ることない友達ゼロの寂しい人だから、一、三日携帯なくても気付かないんでしょうが…」ムシャムシャ、ゴクン

「うるせえな！普通に忘れてただけだろが。てゆうか人の携帯に菓子油なすりつけるのやめて」ニユイ〜ン、パリポリ

土方の言葉を無視して、ちょっと間を作る沖田に、山崎が、それで？と続きを促す。

「この間見たんですよ。花井とかいうデカイ隊士がこっそりこいつを土方さんの部屋に置きにくるのを」ポリポリ

「！」「ゴクン

「応援を呼ばせないために、意図的に隠した…？」モグモグ

驚きで一瞬止まった指を再びお菓子に戻して、山崎が言う。

「アア。もしくは何らかの情報を抜き取るためか…」モシャモシャ

「別に何もねえぞ。大事なことは直接言うからな」ニユイ〜ン、ポ

リポリポリ

「まあ、ただ拾ったのを置きに来ただけかもしれないやせんが」パリポリ

土方は、ふうん、と空を睨^くむと、沖田に視線を戻す。

「んで？もうひとり、貴寄猛は？」ズゾゾ

問われた沖田は珍しく自信なさ気に眉をしかめた。

「あれは何ていうか…別に何があるわけじゃありやせんが…。何となく、モヤモヤと嫌な感じがするんでさア」ポリッ

「なんだそりゃ」「ニユイ〜ン

そういえば、と山崎がじゃが この二箱目を開けながら切り出す。

「沖田隊長が返り血まみれで帰ってきたとき…貴寄がいたようですよ？」ポリ…

「あア。奴が言うに、俺が狙われてるかもしれないねえからつけてたらしい」バリポリ

「つーかお前やっぱり狙われてたのか」「ニユイ〜ン、ポリリ

「さア。今回の件と関係あるのか知りやせんが」「ムシャムシャ

沖田は否定も肯定もせず目を見送る。
土方も、そんな沖田を薄く睨むとすぐに手元のマヨネーズに顔を向けた。

「あんまり単独行動はするなよ。あと大通り歩け」ニユイ〜ン

「土方さんがソレ言いますか」モグモグ

モグモグパリポリ、ニユイ〜ン、バリバリ……………

「と…とりあえず今日は貴崎の故郷、武州に行く予定ですから、彼のことでもう少し調べてみますね」モシヤモシヤ

しばらくして山崎が立ち上がり、また自らの出張の予定を告げる。

「じゃあ俺は一色に探りでも入れるか。総悟、お前も話聞いたからには協力してもらうぜ」ニユイ〜ン、ムグモグ

「貴崎と花井を見張ればいいんでしょ。そういやあこのこと、近藤さんは知ってるんで？」ポリポリ

「いや」ポリ…

立ち上がり扉に向かって進もうとした山崎が、振り返る。

「でも局長、馬鹿のつくお人よしだからなあ。隊の仲間を疑うとできないでしょ？てかすぐ顔にでるから疑ってるのバレそう」モグモグ

「でも俺、土方さん、と狙われてるなら局長の近藤さんもヤバいかもしれやせんね」ポリポリ

可能性は十分に有り得る。土方は頷き、言った。

「そうだな…よし、お前ら狙われてる同士、なるだけふたりに行動しろ。お前と近藤さんがいりゃあ、少なくともこんな状態にはならねえだろ」ニユ…バヒュッポヒュッ

「近藤さんのストーキングにも同行するんですか？勘弁して下さいえ」ポリポリポリ

「これを機会にやめてもらえ」ムシャムシャ

「副長、無理しないで下さいね。アンタ怪我人なんだから」モグッ
ゴクン

山崎が少し心配そうに（でもお菓子を食べながら）言うと、土方は心配されてむず痒いのか目を逸らし、早く行けとでも言っようじた、しっしっ、と手を振った。

「へーへー。お前らもな」

沖田は土方の要望通りさつさと、山崎はやはり少し心配そうに振り返った後、屋上を後にした。

あとに残されたのは散乱したお菓子の食べカス、そして…

「てゆうーか俺らパリポリムシャムシャうるさくない？」

土方の静かなつつこみだった。

警告

屯所に戻ると、近藤の姿はなかった。

適当に捕まえた隊士に聞くと数時間前、どうやら松平に呼ばれて出ていったらしい。

昼には帰ると言っていた、と付け足す隊士の言葉通りならもうそろそろ帰ってくるはずだ。

そう思っただけで部屋で寛いでいると、ものの数分で戻ってきた近藤に声をかけられた。

「お、いたいた。総悟、ちょっと着いてきてくれ」

「あ、近藤さん。着いてくっ…どこへですかイ？」

先程お気に入りのアイマスクを着け寝転んだところだった沖田が、身を起こし言う。

「中央だ。とつつあん共々大老の井いしすけすけ威助介公に呼ばれてるらしくてな。最近の俺たちの失態についてだが、俺以外の現場の話も聞きてえらしい」

「スケスケ？…いいですけど、俺でいいんで？」

一隊長が中央にお呼ばれすることなんて、ほぼないことだ。

そういう堅苦しい仕事はいつも、堅苦しい奴ひじかたの仕事だから。

でもまあ、近藤さんを護るってことはこういうのにも着いてかなきゃなんねエってコトか。

というか、近藤さんも俺を護るためにわざわざ理由をつけて俺を連れて行くこうしてるのかもしれないエ。

沖田がそんなことを考えているのも知らず近藤は、にかつと白い歯を見せる。

「いいさ。ホラ、今はトシがいねえだろ？ウチのNo3はお前だからな」

「土方さんと違って大したことは話せやせんけど」

「大丈夫だ。俺も大したことは言えん」

それはそれでどうだろう…。

・
・
・

江戸城…大老謁見の間。

美しい装飾が施された台座に座るのは大老、井威助介。傍らには従

者の男が静かに座している。

「松平君と、近藤君、と…」

眼前に正座する松平、近藤、と視線を移してもうひとり…動きを止めた井威に、横の従者が素早く答えを告げる。

「一番隊隊長の沖田総悟です」

井威は、ああ、と納得したように呟くと、怪訝そうな顔を向けた。

「うん？土方君はどうしたの」

「あ、ト…土方はちょっと、任務中に怪我を負いまして…」

近藤もいつになく緊張している。
井威は、ごによごによと話す近藤を見下すように目を細めると続けた。

「大丈夫、なのかな？」

「あ、ハイ。命に別状は…」

「そうじゃないでしょ。副長がそんなに大丈夫なのって聞いているの」

「え、と…」

「全く…しっかりしてくれないと困るよ？天導衆の皆々にもご指摘を受けてるんだからね」

怪我の心配など微塵もする気がない井威に、さすがの近藤も眉を寄せる。

「ですが…っ」「いやああ、すみません。私からも言っておきますからして」「」

だが反論しようとした近藤の言葉は、松平のでかい声によって遮られた。

松平は不服そうな近藤を睨みつけ、井威にはどうぞどうぞと続きを促す。

また保身に走ったよ、この親父…。

「まあいい。で？今回の失態の要因は何かな？」

「その…今調査中ですよ…」

はつきりしない近藤の答えで、次は沖田に質問が飛ぶ。

「君は？何だと思う」

沖田は一瞬考えるように視線を斜め下に向けると、すぐに井威に戻す。

「さあ…最近ネズミが出て不衛生だから、皆調子でも崩してんじゃないですか」

「ネズミ？」

掃除はしてるはずだけどなあ、とマジボケする近藤は置いておいて、松平は渋い顔、反対に井威は、くくつと笑った。

「はっはっは…。面白き男よ。若さゆえかな。深くは聞かないが、あまり噛み付くような態度はするものじゃないよ」

「すいやせん。作法を知らないの」

沖田は悪びれる様子もなく軽く返す。

「とにかく君はもう外に控えていなさい。松平君と近藤君にもう少し話があるからね」

井威が笑って退室を促すと、沖田は軽く会釈して部屋を出ていった。

あゝなんか多分怒られる。そんで多分、横のオッサンにも。

言っていたことはよく分からなかったが、それだけは分かった近藤は顔を歪めたのだった。

・
・
・

「すいやせくん。廁行つてきても？」

待たされるってえのは退屈だ。

松平と近藤の話が終わるまで、と通された一室で粗茶を飲んでいた沖田が、部屋の前に見張るように立っていた侍にでかい声で尋ねる。

「…あちらに」

城でぬくぬくと育ったであろうこの侍は、気品のかけらもない沖田の態度に少し嫌悪感でも感じているのか、ちよっと顔をしかめて廊下の奥を指差した。

そんな侍の態度も特に気にする様子もなく沖田は、どーも、と一声かけると部屋から出ていった。

沖田が向かったのは厠、ではなく資料室。

沢山の資料の中から、組織図らしきものを引っ張り出す。

「えーと。花井、花井…花井 古保ふるほこいつか」

城を構成する者たちの写真付きの図の中に、いつか見たのっぽでつり目の隊士にそっくりのオヤジを見つけた。

花井古保…役職は老中らしい。

すでに山崎がいろいろ調べているだろうからこんな公のプロフィールに真新しい情報なんてないだろうが、一応目を通そうか、そう思った時…。

背後から話し声が聞こえて、思わず隠れる。

近付いてきたのは、胡散臭い顔のオヤジと、写真のオヤジ。

見たところ胡散臭い方が花井の親父に絡んでいるらしかった。

「おたくの三男坊、元気にやっってるのかい？」

「まあまあだ」

「真選組にいるんだろ？よくあんな野蛮なところに息子をやったなあ」

好き勝手言いやがって。

若干の不快感を感じた沖田だったが、話の続きに耳を傾ける。

「あれは三男だからな。いざとなったら捨てればいい」

古保が冷たくいい放つと、隣の男はニヤリと笑う。

「酷い父親だね」

古保は、フン、と鼻で笑うと親とは思えない冷たい表情で息子を語る。

「花井家の中であれだけ学も腕つぶしもない。少しは役に立ってもらわんとな」

胡散臭いオヤジは、怖いね、なんて茶化すように言ったあと、思い出したように、あっ、と零した。

「真選組といえば、今助介様のところに来てるらしいな」

「スケスケ…？」

「今回の失態続きで真選組は勝手に崩壊しそうだがね。おたくの息子が頑張るまでもないんじゃないかい？」

「なアに。あれは“保険”さ」

オヤジたちはそれぞれ違った方面で腹の立つ笑みを浮かべて遠ざかっていく。

「こりゃあ…やっぱりあの携帯はわざとだな」

沖田は呟き、さらに探りを入れるため歩きだそうとする、が…。

カチャッ

「！」

後頭部に、冷たく固い何かが当てられる。

「あんまりチヨロチヨロされると困りますねえ」

背後の男はそう言いつと、振り返るな、とでも言うように後頭部のそれをぐりぐり押し付ける。

「へエ…お大臣様ってえのは、客に銃そんなもん向けるわけだ」

「お客様はお客様らしく、大人しく出されたお茶を飲んでいて下さいな」

「お茶飲みすぎて厠行きたくなっちまってね」

銃を押し付けられているのにもかかわらず顔色ひとつ変えない沖田に男は、ふっ、と笑いながらも牽制をかける。

「ククッ…とにかくこれは“警告”です。子どもがあまり首を突っ込むものじゃない」

一応“警告”と言うのは本当らしい。

男はそれだけ言つと、静かに沖田の頭から銃を離す。

「次にお出しするのがお供え物にならないことを祈ります」

去っていく男の姿を、横の大きな窓ガラスで盗み見る。

男は大きな笠と黒いマントのようなもので身を隠してはいるが、隙間からちらりと見えたゴツゴツした手は、天人のそれだった。

沖田は目を細め、ため息をつく。

「キナ臭え連中ばかりで嫌になるね」

警告（後書き）

スケスケさん……。まあ、分かる方は多いと思いますが、モデルは井伊直弼です。

名前だけ借りたので性格とかは知りません（^^）；

幼なじみ

ところ変わって田舎町、武州。

「お久しぶりです。ミツバさん」

武州に行くならついでに姉上の墓を磨いてこい、そう沖田に言われて寄ってみた方がいいが、ミツバの墓はすでに綺麗に手入れされていた。

きつと誰かさんたちがマメに掃除に来ているのだろう。

山崎は、ふっと笑って墓に手を合わせた。

お参りも済んで、墓地を出ようとした時、なぜかひとつの墓が目についた。

石に彫られた文字を見ると…。

貴奇家之墓…。

墓には花と、お供え物が乗っていた。どちらもまだ新しそうだ。

今日の調査対象の彼も、ちよくちよく墓参りに来ているのだろうか。

そんなことを考えつつも山崎は墓地を後にした。

・
・
・
・

「履歴書によるとここからそんなに遠くないんだけど…」

道が分からない…。

山崎はキヨロキヨロと辺りを見渡して、畑仕事をする老人を見つけた。

あの人に聞いてみよう。

「あゝ。貴崎さんってお宅、この辺にありませんか？」

「うん？貴崎さん？あゝあった。あったのう…」

ラッキー！いきなり知ってる人だ！

老人は畑を耕すのを中断し、こちらをじっと見る。

何だこの間？

「あ、え〜と、教えていただけますか？」

山崎が戸惑いぎみに尋ねると老人は、おお、と思い出したように手を叩いた。

「いいぞ。ほら」

山崎の手に、鍬が握らされる。

「え？」

「じつ…腰を落としてな」

自分は今畑仕事を教えられているのだろうか…？
えっ…。なんで？

鍬を握って棒立ちの山崎が、もう一度尋ねてみる。

「い、いや…貴崎さん家を…」

「貴崎さん？あゝあったの〜」

老人はまたこちらをじっと見て動きを止める。

きつとボケてるんだ。

適当にお礼を言っただけで行こう。

「あ、もういいです。ありがとうございます…」

その場を離れようとした山崎を見て突然、老人の目がカツと開いた。

「キイヨシイイ！逃がさん！！逃がさんぞ！！お前は農家を継ぐんじゃあああ！！」

「ギヤアアア！！」

鍬を掲げて信じられないスピードで襲ってくる老人は化け物が如し。

山崎が涙目で逃げようとした時、老人の頭に緑の何かが飛んできて、そのまま老人ごと吹っ飛んだ。

「も〜おじいちゃん、何やってるのっ！ごめんなさいね。」ご迷惑を「

現れたのは見目美しい黒髪ロングの十四、五の少女。

…オタクのツボっばい少女。

手にはなぜか大量のキャベツを持っている。

あ、おじいさんを仕留めたのはこれだ。

あれ、おじいさん動かさなくね？

「あ、いえ。てゆーかコレ死ん…でないわ」「

少女はにっこり笑う。

何かコワイ…。

「ごめんおじいちゃん、これ以上聞けない。
もういいや。とりあえずいいや。道聞こう。」

「ところで貴奇さんって家…。」

山崎がやたらと下から、探るように尋ねると、少女は何事もなかったかのようににっこり笑った。

「貴奇さんの知り合い？」

「あ、まあ…昔少しお世話になって…。」

「そうなの…。でもあそこのご夫妻、少し前に亡くなってしまったのよ。」

「だったら来るまでに見た墓は、彼の両親のものだろうか。
山崎はさらに尋ねる。」

「息子さんは…？」

「猛君？彼もいないわ。最近江戸に出て、あの真選組に入ったんで
すって。」

「そうですか…。」

「まあ、知ってるけど。」

もしかして何の情報も得られないかも。

山崎がこっそり肩を落としていると、知ってか知らずか少女が話を続けた。

「でも不思議……。兄さんは幕府に殺されたんだってずっと言っていたのに。どうして真選組なんか……」

「幕府に……？」

思わぬ情報が出てきて、山崎はつい少し前のめる。少女は少し怪しんだようだが、続けた。

「お兄さん、攘夷志士だったのよ。それで……」

「！」

攘夷志士……だとしたら、真選組をおとしめる理由としてはバッチリだ。

山崎が黙ったまま、驚いたように目を見開いていると、少女がまた怪訝な顔をする。

「どうかした？」

「あ、いえ……知らないうちに大変なことになってたんだなって……」

山崎は慌ててごまかすと、遠慮がちに少女に言った。

「あ、あの。やっぱりお家、教えてくれませんか？手を合わせに行きたいので」

・
・
・

「あ、タケちゃん？」

『お絹？どーしたの？』

山崎を案内し終え、黒髪の少女は江戸にいる幼なじみと話すため、電話機を握った。

数コールの後、幼なじみの声が聞こえて少女は顔を少し綻ばせるが、すぐに心配そうな表情で言った。

「今日、おじさんとおばさんの知り合いつて人が来たの。タケちゃんのことも知ってるみたいだったけど」

『…誰？』

「あ、名前聞くの忘れた！」

ちょっと抜けた幼なじみに、電話の向こうの少年が苦笑する。

『何だ。意味ないじゃん。どんな人？』

「ええと…十代後半から二十代前半くらいで…特徴…特徴…。あ、特徴がないのが特徴みたいな…ザ・地味って感じ？」

『山崎さんか…』

「えっ？」

地味も行き過ぎると個性。

自分を調べに来る“地味”なんて、山崎さんくらいだろう。

自分の拙い説明で訪問者が分かってしまったらしい少年に、少女は不思議そうに声を上げる。

だが、少年は疑問に答えることなく先を促した。

『いや、何話した？』

「うん？普通に家族のことを簡単に。あと手を合わせるって言うから、家に案内したわ。駄目だった？」

おずおずと尋ねる少女を思い、少年はできる限りの優しい声を出した。

『いや…別にいいよ。知らせてくれてありがとう』

少女は安心したように、うんっ、と言うと話題を変えた。

「それより、元気でやってるの？そっちに行ってから全然連絡よこさないじゃない」

『ごめんごめん。忙しくて。でも元気だよ。お絹こそ、元気？』

答え半ばに質問を返されて、でも気にかけてもらえたのが嬉しくて少女は複雑な表情で答える。

「私はいつも元気よ？それより何で…」

『あ、ごめん。まだ仕事なんだ』

「タケちゃんっ！」

少年は一声告げると容赦なく電話を切ってしまった。
ツー、と言う終話音を聞きながら、少女は不安そうに俯いた。

真選組屯所…。

猛は乱暴に切った電話を見つめ、小さく呟いた。

「山崎さん、か…」

弟（前書き）

久しぶりに万事屋メンバー登場です。

弟

「キサキ、キサキ…うん…どっかで聞いたような…」

今日も依頼がなく暇な万事屋で、銀時がぶつぶつと呟く。

「どうしたんですか？」

すっかり主夫と化した新八が洗濯物を干しながら問いかけると、ソファで日曜の親父みたいな格好でテレビを見ていた神楽が煎餅をかじりながら馬鹿にするように言った。

「今日は一段とマヌケ面ネ」

「ツラじゃない桂だ！」

「うわっ！」

窓から入ってきたのはテロリスト桂。

どうやらマヌケ“面”^{ツラ}に反応したらしい。

「登場が無理矢理すぎるアル」

神楽が軽蔑するように言うも、確信犯らしい。

桂は、ふっ、と笑って返した。

「こうでもしないとなかなか出れそうもないからな」

銀時も桂の無理矢理の登場にはちょっと引いたが、聞きたいことがあったので気にしないことにして話した。

「まあちょうどいいや。ツラ、お前に聞きたいことがあってよ」

「ツラじゃない桂だ！」

「鬘」

「そつちのカツラじゃない桂だ！」

「ハイハイ分かった分かった。それよりお前さ、キサキって名前に聞き覚えねえ？」

面倒臭くなって適当に流す銀時に少し不満を残しながらも、桂は聞き覚えのある名前に首を捻る。

「キサキ…貴奇光か？」

桂が記憶の隅を探り、行き当たった答えを呟くと、銀時は、ああ！とすつきりした、と言つように笑った。

「ツラ・光ペアか！」

「そういえばそんなからかわれ方もしていたな…」

桂は苦々しく、銀時は懐かしそうに目を細める。

攘夷戦争で出会った同士…。

桂と光は、名前の組み合わせが面白い、それだけの理由で一時ペアを組まされていた。

「光の苗字ってそんなだったか…。もう戦争も終結間近の時に田舎から出てきたんだよな…」

「いつも弟の話をしていたな」

「あいつも…死んだんだっけ」

暫ししんみりとした後、桂が怪訝な顔をする。

「…だが何故急にあいつの話を？」

「いや、ちよつとな。あ、なあ、弟の名前覚えてるか？」

桂の質問は軽く流し、銀時はまた尋ねる。

しかし銀時のそういう態度はいつものこと。
桂も特に気にせず質問に向き合う。

「確か…タクヤ、タケシ、違うな…」

「猛…?」

「そうそう。猛だ。お前にしてはよく覚えているな。やっぱり何かあるんじゃないか?」

「別にい…」

こういう時の銀時はどうせ聞いたって答えない。
桂は諦めたようにため息をついた。

しかし、この名前に意外な人物が首を傾げる。
攘夷戦争なんて知るはずもない新八だ。

「その人、僕も何か聞いたことあるような…」

そういえば山崎の話聞いてたとき、新八もいた。

どこから聞いていたのか知らないが、あんまり記憶になさそうだから多分がっつりは聞いていないのだろう。

銀時が知らんぷりを決め込んでいると、うんうん唸る新八に神樂がかみ付く。

「知ったかぶりで物語に絡もうとしても無駄アル！お前なんかが銀ちゃんの昔の知り合い知ってる訳ないネ！」

「神樂ちゃん、記憶の隅にすらないから悔しいんだ」

負け惜しみ？と新八がニヤニヤ笑って神樂を見遣ると、神樂は急に冷たい視線を新八に向けた。

「やだ。何ニヤニヤしてるのあの人。気持ち悪いこっち見ないで」

「何で急に標準語オ！？」

その後、イラつとした神樂が新八に攻撃して、とぼつちりをくらった桂が暴れだして…。

万事屋は一気にギャーギャーとうるさい空間になる。

そんな中ただひとり我関せず、という顔で銀時は窓の外を眺めて咳いた。

「光の弟ねえ…こりゃ本当にスパイかもね…」

尾行

何となく目が醒めて、土方は寝転がったままぼんやりと空を見つめる。

だいたいいつもは朝から晩までくたくたになるまで働いていたのに、急に四六時中寝っぱなしのこんな病人生活だ。夜だからって寝れる訳がない。

何気なく目を遣った時計は、丑三つ時を示す。深夜二時だ。

あ、オバケの時間…。
いや信じてないけどねっ！

ここ、大部屋だし。皆いるからいざとなったら…。

いや、いざって何？何もなし。このくらいの時間でもよく仕事してるじゃん。巡回とかもひとりで行くじゃん。

アホらし。寝よう。

しかしあれだな。夜の病院ってのはまた…。

いや、関係なくね。

まだ夜勤のナースさんも起きてるし、街では酔っ払いも騒いでんじやん。

起きてんの俺だけじゃないし？…だよな？

いやいやいや、誰も答えていないからね！？

自問自答だからね！

どこからともなく返事が返ってくるとかいらなから、ホント！

土方がひとりでしょうもない葛藤を繰り広げていると、隣でカタン、と音がした。

えっ…まさか…？

土方はビビりつつも目だけでそっと隣を見る。

オバケじゃなかった…。

自分が起きていることを気付かれないように隣のベッドを見ると、

ちょうど一色が起き上がり、ベッドから下りるところだった。

廁か？

そうも思ったが、よくよく観察しているとどうやら違つらしい。

一色は入院着の上から羽織りを着て、財布を懐に入れて出ていった。

「野郎、こんな時間にどこへ…」

土方は呟き自分も羽織りを着て、一色を追つたためベッドから下りた。

・
・
・

夜中でもガヤガヤと騒がしい街、かぶき町。

飲み屋の連なる通りを、一色がふらふらと歩く。
その少し後ろ、土方がこっそり後をつける。

と、女がひとり、一色に近付く。

仲間か？

土方に緊張が走る。

息をひそめ、見守っていると…。

「隆ちゃん！久しぶりい！入院してたんじゃないの？？」

「抜けてきました。ユウコさんに会いたくて」

「やだあゝ超嬉し〜！」

女はキヤツキヤと跳ねると一色の手を引き、そのままふたり、歓楽街へと消えていった。

女遊びかよ…。

まあそーだよな。怪我もしてないのに入院生活とか暇だよな。てゆうーか仕事しろよ。夜中とか土方さん危ないよ。

いろいろ考えたが、なんだか馬鹿らしくなって土方はぐるりと方向転換した。

「帰ろ」

「あるえ〜？多串くんじゃなあ〜い。何してんの？こんなところで何してんの〜？」

前方から来た酔っ払い…。そこから安酒でも飲んでいたので顔を真っ赤にした銀時が近付いてきた。

最悪だ。

土方は眉間にシワを寄せ、顔を背ける。

「誰が多串だ。あっち行け酔っ払い」

「え〜！冷たくね？多串くん冷たくね？」

「ちっ…ウゼーなこいつ。絡み酒かよ。あっ！あっちにいるの多串君じゃね？僕は人違いなんで。土方君なんで」

土方は適当に遠くの方で酔い潰れるオヤジを指差す。

銀時も土方の指の先を追い、歩いてはぶつかりを繰り返しているオヤジを視界に入れて面倒臭そうに目を細める。

「えっ、あ…。ちょっと遠いからいいわ。土方くんはいーわ」

「俺はよくねーよ。あっち行け酒臭え」

しっしっ、とあしらう土方の腕を銀時が掴む。
何だか今日はいつもに増して絡み方がウザい。

「え〜一緒に飲もうよ〜」

「はア！？何でお前と一緒に飲まにゃならねえんだ気色悪い！」

「たまにはいいじゃん。そーゆーの望んでる女子の方々もいるんだよん」

「どーゆーの!?!」

そのままふたりが飲もう飲まないで揉めていると、ふいに土方の背にポン、と手が乗せられた。

「お兄さん。この天パの知り合い？」

振り返ると、そこにはねじり鉢巻きのオヤジ……。多分どこかの店の店主だろう。

「違…」そうです。僕のパパなんです」

きつと面倒なことになる、そう確信して否定しようとした土方の言葉を、銀時が遮る。

「何言つて…」

パパ、だア？

意味の分からない銀時の言動を問いただそうとした土方に、鉢巻きのオヤジが紙を突き出した。

領収書…。

「飲み代、まいどっ！」

「……………は？」

「何で俺がてめえの飲み代払わねえといけねーんだっ！」

不当な請求に初めは拒否を示した土方だったが、店主の、警察呼ぶよ、の一言に結局折れた。

警察の自分が警察沙汰、しかも世間で無能だなんだ騒がれているこの時期に、誤解であっても変な揉め事は起こせない。

「そう言いつつも奢ってくれる君が好きだよ俺は。じゃ」

銀時は先程とは打って変わって、サッパリと別れを告げると土方に背を向けた。

「待てコラ」

今度は土方が、銀時の肩を掴む。

「何？やっぱり一緒にいたいのか？残念だけど銀さんノーマルだからア」

「俺もだし！違えよ！金は返せよ！？ちよつと一筆書いていけ」

「何？細かいキモい。男ならあのくらいの金額でグチグチ言っ
なよ」

「てめえなんか奢る金は一銭もねえ！しかもお前結構な額だったぞあれ！」

「まあそう興奮するなよ。傷が開くよ」

銀時はそう言うと、ポン、と土方の包帯だらけの胴体をつついた。

「~~~~っっ！」

「わっ痛そう」

「て、ん、め…っっ！」

すました顔をしていても、やはり相当痛いらしい。傷口を押さえしやがみ込む土方の肩を優しく叩き、銀時はもう一度背を向けた。

「まあ何でこんなところにいるか知らんけど、怪我人は病院に…」

去って行くこうとした銀時が、急に立ち止まる。

土方は不審に思い、銀時を見上げる。

「どっした？」

！

見上げた土方の目に映ったのは、この間よりは少ないが十数人、ずらりと並ぶ浪士たち。

土方は立ち上がり、小さく舌打ちをした。

「ちっ。またかよ」

「…物騒だね」

巻き込まれる空気ぶんぶん、銀時も顔をしかめて呟いたのだった。

尾行（後書き）

オバケの話はよく私が思うことです（^^笑
怖いよね…オバケ

怪我人と酔っ払い

ホントついてない。

無駄な散歩をさせられ、嫌いな銀髪に絡まれ、飲んでもねえ酒の金を払わされた。
で、極めつけはコレだ。

「土方十四郎だな？」

ずらりと取り囲む浪士たち。皆ガタイのいい奴ばかりだったが、今回の奴らはいい武器なんかは持っていないようだった。

ボロボロの刀を向けられて、土方は苦し紛れにうっすら笑った。

「さアな。武士なら自分から名乗りやがれ」

「じゃ、頑張つて土方くん」

また土方の肩を軽く叩くと銀時は、何事もなかったかのようにその場を離れようとする。

「いやいや、ちょっと待てば？」

「え、だって俺お呼びじゃないみたいだし」

「だからってこの状態で怪我人置いてくか普通!？」

土方は、心底面倒臭そうな顔で振り返る銀時に若干苛つきながらも引き止める。

こんな奴でもないよりはマシだ。

「うるせーなあ銀さん酔っ払いなんだよ！実はさっきから吐きそうなんだよ!…という訳で」

そう言い残すと、結局銀時は土方の手を振り払いさっさと行ってしまった。

「ちっ…薄情な奴だ」

とりあえず一部始終を見守っていた浪士たちだったが、痛みに顔を歪めながらも構える土方を見て口々に嘲笑を始めた。

「ぎゃはは！鬼の副長様が怪我してるって本当だったんだなあ」

「お仲間にまで見捨てられちゃって…運も人望もないね」

「仲間じゃねえよ」

土方は、ぐっ、と刀を構え直す。

病院で寝ている時はさほど感じなかったが、やはり少し動いたせいか目の前が揺れた。

浪士たちはゲラゲラと笑いながら振り下ろされる土方の刀を避ける。

「当たったりつませえ〜ん」

「こつちこつち！」

「残念！ハズレ〜」

浪士たちはひとしきり楽しむと、そろそろ頃合いだ、と刀を構えた。

「あばよ！鬼の副長さん！」

一斉に振り下ろされる刀、刀、刀。

とてもじゃないが防ぎきれない。

土方は固く目を閉じた。

ガッ

鈍い音がして、ぎゃあ、という男の声が聞こえた。

何だ？

土方は閉ざした目をそつと開けた。

「しゃーねえな」

「てめえ…っ！」

目の前には、先程自分を置いていったはずの薄情な背中があった。そして周囲には木刀で殴られて吹っ飛ぶ数人の浪士たち…。

「さすがに放つたらかしはハートが痛むわ」

銀時は驚く土方の方などちらりとも見ずにそう言つと、木刀を構える。

「な、何だア？酔っ払いひとり戻ってきたところで…」

一瞬…。

男は話し終わる前に吹っ飛んでいた。

少し怯んだ浪士たちだったが、一応は武士の端くれ。緩んだ頬を引き締め、逃げずに銀時に飛び掛かった。

ひとりと数十人、刀と木刀、後ろには怪我人、

明らかに不利なはずなのに、銀時はまるで赤子でも相手にするよう
に次々に浪士たちを吹っ飛ばす。

一方対する浪士たちは、銀時の動きに全くついていけず何もするこ
ともなく吹っ飛んでいく。

強い…。

単純に、そう思った。

一度手合わせして以降はこいつが戦うところをまじまじと見たこと
はないが、
時折空気、というか所作ひとつひとつに“ただ者ではなさ”を感じ
られることがあった。

しかも浪士を吹き飛ばすたびに銀髪が揺れて、それが月明かりでき
らきら光るものだから不覚にも、綺麗だ、なんて思ってしまう。

おゝい？と顔の前で手をパタパタとはためかされて、土方は、はっ
として辺りを見渡す。

どうやらぼんやり考えている間に片は付いたらしい。

あちこちに倒れる浪士たちの真ん中で、銀時は木刀を腰に差して二
ヤリと笑った。

「これで借金はチャラな」

動いて酔いが回ったのか銀時は口元に手を当て気持ち悪そうに、う
えつぶ、と言つと、ひらひらと手を振り、放心する土方の横を通り
過ぎていった。

「…だからって五万はねえよ」

土方は呆れぎみに去っていく背中に呟いた。

そんな様子を見つめる影がもうひとつ。

「あれは…あの人は…」

白夜叉…。

勧誘

「ホラ、あそこ。あの長髪よ」

とある飲み屋。

派手な女が男の腕に絡み付きながら、カウンターで飲む“長髪”を指差す。

「見つけるの大変だったんだからア」

「ありがとうございます。ユウ」さん

「他ならぬ隆ちゃんの頼みだからねっ。そのかわりまたお店に来てよね」

女はウインクすると男の腕から離れ、夜の街へと帰っていった。

女を見送って、男は白い変わった生き物を連れた長髪に近付く。

「桂小太郎さんですか？」

「何者だ？」

少し前から視線を感じていたのであろう。

桂は特に驚く様子もなく背中越しのまま問い返す。

「真選組五番隊書記、一色隆太郎です」

真選組、という単語にさすがに少し驚いて、桂がやっとうっすらと警戒の色を見せる。

「ただの隊士がひとり、俺を捕らえに？」

「いいえ。少しお話がしたくて」

「話？」

にっこりと笑う一色の真意が読めずに桂が顔をしかめる。

なんて胡散臭い笑顔だろう…。

桂はまた少し、警戒を強めた。

「ぜひ貴方に協力していただきたくて」

「何をだ」

「真選組の…殲滅です」

「…！」

真選組の一員と名乗った男が、真選組を潰すと言う。

どこかしらの組織の密偵だろうか。

怪しいことこの上ない。

訝しげに覗む桂に、一色は向けた笑顔を崩すことなく続ける。

「貴方たちもそれを望んでいるでしょう？」

いくら観察してもその裏の感情を読み取ることができない目の前の男に、桂は諦めて、ふっ、と息をついた。

「一色、といったか。お前自身の目的を聞こうか」

「どつせすぐ調べられるでしょうから言いますね…。僕は、朝廷の使者です」

一色は問われて特に躊躇するでもなくあっさりと答える。
やはり、本当か嘘かは分からないが。

「成る程。真選組を、幕府を倒して政権を天皇の手に、ということ
るか」

「う」明答」

それで倒幕を目論む攘夷志士と、か…。

桂は呟くと、一色を見上げ挑発するように口角を上げる。

「俺はこの国を朝廷にやる気もないぞ」

「でしょうね。ですから一時手を組むだけです。幕府解体まで、
いいでしょう」

一色も挑発に答え、不敵に笑い返す。

桂は作った笑顔を消し、一旦目を閉じて今度は一色を軽く睨んだ。

「どちらにせよ怪しいな」

「素性ならいくらでも調べて下さい。僕は急ぎませんから」

「そつみせてもらおう」

一色は、すつと自らの携帯の番号を渡すと、
「では、と一言、店を後にした。」

【桂さん…】

傍らで見守っていたエリザベスが不安げにプラカードを上げる。

「なアに。あんな若僧に足をすくわれたりはせん」

だがまあ、奴の背後にあるものに睨まれると、ちと厄介だな…。

桂は一色の去っていった店の戸口を睨み、密かにそう思った。

憧れ、幻滅

昨日はタダ酒を飲めたし、今日久しぶりに舞い込んだ仕事はなかなか割のいいものだった。しかも帰り道では結野アナとすれ違った。

今週の俺ツイてる。

そう。パチンコ屋に入るまでは。

生活費と従業員たちの一応の給料を差し引いてせつかくできた小遣い…。

銀時は軽くなった財布片手に大きいため息をついた。

大人しく帰ろう、そう思って原付にまたがった。

しばらく走ったら、信号に引っ掛かった。

これを渡ればもう家に着く、というところで不吉なものを発見する。

黒い制服、腰には帯刀…。巡回中の真選組隊士らしい。

別になんも悪いことしてないのに警察を見ると目を伏せてしまうのは何なんだろう。

あ、違った。俺この間原付のライトぶつけて壊れたままだったんだ…。

案の定、隊士は近付いてくる。
待って待って。あれ、手信号するから。あれやってる奴見たことないけど。

「ごちゃごちゃ考えているうちに隊士はすぐ横まで来ていた。

突き刺さるような、視線。

だが、隊士は一向に声をかけてこない。

不審に思って、銀時が顔を向けると、隊士がぽつりと呟いた。

「白夜叉…」

「！」

チビでくせ毛のその隊士は、でかい目でこちらを見つめてくる。

銀時が惚けて、意味が分からない、という表情を作ると、隊士はもう一度、今度はしっかりと問いかけた。

「お兄さん、白夜叉でしょ？」

「知らねえな」

銀時はちよつと眉を寄せ、今度は強く否定する。
だが、隊士も引かない。

「僕、見たんですよ。あなたが昨日、刀を振るところ」

「…だから？」

昨日つてアレか。土方君庇つてあげたやつか。

銀時が酔つて朦朧とした記憶を思い起こしていると、隊士はこちらを見据えたまま続けた。

「鮮やかな太刀筋…月明かりできらきら光る銀髪、舞い散る血…兄から聞いていたままです。…坂田さん」

最近自分を“坂田さん”なんて呼び方する奴は、そうはいない。
それに隊士の顔には何となく見覚えがあった。

長い睫毛、大きな目。女みtainな顔立ちに癖のある髪…。
身長は小さいが…。

「お…前…っ！」

銀時が、思い出したように目を見開くと、隊士はにっこりと笑った。

「はじめまして坂田さん。僕は貴奇猛。兄がお世話になりました」

少前、桂と話していたところだ。

短い間だったが攘夷戦争を共に経験した同士で、今はもうこの世にいないかわい後輩、貴奇光…。

「光の…弟か」

もうなくしたと思っていた笑顔とそっくりの笑顔でこちらを見上げる猛に、銀時は複雑な表情を向けた後、そのまま前方に見える職場兼自宅を指差した。

「…そこ、俺ん家なんだ。上がってけよ」

・
・
・

「どござ」

接客対応はお手の物。いつもの如く新八が家主の連れてきたお客様に茶を差し出す。

「ありがとうございます」

そう、にこりと笑う猛はまるで女の子みたく新八は思わず、どき

りとしてしまう。

「あ、ど、どういたしまして」

「なに男相手にどもってるアルか。キモっ」

新八が挙動不審になっている様子に、本物の女の子、神楽が冷めた目を向ける。

新八は顔を真っ赤にして、うるさいなっ、と一言残すと、お盆を戻しに台所へ消えていった。

「そーだ。お前の兄貴に預かってるモンがあるんだ」

「?」

銀時は思い出したように言うと、窓際の自分の机の引き出しの奥をがさがそ探り出した。

「戦争が終わってから色々捜したんだけどよ、場所分かんねえし旅する金もねえから結局渡しそびれて…あ、あつたあつた」

ほれ、と銀時はしわくちゃでところどころ汚れた紙を猛に手渡す。

「…手紙ですか？」

「汚れちまって悪ィけど」

受け取った手紙には、泥汚れに混じって血のようなシミも見られて、これが書かれた時の戦いの凄まじさを感じられた。

ボロボロの手紙を手に、猛が懐かしそうに目を細める。

「兄貴、戦地から何度も手紙くれたんですね…拠点がコロコロ変わるから俺からは出せなかったけど」

「危ねエからやめろって言ったんだけどな」

猛は手紙を懐にしまい、ため息混じりに笑う銀時に言った。

「聞かせて下さい。兄貴の話」

・
・
・

今日初めて会ったふたりは、共通の人物の話題で盛り上がる。もうお茶も三杯目にもなったところで、一息ついた銀時が急に真面目な顔で猛に尋ねた。

「んで、何で真選組？」

「……………」

先程までは談笑していたのに、猛が急に黙る。

まあ、だいたいの動機は分かる。

銀時は眉を下げ、諭すように言う。

「しょうもない怨恨ならやめとけよ。時間の無駄だ」

そのまましばらく黙っていた猛だったがやがて絞り出すように、ぼつり、と小さく呟いた。

「…何ですか？」

「ん？」

「何で…そんなに割り切れるんです」

銀時は小さく息を吐く。

ここにも、過去に囚われた者がひとり。

「…今更…どうするってんだ。もう終わったことだろ」

「でもっ…！」

猛は続けて何か言おうと銀時を見てすぐに口ごもると、はぁ、とため息をついた。

「…がっかりしました。兄貴が憧れていた坂田さんがこんな腑抜けだったなんて」

「何とでも言えよ」

ちよつと怒ったように言う銀時を一瞥し、猛は、失礼します、と玄関への引き戸に手をかける。

が、言い残すことがあったようで、そのまま扉を開けようとした手を止め顔だけこちらを振り返った。

「そうだ。桂さん、朝廷側と手を組むらしいですよ」

「…ツラが？」

びくり、と銀時が反応するのを確認し、猛は今度こそ扉を開けた。

「それじゃ」

お茶のおかわりを注ぎにきた新八とうたた寝していた神楽が、突然帰る猛を不思議そうに見つめるなか、銀時はひとり、渋い顔でまたため息をついた。

「まったく…面倒臭えな」

憧れ、幻滅（後書き）

コミックス読んであららってなっちゃったんですが、まだ

銀さん＝白夜叉

バレはしてないって設定で。この世界では。

腹の探り合い

「まだ早いですよ!」

甲高い看護師の声がして一色が目を醒ますと、隣のベッドで隊服に身を包み身支度をする土方の姿が目に入った。

「…もう退院ですか?」

「いつまでも寝てられねえだろ」

まだ傷が治りきっていない、再三止めた看護師だったが、何を言っても聞かない土方についに折れて、ちゃんと毎日通院してくださいね、と念を押して部屋を出ていった。

「じゃあ僕も退院ですね」

一色の任務は土方の護衛。土方が退院するならここにいる意味はない。

一色はさっさと出ていこうとする土方を引き止め、自分も身支度を始めた。

「お前、天皇の血筋なんだったか」

待たされて退屈な土方が、ベッドに腰掛け話しかけてくる。

「ええ。一応は」

「一応？」

一色は準備をしながらも土方に目を向け、話したした。

「前天皇、今は上皇ですが…あの人が今の皇后とご結婚される前にちよつとだけ手を出した下働きの娘、それが僕の母です」

「…って、じゃあお前一応どころか、現天皇の兄貴か!？」

さすがに少し驚いた様子で土方がさらに問うと、一色はにっこり笑って、まあ…そうですね、と曖昧に頷いた。

「そんな由緒正しい血統のお前が何で真選組しんたくに入った？」

しばらく黙って、土方は訝しげに一色を薄く睨む。

一色は気付くか気付かないくらい、一瞬眉を寄せるとまた笑った。

「天皇の兄と言っても下賤な庶民の娘との子ですから。僕のことを知るのはごくごく一部ですし、僕が朝廷あそで権力を持つことはないんですよ。だったら江戸に出て自分の力を試そうかと思った、そんな感じですかね」

また何を考えているのか分からない笑顔だ。きつとこれ以上は聞き出せない。

土方はわざと興味なさげに視線を逸らした。

「ふうん…。こっちは血生臭いぞ」

「そつでしようね」

準備の終わった一色は律儀にベッドを整えると、お待たせしました、と土方に告げる。

立ち上がり、病室を出る土方の背中に一色が呟く。

「聞きたいことはそれだけですか？」

びたり、土方が立ち止まる。

「何でも教えてくれんのか」

「プライベートは教えませんよ」

一色はきつともう自分が疑われていることに気付いているのだろう。

そして、自分が気付いていることを土方に気付“かれて”いると知って、こんな質問をする。

挑発するような一色の態度に、土方は、くい、と口角を上げて言う。

「本当は誰に何を言われてここに来た？」

「それはプライベート、秘密です」

疑われているという事実が確信に変わる。

一色は爽やかに笑って質問を流す。

予想通り期待はずれの返事が返って来たことを、土方は、ふん、と鼻で笑うと病室を後にした。

ドS帝国

局中法度第十二条、マガジン以外の漫画局内で読む事なかれ

「な…何だこれは」

屯所に帰ってきた土方が目にしたのは、散乱するジャンプ、散らかった部屋、そしてなぜかそこかしこにきらびやかに飾られた沖田の肖像…。

土方が口をあぐり開けて目を白黒させていると、前方から近藤が、はっはっは、と笑いながら近付いてきた。

「トシ！やつと帰ったか！やはりお前がいないと散らかって駄目だなあ！」

「散らかってるっつうか…何で数週間でこんなになるんだ」

何これ。総悟の城？

以前（イボ視点で）見たイボの織り成す世界ほどではないが、屯所は確実に沖田色に染まっていた。

沖田の写真、像、絵…。

さらに副長室の入口には“沖田”と大きく名前が貼られていた。

土方がそのまま唾然としていると、傍にいた隊士たちが急に屯所の門に向かって仰々しく敬礼を شدした。

「「沖田副長代理！お帰りなさいませえ！」「」

門から入ってきたのは沖田。横に従者バシリを連れ、敬礼した隊士たちを鋭く睨む。

「お。代理はいらねえって言ったたろうが。殺すぞウジ虫。（代理）くらいにしとけ。どーせもう土方は帰ってこ……」

「誰が帰ってこねえって？」

さすがに黙って見ていられず土方が口を挟むと、沖田はあからさまに残念そうな顔をした。

「あれ。土方さん。もう帰って来たんですか…ちっ」

「舌打ち!?!」

「副長お〜〜!!お帰りなさい!!」

「今まで敵し過ぎるんじゃないマヨネーズ星人とか思っでごめんなさい！」

ウジ虫呼ばわりされていた隊士たちが土方に飛びつき、泣いて喜ぶ。

「痛え痛え！まだ傷塞がってないんだって！……てゆーかお前らいたいどんな仕打ちを受けたの。あと今さりげに酷いこと言ったね」

飛びかかる隊士たちを引きはがす土方を恨めしそうに見遣り、沖田はため息をつく。

「あゝあ。せつかく総悟・ド・S帝国をつくろうと思ってたのに」

今まで四人の新人隊士を疑ぐっていたが、こんなところに伏兵がいた。

土方の復帰にすっかり感を毛ほども隠すつもりのない沖田を見て、土方は皮肉を込めて言う。

「もしかしてお前が俺の命狙ってんじゃないかねえの」

「えっ。いつも狙ってやすが」

けろり、沖田が答える。

「あ、そうだった。ハハ」

「そつでさア。いやだなあ土方さんつてば。ハハハ」

あっはっはっは…

「ちょっと来い」

土方が沖田の首根っこをがしりと掴む。

「帰ってくるなり便所リンチですかイ？陰湿」

「お前ホントむかつく」

土方は怒りを通り越して呆れた表情を浮かべ、きやーたすけてー、なんて棒読みで言う沖田を引きずって自室へと入っていった。

・
・
・

「何か動きはあつたか？」

久しぶりの煙草を堪能し、幾分機嫌の治った土方が沖田に尋ねる。
沖田は引っ張られてシワになった隊服の襟を整えながら、面白くなさそうに答えた。

「なぐんにも。あ、でも中央に行ったとき…天人に釘をさされました。あんまチヨロチヨロすんなって」

「誰を調べてる時だ？」

「花井」

土方は眉を寄せ、斜め下を睨んで含んだ煙と共に言葉を吐き出す。

「やっぱりあいつも臭えな」

「えっ。土方さんよりも？」

「臭いじゃねえよ！まだマヨネーズのこと言う！？」

せっかくのシリアスモードをぶち壊す沖田にキレぎみに突っ込む土方だったが、当の沖田は突っ込みを無視して自分だけシリアスモードを続ける。

「てゆうか大丈夫なんですかイ？足手まといはごめんですぜ」

「大丈夫だ。無理はしねえよ。それに副長の俺ならまだ中央にも入り込みやすいだろ」

「ああ、職権濫用ってやつですかイ？」

「違えだろ！それは権力を私利私欲に使うことを言うの！」

もうヤダこいつ…。

傷だらけのこの身では突っ込むのすら辛い。

もうちょっと怪我人を労ったらどうなの、なんて思っている土方の気なんて知ろうともせず、沖田は、ふわぁ、と欠伸なんてしながらきよるきよると辺りを見回した。

「まアいいですよ別に何でも。ところで山崎は？」

土方は、ふ、と息をつくと諦めたように目を閉じた。

「何かモタついているとかで帰るのは明日だと」

「じゃーまアあとは山崎が帰ってからですな」

そう言ってさっさと出ていく相変わらぬ沖田を見送り、土方またため息をついた。

思案する者、断る者

二番隊隊舎…。

ここには関係のないはずの五番隊の金髪が賑やかに駆ける。

「は〜な〜いくんっ」

出来るだけ関わりたくないやかましい金髪に捕まったのは、二番隊副官補佐、花井新太。

彼はそのでかい身長のせいでも目立ってしまっ。

「ええと、瀬戸君、でありますか？」

「そ〜そ〜。ちょっと話そつや」

「は、話？」

嫌な予感しかしない瀬戸の申し出に、思わずしかめた顔を隠せずに少しどもる。

そんな花井の様子は特に気にせず、瀬戸は、にかっ、と笑った。

「おう。ホラ花井君んとこのおとんは老中、うちのおとんは法務省の大臣…どつちも幕府中央関係者やん？」

「あ、まあ…」

「あ、老中の方が上じゃボケ〜とか思った？」

「いや、そのようなことは…」

終止苦笑いをする花井に、瀬戸は今度はちよっぴり、意地悪に笑う。

「なあ、花井君ってなんでできひんフリしてんの？」

「おっしゃる意味が分かりませんが」

眉根を下げ、困惑したような表情をつくる花井に、瀬戸はさらに「ヤニヤ笑って言う。」

「またまた〜。ホンマは頭イイクせに。あ、ずる賢いって言うんかな」

「…何なんですか？」

無遠慮に絡まれて、温厚に振る舞っていた花井がさすがに少し迷惑そうにつり目を細めて瀬戸を睨む。

当の瀬戸は、ぷっ、とおちよくるように笑うと、真っ直ぐ花井に視線を投げかけた。

「俺と組まへん？」

「組む？」

怪訝そうに、花井が首を傾げると、瀬戸はひと呼吸置いて急に笑顔をどす黒いものに変える。

「父親に言われてんねやろ？真選組潰せ〜ゆつて」

「な、何を…っ」

焦る花井を見て瀬戸はまた、へらりと笑うと花井の肩を馴れ馴れしくぼんぽんと叩いた。

「ええやんええやん。俺もやから。正味ひとりやったらしんどいと思つててん」

「瀬戸君は…真選組が邪魔、なのでありますか？」

「ん？ん〜俺つてゆーかうちの親がな」

花井は悩んでいるのか地面を睨んで、それから瀬戸を真っ直ぐに見

る。

微かだが、目の色が変わっている。

「僕と組むのは…ご両親の指示で？」

「うん。そんな感じだな」

猜疑心の強そうな顔だな。

瀬戸は笑顔の奥で密かに思う。

一方は笑顔、一方は疑いの眼差しでしばらく睨み合った後、この妙な空気を断ち切ったのは花井だった。

「僕も父と…相談しても？」

相変わらず疑っている様子で、花井が言う。

考える時間が欲しいってことな。

瀬戸は、にこっとできるだけ爽やかに笑って、ええよ、と返事をした。

・
・
・

人氣がなく、真つ暗な夜の道。切れかけた街灯がチカチカ光る度に側溝に佇む髪の長い男の姿が見える。

どうやら電話をしているらしい。

『返事を?』

電話口からどこか楽しんでいるような声が聞こえる。

男も相手の様子を感じ取り、少し笑って言う。

「ああ。結論から言うと、お断りだ」

『何故?』

電話口の男は男の答えを予想していたらしく、さして驚く様子はないが、要求が通らない事に少し不満げに尋ねた。

「俺は権力争いをしたい訳じゃない。それに“兄弟喧嘩”に巻き込まれるのも御免だ」

『…さすが、調査がお早い。それで、調査が終わっても京にいる理由は?』

「なアに。彰治殿に挨拶でも」と

男が不敵に笑うと、電話口からも、クク、と声が漏れる。

『させるとお思いで？』

「簡単には行かんだろうな。でもあの日からつけられ続けてそろそろうんざりしていた」

男はある日からずっと背後にある気配を睨む。

気配の主は日ごとに代わっているようだが、つかず離れず、それは男に付き纏っている。

今まではただ見ているだけ、という風だったが、この電話を切ってしばらくしたらきつと、気配は敵意あるものに変わるのだろう。

『夜道、お気をつけて』

電話口の男はそう残し、電話を切る。

男は、ふっ、と息をつくと、闇夜に薄く光を放つ京の中心、御所を見上げた。

思案する者、断る者（後書き）

お分かりでしょうが後半のふたりは、桂さんと一色です。

桂さんは京都で一色の素性調査をしました。

依頼主

久しぶりに依頼主が訪ねてきたというのに、部屋には気まずい空気が漂う。

上座には微動だにしない白い鳥の化け物。
対面に座る万事屋三人は、ひそひそと相談を始める。

「おい！どーすんのコレ！来た途端だんまりだよ！デジャヴユだよ！」

紅桜の件では、無反応だったエリザベスを前に早々に逃げ出した銀時だったが、今回は両隣のふたりにがちりと押さえ付けられる。

「いちご牛乳出すアル！きつとまた泣いて喜ぶネ！」

「いや喜んだのかなアレ…でも出してみる？」

そう。あの時は苦肉の策で出したいいちご牛乳で、やっと反応を示したエリザベス。
また試してみるか、と台所へ向かおうとする新八の着物の裾を、銀時が掴む。

「ふざけんな馬鹿！あれはやがて銀さんの体液になる命の聖水なんだよ！てかまたって何？前にも出したの？」

「ちっ…小さい男アル。いちご牛乳のひとつやふたっ…」

いちご牛乳ひとつで必死な銀時に、神楽が舌打ちすると、

「じゃあてめえ酔昆布献上しろよ！」すっぱ『って言うかもよ！」

銀時も大人げなく応戦する。

「嫌アル！酔昆布は私の中を流れるなんかよく分かんない汁になるアル！」

「ちよ、やめなよふたりとぶほっ！」

しょうもなく卑しい争いのとぼっちりを受けた新八が吹っ飛ぶと、ちよとどエリザベスの足元に落下する。

ぼとり、頭上から雫が舞い落ちる。

涙だ。

「エリー？」

神楽が心配そうに言うと、エリザベスはよつやく、すっとプラカードを掲げた。

【桂さんが…】

「？」

【桂さんが、消えた】

「消えた？」

「ホントアルか？エリー」

こくん、とエリザベスが頷く。

「どーせまたどっかでスタンバってるだけじゃねえの」

銀時はエリザベスを胡散臭そうに見て鼻をほじる。

そんな銀時の態度に神楽が怒りだす。

やっぱり女子供は動物（？）には弱い。

「銀ちゃんネリケシーがないアル！それにいつもはエリーも一緒だったネ」

神楽の意味不明な単語に迷うことなく、デリカシーな、と返し、銀時は目を細める。

さすが親子（もどき）。

「懐かしいな〜ねりけし。金持ちはカラフルな匂い付きを持てるけど俺ら貧乏人は消しカス集めてねりねりねり自家製だよ？真っ黒になった汚え塊を大事に机に置いてたら母ちゃんに捨てられるんだよっ！くっ…！」

「銀さん話逸れてます。あの…エリザベスさん、何か心当たりはないんですか？」

新八がさらりと突っ込んでエリザベスに尋ねる。

エリザベスは少し俯き、すっ、とプラカードを上げた。

【もしかしたら…】

「何かあるネ!？」

【この間、変な男に声をかけられて…】

「変な男？」

こくん、エリザベスはまた頷き、続けた。

【桂さんに、一緒に真選組を壊滅させようって…】

「真選組を…攘夷浪士ですか？」

あんな桂でも、倒幕を狙う連中の中ではカリスマ的存在のひとりだ。いろんなところからお声がかかってもなんらおかしくはないし、珍しくもないだろう。

だけど今回のお誘いはなにか違うらしかった。

【男は真選組の隊服を着て、自らを朝廷の使者と言っていた】

「！」

三人は驚き、目を見張る。

その中で銀時だけが、そういえば猛がそんな事言ってたな…、と先日进行を思い出していた。

「…チョーデー？」

驚いた割によく分からずに首を傾げる神楽に新八は、天皇陛下のいるところだよ、と答えてそのままエリザベスにさらに尋ねた。

「で、桂さんは朝廷と手を組むためにあっち側に行っただって事ですか？」

【桂さんは断るつもりだった】

銀時が、ふっと息をつき言っ。

「まあ…簡単に断らせちゃくれないだろうな」

「じゃあ、ひとりでケリをつけに…？」

【多分…】

沈黙が漂い、しばらくして新八が、ん？と零す。

「てゆうか…真選組の隊服？」

聞き流していたけど、大事な点だ。
神楽が興奮ぎみに前のめる。

「スパイアルか！？」

「だろうな」

「銀さん…」

適当に返したら、みんなの視線がやけに痛い。
銀時は堪らずソファから腰を浮かす。

「…やだよ銀さん。朝廷とかコワイ」

「エリーがめっさ見てるアルよ！」

【そつだ、京都へ行こう！】

「どこの鉄道のまわし者！？」

知らない知らないと耳を塞ぐ銀時の横で、神楽が“京都”に反応を示す。

「京都！？行きたいアル〜！舞妓は〜んとあは〜んな遊びしたいアル！」

「なに？あは〜んって…」

呆れたように言う新八も、ちょっと“京都”の響きには魅力を感じるらしい。

ちらりと銀時を見る。

「吉原行ってくればいいだろ。もっとあっは〜んしてうつふ〜んしてくるよ！だいたいウチにはそんなところ行く余裕ありませんっ」

結局最後はお金の話に持っていく。

京都旅行なんて貧乏な今の万事屋には所詮夢物語だ。

の、はずだったが…。

【旅費なら出す】

エリ（鶴）の一声が、文字通り上がる。

「マジアルか！？行こう！銀ちゃん行こうよ！」

「え〜…」

待ち構えていることは間違いなく面倒事だが、神楽のきらきらした顔と無料タダにつられて、銀時たちは最終的には京都へ足を運ぶはめになるのだった。

依頼主（後書き）

私はカラフルなねりけしも持ってましたが、消しカスねりねりもしました。

最近のおもちやはすごいから今の小学生はねりけしなんかで遊ばないんだろうな…。

そもそもねりけしって何が楽しいんだろう。

京という土地

昔は京に行く、なんて言うの大層な準備をして何日もの旅になったものだが、文明の進んだ今となつては京都なんてももの数時間で着く。

だが万年金欠の万事屋にしてみれば、住み慣れた土地を離れて遠出することなんて滅多にないこと。

三人と一匹(?)は当初の目的を忘れて数時間、観光にふける。

「キャツホーイ！京都〜！」

「あ〜あ〜。はしゃいじゃって」

呆れたように言う銀時の手には、ハツ橋、お抹茶、その他有名和菓子店の袋…。

そんな銀時の姿に、新八がもつと呆れて言った。

「銀さんだつて。あんなに嫌がつてたくせに十分満喫してるじゃないですか」

「銀さんは順応性ハンパないからね。来たからには楽しむの」

新八は、子どもなんだから、と笑うと、眼前に広がる京都の町並みを眺める。

「でも何かアレですね。建物なんかは情緒ある感じだけど、結構人がごった返して騒がしいですね。普通に派手な天人もいるし」

新八の言う通り、街は人で溢れ返っていた。

よく偉い人が高い建物やカラフルな看板が景観を乱すだなんだ言っているらしいが、一番景観を乱しているのはこのごたごたとした人ではないだろうか。

前方を駆ける神楽のこともすっかり見ていないと逸れてしまいそう……いや、隣に目立つ変な生物エリザベスがいるから平気か。

「まー観光地だからな。中心部に行くと大分違つよ」

銀時は若干うんざりしつつ新八に返事をし、無遠慮にぶつかってくるおばちゃんという種族に舌を鳴らす。

「来たことあるんですか？京都」

「…昔、一度だけな」

「？」

何か知った風に少し眉を寄せる銀時を新八が不思議そうに見上げたところで、前方の神楽がでかい声をあげてこちらに手を振った。

「銀ちゃん！ぱっつあくん！エリーがあっちだって！チョーテー！」

【早く来い】

「はいはい…ん？どうしたんですか銀さん？浮かない顔して」

また苦い顔をしてあさつての方向を向く銀時を、新八が怪訝そうに見つめる。

銀時は、別にい、と歯切れ悪く答えると、すぐに進行方向に視線を戻して、新八を追い越してさっさと行ってしまった。

不思議に思い何となく銀時の見ていた方に目を向けると、ヒソヒソと話す地元の人らしい二人組が目に入る。

二人組は新八と目が合つと、さつと目を逸らしてそそくさと行ってしまった。

「?」

新八がまた不思議そうに首を傾げたとき、前方から神楽の大きな声が響いてきた。

「何でアルか!?!」

「いや、だからこつから先ガキは行けねえんだって」

どうしたの？と近付くと、神楽が不機嫌そうにこちらを向いた。どうやら銀時から突然、待機命令が出たらしい。話を聞いた新八も、抗議の声をあげる。

「ええ？未成年立ち入り禁止？そんな話聞いたことないですけど…」
ふたりして銀時を睨むも、その銀時も引かない。

「この先はディープでエロエロの世界なんだよ！童貞とガキには刺激が強すぎるのっ！」

「ぐぬぬ！ひとりだけ楽しんでくる気アルな！エロオヤジ！」

「そこ羨ましがるとはなんかおかしくない？でも、中心部は上品で雅な感じでしょ？かぶき町の方がよっぽどいいかわしいと思うけど」

「これだから童貞は…経験あるフリしてネット発信のエロ知識披露して恥かくタイプだよ」

「しねーよ！んなことしねーよ！童貞馬鹿にしてんのか？あアん？」

理不尽な銀時にも落ち着いて反論していた新八だったが、ついに我慢できずに怒りだす。

しかし銀時は態度を改めることなく、すっ、と傍観していたエリザベスを指差す。

「ほら、エリザベスさん見てみるよ。余裕の表情だよ。ありゃ百人斬はいつてるね」

「くっ！いつもと同じ顔だけど余裕に見えるっ！男前に見えるっ！」

馬鹿な言い争いが延々続くかと思われた時、先程まで怒っていたはずの神楽が、ふっ、と呆れたように息をついた。

「もういいネ。さっさと行くヨロシ」

「神楽ちゃん？」

「なんか必死で子ども遠ざけてエロエロしようとしてるのが哀れアル。いつも変なところ扱い遣ってエロ本読むのも我慢してるみたいだからたまには行ってくればいいネ」

神楽は、しっしっ、と手をはためかせ、男前に背中を向けた。

「か、神楽ちゃん…っ！」

よ、余裕だ！

本当の男前居たっ！

その神楽の姿に、新八のみならず銀時も感服してキラキラとした視線を向けたのだった。

・
・
・

【悪いな】

「あ？」

エリザベスとふたりきりになってしばらくした時、ふいにプラカードが上げられる。

銀時は、ぴくりと少しだけ反応し、よく分からないフリで次の言葉を待ってみる。

【京都という地のことを忘れていた】

どうやらエリザベスも知っていたらしい。

「あゝ……。知ってたのか。お前は？大丈夫なの？」

【人目気にしてたら国家反逆なんてできない】

「あゝ。まあ、そっか」

銀時は適当に返すと、嫌でも聞こえてくるヒソヒソ声に眉を寄せた。

見て見てあれ。天人やわ。

嫌やわ。何でこんなとこまで入って来たんやろか？

見て。あの髪の色。化け物みたいやわ。

怖いわあ。目、合わせたらあかんで。殺されてしまうわ。

あちこちから聞こえる嘲笑の声。蔑んだような視線。

今でこそ天人がでかい顔をしてそこらを歩いているが、かつて天人が地球に現れたたのころには“普通”と違う外見の天人たちは差別の対象だった。

力無き者は虐げられ、力を持つ者は恐れられ遠ざけられた。

古からの風習が色濃く残るこの京の中心地では、そんな醜い風習も今だに残っている。

そんな訳で、一般の天人はあまりここには近寄らないのが普通だった。

【一緒にいるせいであんたまで天人に見られるな】

隠す気などまるでないささめきに、エリザベスがばつが悪そうに告

げる。

「別にいいよ。気味悪いだなんだ言われるのは慣れてるし。でもガキにやちよつとキツイだろ」

銀時は、気にすんな、と笑うとすたすたと先へ進む。

そう。きつと神楽がここにいれば、酷く傷付いただろう。そして心優しい新八も。

前に行くもうひとりの心優しい背中を見て、エリザベスは、ふつ、と微笑んだ。

京という土地（後書き）

銀さんに対するエリザベスの口調が分からない…。敬語？

天皇兄弟

「ところどころ」

御所を目の前にして、銀時が呟く。

エリザベスは大きな目を向け、無言で続きを待つ。

「ヅラ誘ってきたのって“天皇の”使者か？」

【？】

「弟勢力じゃねえ？」

銀時の問いにエリザベスは、はっ、としてしばらくするとプラカードを上げる。

【確かに調査中、そんな情報もあがった。でもなんで…】

自分も途中までは、桂を誘ってきた怪しい男の素性調査に関わった。そこで浮かんだひとつの線。それを銀時が知っているなんて。

驚いたように見つめるエリザベスだったが、銀時は、やっぱりなぐ、と軽く返しただけで、早々に会話を終わらせてしまった。

「さうで。行くか」

完全に頭を切り替えて御所入口へと向かう銀時に、エリザベスも考えを御所侵入へと向ける。

【あの警備をどうするか…】

「あ、大丈夫大丈夫。ちょっとだけ待ってて」

普通の者が入れない場所だから隙を見つけて侵入を、と思っていたのに、銀時はそう言うところエリザベスをおいて正面入口、たくさんの警備に囲まれたそこへずかずかと進んで行った。

234

警備員が、近づく銀髪に警戒心を示す。

射殺されてもおかしくない状況だが、銀時の顔はへらへらと締めまらない。

銀時が一言二言話して、対する警備員が何やら無線機で確認をとる…。エリザベスが遠巻きにハラハラしながら見守っていると、銀時は、へらりと笑ってこちらに手を振った。

「おーい、入るぞ」

妙な毛色の貧乏臭い男と、これまた妙な宇宙生物。

先導する従者も屋敷内の貴族連中も、廊下を歩く銀時たちを訝しげに見つめる。

【お前何者だ…？一般市民が御所に入れるなんて…】

「ヅラと一緒にいるのに知らねえの？でもまあわざわざ会話にあげるほどでもねえか？」

銀時は、意外だというように目を見開いたあと、すぐに死んだ魚の目に戻る。

ここの誰かの知り合いなのか？桂さんも？

やはり彼らの交遊関係はよく分らない…。エリザベスが考え込んでいると、先導の従者が急に立ち止まった。

目の前には、繊細な装飾が施された部屋の入口。

従者が、すつ、と一步横に避けると、銀時は少しも遠慮することなくずかずかと部屋に入っていく。

「うーす。アッキー。お久々」

無駄に広い部屋には、座椅子に座った十六、七の青年がひとり。きらびやかではないが一目で上質だと分かる衣装に、上品で端正な顔立ち…。

国民なら一度は見たことのある顔、彰治天皇その人だ。

「銀時。よう来たな」

不躰な挨拶をかます銀時に、彰治は穏やかに返す。

【知り合いか？】

驚いてエリザベスが尋ねると銀時は、おう、と短く答えて続けた。

「こいつがガキン頃に助けてやったんだよな」

「ああ。戦時、数日世話になった。命の恩人じゃ」

今まですれ違ってきた貴族連中と違い、彰治はエリザベスを目にしたも表情ひとつ変えない。

むしろ客人を迎え入れる笑顔、敬意を払うような態度…。

さすが天皇、とでもいえるべきか。

そんな、この国で一番礼儀正しく由緒ある血筋の彼とこの下品で無作法な銀髪に繋がりがあんなんで。

エリザベスが失礼な事を考えていると、彰治は何故だか少し、悲哀を込めて笑った。

「お前はもう京には来てくれんと思ったぞ」

銀時も片眉を下げ、困ったように笑う。

「まあ…ちょっと用事があったな」

「用？」

首を傾げる彰治に、銀時は、そうそう、と頷くと、本題に入った。

「ヅラ来てねえ？」

「小太郎？来ておらんが…？何かあったか？」

やはり、来ていなかった。銀時とエリザベスが顔を見合わせる。

黙り込むふたりを見て、彰治がもう一度尋ねる。

「何があった？わしに力になれることなら言ってみよ」

銀時は黙り込み、しばらくして口を開く。
だがそれは残念ながら質問の答えではなく、また質問だった。

「弟くん、元気？」

「相変わらず話が飛ぶの。孝暗なら昔のまま。わしと目も合わせぬわ」

彰治は自分勝手な銀時に呆れたように笑うと、苦い顔で弟、孝暗の近況を告げた。

「氣いつけた方がいいぜ」

急に少し真剣に言う銀時に、彰治は、ふん、と鼻を鳴らす。

「だてに何年も狙われておらぬ。じゃが…確かにあやつ、最近不穏な動きをしているようじゃ。昔のようにお前が力になってくれるなら心強いのだが。のう、銀時。どうじゃ？」

やはり弟勢力が動いているのは間違いないようだ。
そして、彰治もそれを知っている。

冗談混じりに、しかしあわよくば現実にしたいたいという願望を向けられ、銀時は、勘弁してくれ、と困り顔を作る。

「ワリーけど。今は他でいっぱいいだ。それに俺なんか傍においたらまたネチネチ言われるよ」

「言わせんさ」

「言わないだけだろ」

彰治はしばらく銀時に目で訴えかけていたが、やがて折れて、ふつ、と息をついた。

「忠告、礼を言う。そちらにもなるべく危害が及ばぬように取り計らおう」

「どーも。でも保身を第一に考えろよ。あんたもつ天皇なんだから」

「分かっておる」

銀時が、協力はしてやれねえけど、と付け足すと、彰治は残念そうにまた笑った。

天皇兄弟（後書き）

銀さんたちがどんな感じで天皇と知り合ったかは何となく考えてますが、本編で書くかは微妙です。

とりあえず何か昔助けたくらいに思っただけ…。

ちなみに天皇兄弟の名前は明治天皇と孝明天皇をもじってます。

壊すのは(前書き)

京都に潜伏している“あの人”が登場。

壊すのは

繁華街から離れて、いつもは静寂なはずのそこ。
金持ち、貴族が集う京の中心地区の一步手前。

今夜のそこは少し騒がしい。
う、とか、ぐあ、とか呻いて、背後の旅館らしい建物を護るように配置されていた男たちが地に伏す。

自分が斬ったそれらを通り抜けて黒い隊服の少年はそれらに護られた男の元までたどり着いた。

「また、満月にじゃじゃ馬か」

部屋の窓の棧さんに腰掛け、月見なんて決め込んでいたその男。
自分の部下たちがいと簡単に蹴散らされたというのに、自分たちの敵である警察の制服を着た少年が現れたというのに、男は余裕たっぷりに笑って言った。

男の片目は隠され、睨まれる目玉はひとつだけなのに、まるでたくさん目の目に睨まれているかのようなプレッシャーを感じて少年は少し萎縮する。

が、用があるなら話せと睨む目が告げているようで、少年は意を決して話した。

「ごめんなさい。手荒な真似して。貴奇猛です。はじめまして高杉さん」

珍しく、高杉が一度だけ驚いたように瞬く。そしてすぐにまた笑う。

「光の弟か」

「はい」

「で、一緒に真選組をぶっ壊してえと」

貴奇光の弟、真選組の隊服……。たったそれだけのキーワードで自分が訪ねてきた訳を言い当てられて、猛は大きく目を見開いた。

「は、はい。駄目ですか？」

街で聞き込みをするのに便利だから、わざわざ隊服で来た。指名手配犯を捕らえに来た、と思われるも仕方ないのに自分はそんなに飢えた目をしていただけのだろうか。

「真選組の現役隊士：使えるんじゃないですか？」

背後、部屋の入口。急に聞こえた声に猛が肩をびくりと揺らすと、

さらに声、声。

いつの間にか背後には男女あわせて三人が立っていた。

「怪しいツス！きつと真選組の作戦ツスよ！」

わめく女、あれは“紅い弾丸”来島また子。

始めに言葉を発したのは“変人謀略家”武市変平太。
そして…

「にしちゃあお粗末だな。どう思う万斉」

「ふむ…。リズムはまあまあだな」

高杉の問いによく分からない答えを出したのは“人斬り”と言われ
る河上万斉だ。

ずらりと並ぶ鬼兵隊の幹部たち…。猛の緊張が高まる。

高杉は、ククツと鼻を鳴らして猛に向き直る。

「まア、ここまで来れたことは褒めてやるよ」

はぐらかされてたまるものか。

猛は突き放すように言う高杉にも食い下がらない。

「俺、本気です！剣術だって結構…「だったら近藤を殺して来い」」

重ねられた高杉の声はあまりに冷酷で…。

「えっ…」

猛は一瞬固まってしまつ。

今、何て言われた？

高杉は猛の様子を嘲笑うように言う。

「俺たちが壊してえのは真選組なんてちっぽけなモンじゃねえ。奴らは足掛かりにすぎない」

「幕府、ですか？それだったら俺も…」

怯みながらも猛が言う。だが、高杉は、違つ、と首を振つた。

「違えな。壊すのは、この世界丸ごとだ」

「！」

世界、を…。

「だから近藤の首“ぐらい”取ってこい」

「……………」

高杉の声が、猛の頭にガンガンと響く。

近藤勲…憎き、敵の大将。

変態だけど、腕っ節は本物。それに、そんなに嫌な奴じゃなかったんだ。

潰す、と言ったなら殺す（それ）もひとつの選択肢。

人を、話したことがある人を、殺す…。自分にできるだろうか？

世界を壊す…。

そこまで望んでいた？

じいちゃんに、お絹、兄貴と行った思い出の場所…。

世界、世界、壊、す…。

猛はふらりふらりと部屋から出ていった。

「いきなり厳しすぎやせんか」

ふらふらと覚束ない足どりで帰っていく猛を見遣りながら、万斉が
呟く。

続いて、他のふたりも話します。

「近藤は局長だけあってなかなかのやり手ですからねえ」

「まあ先輩は下っ端隊士にも勝てないツスけどね」

「私は頭脳派ですから」

普通なら怒るところだが、武市はポーカーフェイスのままさらりと
かわす。

そんないつものやり取りを尻目に万斉がまた呟いた。

「結局は体よく追いついたというわけでございな」

「ククツ…それで万にひとつ奴が近藤の首を持ち帰ればラッキーじ
やねえか」

と、ここで武市が思い出したように晋助を向く。

「あ、晋助殿、報告があつたんでした」

「何だ」

「桂小太郎…彼がこの京に来ているようですよ」

「ヅラ？何しにだ」

突然出てきた旧知の男の名に、高杉は怪訝そうに目だけを武市に向ける。

武市は、こほん、と咳ばらいをひとつ、先を続けた。

「噂では朝廷側と組むんだとか。少々厄介ですね」

「…天皇？今さらしゃしゃり出て来るか。まアヅラのことだ。多分協力を迫られ断りにでも来たんだらうよ」

返事までに微妙に空いた間…。

武市は少し気になりつつもさらに返した。

「朝廷の誘いは簡単には断れないでしょうねえ」

武市の言葉が終わるか終わらないかのうち、晋助が立ち上がり自らの肩に羽織りをかける。

「あ、晋助様、どこ行くツスカ？」

「ちょっと…夜風に当たってくる」

なにか不安げに尋ねるまた子に背中そのまま返事をし、晋助はひとり部屋を出ていった。

男前

「いいの？勝手に動いて。怒られるよ」

「だってあんなの理不尽アル！しかもなんか銀ちゃん変だったネ」

あれから予約していた宿に一度は帰った新八と神楽だったが、日が傾いても帰って来ない銀時たちに痺れをきらせて、ついに動いた。

銀時を言われるまま行かせてやった時は男前だと思ったのに。

新八は苦笑しつつも、神楽に同意を示す。

「確かにさつきは変だったよね。いや、ここに来てから何かどっか上の空だったな…」

京に来てからというもの…銀時はどこかそわそわと周りを気にして、特に神楽をたまに注意深く見ていた気がする。

「どーせまた水臭いこと考えてるに決まってるネ」

「ごちゃごちゃ考えていた新八だったが神楽に、ふん、と鼻を鳴らして言われ、だろうね、と一言、考えるのをやめた。」

随分前に別れたから前方にはもちろん銀時たちの姿なんて見えない

が、行き先は分かっている。

いつの間にか日も暮れ、行き交う人々も疎らになった街を何となく尾行チックに隠れながら進む。

と、前方に見覚えのある、だけど京に来てからは見るはずのない黒い隊服が見えた。

「…あれ？あの子…」

隊服の主にも、見覚えがあった。

そう、あれは確か数日前万事屋を訪ねて来た…。

「あーこないだ銀ちゃんが連れてきた男の娘！」
おんね

神楽がその答えを放つ。

そつだ。確か銀時の昔の知り合いの弟、猛君、だったか。

神楽の言葉通り、確かに彼は女の子みtainな顔つきをしていた。

「神楽ちゃん、失礼だよ。でもなんで京都に？」

「きつと真選組が嫌になってランデブーアル」

「ランデブーって…でも何か思い詰めた表情してるね。しかも随分立派なところから出てきたなあ」

猛が出てきたのは自分たちが泊まる宿とはレベルが違うのが一目で分かる、高級そうな旅館。

事件のにおい…。

神楽が心なしか楽しそうに言う。

「ちょっと行ってみるネ」

「え？銀さん追うんじゃないの？」

「うるさいネ。お前だって気になるダロ」

「まあ、ね」

この遠い土地で見るとは思えない隊服、おそらく単独、立派な旅館…。

確かに事件のにおいプンプンだ。

正直、気になる。

少し迷ったが、新八も着いていくことに決めた。

「あつ！待って！誰か出てきた！」

さて行こう、そう思った時、目標の旅館からまたひとつ人影が出て

くる。

「「！」「」

ぶらりと姿を現したのは派手な羽織りを肩に掛け、片目を包帯に覆われた男…。

「あ、あれは確か…高杉、さん…。まさか、真選組とテロリストが…？」

急いで物陰に隠れ、息をひそめる。

高杉はなんとも形容し難い独特のオーラを纏い、先程猛が進んだ方とは逆の方向に歩いていった。

「追っネ」

神楽は、ぐっ、と傘を握り締めて高杉の行った道を睨む。

「え、だ、大丈夫かな？」

「情けない声出すなダメガネ。なんかあったら逃がしてやるから安心するヨロシ」

「…っ！」

一言残してすぐに背中を向けてさっさと行ってしまおう神楽に、やっぱり男前さを感じる新八なのだった。

男前（後書き）

男前な神楽ちゃんが好きです。

お決まりの台詞

大きな月の光に照らされて、赤黒い液体がてらてらと光る。

自らの体から流れるそれをぼんやりと見遣り、先程から執拗に下りようとしてくる瞼に抵抗することをやめる。

そのまま心地好い暗闇に包まれていたい、そう思っていたのにそれは頭上からの声に遮られた。

「よオツラ。また死んだふりか？」

開いた目に派手な着物が映り視線を上げると、見知った右目がこちらを見下ろしている。

「…うたた寝だ」

壁に全体重を預けた格好に情けなさを感じたのか目を逸らし答える桂を見下ろし、高杉はくつくつと喉を鳴らした。

「お決まりの台詞はどうした？…相当余裕がねえらしい」

「うるさい。何をしに来た？」

不機嫌そうに言う桂の様子を楽しむように、高杉は口端を持ち上げ

る。

「近くで面白えイベントがあるってえから見物に来たのさ。残念ながらもう終っちまったようだが」

「フン…そういうえば京はお前の潜伏場所だったか」

「まあな」

自分から話しかけておいて黙ってしまった高杉に、今度は桂が話をふる。

「彰治殿の弟…孝暗殿の勢力が動いているらしい」

「興味ねえな」

ずっと京にいたのだ。

この目ざとい男が天皇家のゴタゴタに気が付かないはずはないし、国を混乱させるこの事態に興味がないはずもない。

桂は苦笑し、続けた。

「俺を引き込んで倒幕を目論み、成功してもしなくても全て俺たち“攘夷浪士”に罪をなすりつける魂胆だろう」

「もともと咎人だろう。関係ねえんじゃねえか？」

にやりと笑う高杉に桂も、まあな、と笑い返す。

そのまままたしばらく黙ると、ふいに高杉が小さく呟いた。

「弟、か…」

「？」

「今日…光の弟が訪ねて来たぜ」

「！…仲間に引き入れる気か？」

「適当にあしらった。ああいう真面目くさい奴は足手まといになる。てめえしかり、な」

高杉はそう告げると馬鹿にしたようにまた笑う。

そして桂もまた、高杉の真意を見透かすように笑ってみせた。

「…お前は変なところで優しいからな」

「殺すぞ。いや、勝手に死ぬか」

気分を害したのか、高杉は桂の言葉を一蹴して踵を返す。

相変わらずこいつは、たまに子どもっぽい。

桂は、ふっ、と笑うと本当に自分をおいて行ってしまふ高杉を少し焦りつつ呼び止める。

「おい高杉くん。せめて誰か呼んできてくれない?」

「…チヨロチヨロついて来た後ろのガキどもに助けてもらえ」

高杉は桂を振り返らずに答える。

「えっ?」

言われて桂も周辺に注意を向けると、確かに物陰に見知った気配が垣間見えた。

知っていて後をつけさせたのだろうか。
こいつの考えることはよく分からない。

「じゃあな。ツラ」

高杉は結局そのまま振り返らずにさっさと行ってしまった。

桂は去っていく背中に、今度ははっきりとお決まりの台詞を呟いた。

「…ツラじゃない、桂だ」

おいていかれる者の声

高杉が去ってしばらくして、物陰に隠れていた子どもたちが姿を現す。

「あゝ怖かった。まさか気付いてたなんて」

新八が額の冷や汗を拭いながら言うと、神楽は呆れて言う。

「途中から物凄い殺気飛ばされてたネ。気付かなかったアルか？」

「全然…」

「おめでたい奴ネ。そのメガネは飾リアルか？」

腐っても戦闘部族、夜兎族の神楽の研ぎ澄まされた感覚と自分の感覚に差が生じることは重々承知していたが、ふふん、と鼻で笑う神楽に少々カチンときて、新八が顔をしかめる。

「いつもメガネが本体とか言ってるくせに。それにメガネで気なんて見えないよ」

「ん？本体が…飾り？じゃ、じゃあ新八はいつたどこにいるネ！？」

「ここオオオ！メガネの下っ！」

わざとなのか素直なのか、神楽がボケて新八が突っ込む。そんないつものコントを黙って見ていた桂が口を開く。

「おぬしらがいるということは…銀時も来ているのか？」

失礼なことにすっかり忘れていた桂の存在を思い出し、新八は冷静さを取り戻して問いに答えた。

「はい。僕らエリザベスさんに頼まれて…」

「エリザベスに…？」

「そうアル。ツラが急にいなくなるからエリー、心配してたネ」

「そう、か…」

桂はばつが悪そうに呟くと、すっと俯いてしまった。いつもより元気がないのは傷のせいか、それとも…。

「ところでこの怪我、例の朝廷の人たちに？」

新八が尋ねると、桂は情けなく笑って言う。

「…ああ。協力を断ったからな。一通り倒して撒いてきた。あ、あとツラじゃない桂だ」

「遅っ」

ワントンポずれたお決まりの台詞に突っ込む新八。
その後ろから、ぼつりと小さな呟きが聞こえた。

「撒いてもその先で死んだら意味ないアル」

呟く声は怒りを帯び、そして少し震えていて…。

「……………」

「お前らはいいつもそうネ。巻き込みたくない、とか勝手なこと言っ
て私たちをのけものにするアル」

「神楽ちゃん…」

あちこちに傷をつくって動けないでいる桂に乱暴に、不格好にハン
カチで応急処置を施しながら話す神楽を目にして新八もかける言葉
を失う。

いくら男前に送り出したって、きっと神楽はいつでも銀時たちを心
配しているのだ。

父にも、兄にもおいて行かれた彼女だからこそ。

「いつも散々迷惑行為として、肝心なところで格好つけて巻き込ま

れないなんて、その方がハラ立つネ」

神楽は、おわりっ、と応急処置の完了した傷口を叩くと立ち上がる。桂は痛みでちよっと顔を歪めてすまなさそうに神楽を見上げた。

「…悪かった」

「謝るならエリーにナ」

神楽はちよっとむくれながらも、足どりの覚束ない桂に無言で肩を差し出す。

慌ててその反対側を支えて新八はしみじみと言った。

「神楽ちゃん、相変わらず格好いいよね」

感動の再会？

どこかできくたばっているんじゃないか、そう思って帰る道すがらいなくなった長髪を捜していたのに。

諦めて宿に帰ると、そこ、ベッドの上に下手くそに巻かれた包帯だらけの長髪がいた。

「あ、銀時くん。おつかえり〜」

「…何でいんの？」

ホッとする前にイラッとして、銀時が尋ねる。

「ん？実はかくかくしかじか…」

「……………」

「……………」

「…というわけだ」

「分っかんねえよ！！なに漫画の卑怯な手法使ってるの！？もっかい書くの面倒臭いからってなに八文字で片付く魔法の言葉使ってるの！？」

「ポポポポ〜ン！」

「うるせえ!!」

こっちは心配してやったのに。

悠長にボケをかます桂に銀時のイライラがピークになるうとした時、部屋の奥から救急箱を持った新八と、それを手伝う（邪魔する？）神楽が現れた。

「桂さんが追っ手から逃げてるところで偶然会ったんですよ」

「というか片目追いかけてたらロン毛見つけたネ」

「え？どうしよう全然意味分かんない」

意味不明な神楽の解説に銀時が眉を寄せていると、その後ろからひよっこりと白い塊が姿を見せた。

【桂さん…】

「!…エリザベス、捜しにきてくれたのだな」

桂は先程とは打って変わって真剣な表情をつくる。

エリザベスの不安そうな顔 桂にしか分からないが を見て、先刻神楽に言われたことを思い出す。

「すまなかった」

すっと頭を下げる桂にエリザベスは呆れたように微笑む。これも桂にしか分らないが。

【今度は一緒に連れてって下さいね】

「ああ」

はいはい、よかったよかった。

完全にふたりの世界に入る桂とエリザベスに、新八と神楽は生暖かい視線を、銀時は若干不快そうに眉間にシワを寄せた。

「感動の再会みたいな空気を持つてってるけど絵ヅラがあれだよね」

「ヅラじゃない桂だ！」

……。

突っ込む気力も失せて、銀時はため息混じりに桂に尋ねた。

「……んで？今までどーしてたワケ？」

「ああ……。俺が、妙な男に協力を仰がれたのは聞いたな？」

「おー」

今度はちゃんと話をする気になったらしい。

桂は崩した姿勢を改めてこちらを向いた。

「そいつの素性を調べるために京に来た。いや、もうほとんど分かっていたのだがな」

「何でエリーおいてったアルか」

「今の段階で朝廷を敵に回すのは厄介だ。それに、京都は…」

「？」

エリザベスは天人…。

京に連れて来れば、貴族連中からどういふ扱いを受けるかは目に見えていた。

たとえエリザベスが承知の上だったとしても、貴族の冷たい視線にエリザベスを晒すのは嫌だった。

神楽と新八は口ごもる桂を不思議そうに見ていたが、やがて諦めた新八が新たに尋ねた。

「朝廷ってそんなにヤバいんですか？」

「ん？ああ、貴族だけあつていい武器を持っているのもそうだが…一番恐ろしいのは兵たちの盲信的な姿勢だ」

桂は顔を上げ、また話し出す。

「天皇が神とされてきた時代の考えを現代も引きずっている連中は未だにいる。連中の恐ろしさは、主への狂気あまじに満ちるほどの忠誠心にあるんだ。奴らは主がためなら命さえ簡単に捨て去る」

「恐ろしいよね」

ごくぐり、と生唾を飲み込む新八とよく分かっていない様子の神楽をよそに気の抜けた返事をする銀時を桂は薄く睨み、ため息混じりに言った。

「だがまあ、俺を追いかけ回してたのは正確には天皇の使者じゃない。天皇の弟勢力だ」

「弟？」

「どうやら次期天皇を狙っているらしくてな。元々現天皇は穩健派、弟勢力は過激派、みたいに言われていたから、盲信的な連中なんかは弟側に集まるわけだ」

雅で悠然と見えた京の中心地で、まさかそんなドロドロした事態が起きていたなんて…。

エロエロかどうかはともかく、子どもには見せたくない光景だ。

もしかしたら銀時はそんなことを思って自分たちを遠ざけたのかも
しれない。

新八が、微妙に合っているが正解ではない推測をしていると、銀時が思い出したように、あ、と零した。

「そーいえば俺、彰治クンに会ってきたよ」

新八と神楽が、きよとんと目を見開く。

一方は驚き、一方は疑問から、だ。

「彰治、君!？」

「誰アル？」

「天皇陛下の名前だよ!し、知り合いなんですか?同姓同名ですよね...?」

わたわたと焦り聞き返す新八を横目で見ながら、銀時は何でもないことのように軽く返す。

「うん?天皇だよ。ちょっとした知り合いなの」

「えええ!?!天皇陛下と、アンタらが!?!どっいう知り合いなんですか!?!」

掴みかかる勢いの新八に、銀時は面倒そうに眉を寄せた。

「あゝもゝめんどいウゼー死ね」

「喚くなうるさいネ」

「メガネ」

【童貞】

「えっ僕何でこんな責められてんの？普通に驚くところだよな？てゆーか最後のふたりただの悪口！」

便乗犯三人に思い切りつつこむ新人だったが、悲しいかな、それも面倒そうに銀時にさらりと流された。

「まゝとりあえず気をつけろって言ってきた。俺らにもできる限りは危害が及ばねえようにしてくれろってさ」

「そうか…。だがまあ、いくら彰治殿でもあの弟を完全に止めるのは無理…！」

桂が急に言葉を詰まらせ、他四人も一斉に部屋の入口に目をやる。

いつの間にか開け放たれた扉からは目を血走らせた男が1、2、3…7人。

「ありやりや。早速止められてねえよ。てゆーかお前つけられてたんじゃない」

「はて。フラフラしてたから分かんない」

確かにまあまあ傷を負っている桂を見遣り、銀時がため息をつく。

「しゃーねえな。じゃあ、右端から銀さん2、神楽2、エリザベス2、ツラ1、新八が 2な」

「何！？ルート2つて！？普通に桂さんの代わりすればいいんじゃないんですか！？僕、怪我人より役に立ちませんか！」

新八の叫びはまたしても流されて、各々武器を構える。

「いくアル！」

【了解】

「一人なら何とかなろう」

「いや、僕どうすれば…っ！」

「って計算の時邪魔だよな」

「僕邪魔ってかアアア!？」

新八の叫びがこだまする中、武器を構えたそれぞれは敵味方互いに

目の前の相手に向かって駆け出したのだった。

魅力的な手駒

自分と違って目をぎらつかせた男たち。

違った意味で光を映さない、死んだ目をしているそいつら。

殴っても蹴っても捨て身で向かってくるから気味が悪い。

「こいつら…ゾンビみたいネ!」ドドド

「怖いこと言うな馬鹿! 淡々と倒せ!」ドカツ

「奴らには命令しか見えていないのさ」ザシユッ

【プラカードが何枚あっても足りないぜ】バキッ

「……………」チーン

・
・
・

【ふう、片付いた】

「いい仕事したなあ」

「ぱっつあん、何やってんの?」

「ひとりだけ観戦モードアルか？役立たずが」

「あんたらが僕に仕事与えてくれなかつたんでしょオオオ！」

「新八、仕事つてのは与えられるモンじゃねえ。自分で見つけるモンなんだよ」

「そうアルこのゆとりが」

「正しいこと言ってるけどムカつくっ！」

やりにくい相手ではあったが、彼らの敵ではなかった。

各々の方法で男たちの動きを止めると、いつものようにぶざけ合いが始まる。

ぎゃあぎゃあと言い合いを繰り返していると、折り重なって倒れる男たちの向こう側から声が飛んだ。

「やはりお強くていらっしやる」

「お前っ！」

部屋の入口には、扇子で口元を隠した色白で端正な顔の少年。

驚いた様子の銀時と桂に、少年は親しげに笑う。

「お久しぶりですねえ」

「誰、ですか？」

まだ十四、五…自分や神楽とそんなに変わらないであろう年頃の割に、怪しい空気を纏う少年らしくない少年に戸惑いながら、新八が尋ねる。

「天皇の弟君…孝暗殿だ」

桂が苦い顔で答える。

これが…。

この少年が折り重なる男たちにとっての絶対的な存在で“神”なんだ。

そう思えば少年の纏う怪しげな空気も頷ける気がした。

孝暗は、にやりと笑って、自身を睨みつける桂を見遣る。

「桂君、ごきげんよう。よく生きていたねえ。ますます協力してほしくなりましたよお。考え直さないかい？」

「断る。そもそもぬし、俺たちを毛嫌いしていたらろう」

「嫌いだねえ。でも手駒としては魅力的だあ」

孝暗の話し方は何だか間延びしていて、嫌らしく、不快感を煽る。桂はもう一度眉間にシワを作って孝暗を睨むと、きっぱりと告げた。

「そんなものになるつもりはない」

「ふふ…残念。兄上様になら協力したあ？」

「いや。誰であっても同じだ」

孝暗は一度桂を蔑むように睨みまた笑って、今度は銀時を向く。

「坂田君も、かなあ？」

「俺は面倒臭えのは嫌いだ」

敵意剥き出しで睨む桂とは違い、けだるそうな、でも不快感の見え隠れする様子で目を逸らす銀時に、孝暗は、ふん、と鼻を鳴らすと、くるりと背中を向けた。

「…まあ、いいやあ。この度は失礼するよあ。だけど僕はとってもしつこいから。気をつけてねえ」

どこから涌いたのか、たくさんの男たちに囲まれ、孝暗はそのまま

部屋を出て行ってしまった。

出ていく異様な集団を見遣りながら、桂は大きくため息をついた。

「これ以上京にいるのは危険だな」

銀時もいかにも嫌そうに、桂に向けてため息を吐く。

「もー…これ俺らまで目え付けられたんじゃないかね？」

「最悪アルゝ巻き込むなヨ」

「神楽ちゃんさっきと言ってること違う…」

新八の呆れたようなつつこみの後もぐちぐちと文句を言う銀時と神楽だったが、桂は聞いているのか聞いていないのかさりとそれを聞き流して、勝手に話題を変えた。

「ああ、そつだ。弟といえば高杉が…光の弟に会ったと言っておつた」

「あ、私たちも見たネ」

別に本気の愚痴だった訳ではないらしく、ぴたりとぐちぐちをやめ

て神楽が答える。

そういえば、高杉を追う前は猛を追おうとしていたんだっけ。

新八も思い出し、ああ、と零す。

「あゝ。俺がフツちゃったから高杉んところ行ったわけだ」

けだるげに言う銀時を、桂は驚いたように見遣る。

そうだ。確かに銀時は数日前急に貴奇の話を持ち出してきた。

「…何？お前も会ったのか？」

桂が目を見開いて尋ねると、銀時は逆に面倒そうに目を細めた。

「まアな。真選組潰すんだと」

やめとけて言ったら幻滅された、と銀時はからからと笑う。

桂は、お前らしいな、と笑い、すぐに腑に落ちない表情を作った。

「何故俺を飛ばして高杉なんだ…？」

同じ江戸にいたはずの自分はスルーして、わざわざ遠方の高杉…。

あ、あれだ。俺の潜伏が巧みすぎてきつと見つけれなかったんだ、うん。

桂が自分を慰めるようにぶつぶつ独り言を言っている様子を、銀時は哀れそうに見て、やっぱりけだるげに言った。

「さア。生理的にアレなんじゃね？」

!!

その夜、桂がいじけていつも以上にウザくなったことは言うまでもない。

いつかの気配

「攘夷志士、ねえ……」

ふう、と土方は煙草の煙を吐き出す。

病院から帰ってきた次の日、タイミングよく武州に出張していた山崎も帰ってきて、早速出張の報告会が始まった。

「はい…調べてみると彼の兄、貴奇光は終戦後捕らえられ晒し首になつてゐるみたいです」

「…そりゃあ恨みまさら」

ちやつかりと傍にいた沖田も報告会に参加し、口を挟む。

「仕方ねえだろ。そういう時代だ」

土方は話を割った沖田を軽く睨み、山崎に先を促した。

「ええと、で、貴奇の家に立ち寄ったんですが…」

「何か見つけたのか？」

「いえ。驚くほど何にもなくて。なんでもご両親が亡くなってから貴奇が家の中のもの全て処分してしまつたらしいです」

山崎の表情から予想していなかった訳ではないが、これ以上の情報はなさそうだと判断して土方は、はあ、と息をついた。

「調べられることを想定してたのかもな」

「で？その貴寄はどこにいるんでイ。最近見かけねえな」

沖田がきょろりと周辺を見渡す。

「あ？俺は知らんぞ。昨日帰ってきたところだからな」

「俺も出張行ってたんで」

「俺ア暴政を奮ってたんで…えーとじゃあ間を取って土方さんが悪い、でいきやしょう」

「てめえだよっ！」

土方が怒号を飛ばすも、沖田は悪びれる様子もない。

「そーいや花井と瀬戸も真剣に見てねえや。ま、さすがにひとりで三人も見張るのはキツイでさア」

「一人として見張れてねえだろ！…んで？近藤さんは？」

もういい。コイツに頼んだのが間違いだった。

土方はため息をついて尋ねる。

サボってばかりのコイツも、近藤さんのことなら…。

「ああ。なんか初めはベタベタついて来て鬱陶しかったんですが…最近またストーカー業務に戻りやした。俺もちゃんと見てねえや」

「お前らの危機感^{マスケ}は戦隊モノのヒロイン並か！」

淡い期待も打ち砕かれて、土方は盛大につっこむ。

「大丈夫ですよ。近藤さんはあれで強いし、俺も組織より自分が大事だから深追いはしやせん。どっかの土方^{マスケ}みたいに。（あとつっこみよく分かんねエ死ね土方）」

「アホか！てめえはどうでもいいが近藤さんは仲間には甘え！伊東の 때가いい例だろ（アレだよ。戦隊モノのヒロインって何回さらわれんのつてくらい危機感ねえじゃん）」

「追いかけてるお人が“アレ”だから大丈夫でしょう」

沖田の言葉に、土方が一瞬考える。

近藤さんが追いかけてる女…。近藤さんを護ってくれるかはともかく、確かに近くには寄りたくない女だ。

「ああ…女ゴリラ護衛につけてるようなモン…」サクッ

「副長オオオ!?!」

土方が失礼なことを口にした時、言い切る前に頭に薙刀が刺さる。薙刀が飛んできた先にあったのは、悪魔のような笑顔と…。

「誰がゴリラだコラ」

「あ、あああ姐御オ!」

「ねえゴリラってどこ?この汚いゴリラかしら?」

どす黒い笑みを浮かべながら、女ゴリ…お妙は後ろ手に引きずって
いた“それ”をどさりとこちらに投げ捨てる。

「お、妙さん…」

「局長…」

情けなく(でもなんか笑顔で)転がる“それ”はゴリラ改めこの真
選組の頭…。

今日も盛大にボコられたらしい。

「あんたが屯所ちんじやまで来るなんて珍しいな?」

何とか立ち上がった土方が痛みを紛らわすため煙草に火を点けながら問う。

「このゴリラがあんまりにもしつこいから。駄目よ。ペットはちゃんと繫いどかないと」

お妙は買い物帰りらしく、その手にスーパーの袋を持っている。袋に印字されたスーパーの名前はお妙の家ほど近く。

と、いうことはそのスーパーとは正反対のこの真選組屯所にわざわざ立ち寄ったということだ。

「お妙さ〜ん！僕は貴女と繫がりたいですっ！」

「きゃあ！このゴリラ吠えるわ！」

幾分か回復した近藤は、馬鹿なことを叫んだせいでお妙に踏み付けられ、また白目を剥いて昇天した。

「土方さん」

事を終えて立ち去ろうとしたお妙が立ち止まり振り返る。

土方は一瞬身じろぎしながらも、何だ、と答えた。

「その人、本当に繋いでおいた方がいいかもしれませんよ」

「…どういうことだ？」

「そのままの意味です。何だか知らないけれど、これ以上ストーリーが増えるのはごめんですから」

ストーリーカーが、増える…？

「「「「！」「」」」」

屯所の入口…小さな影が、さっと動いた。

お妙は影を薄く睨んだ後、それじゃ、と一言、屯所を後にした。

「ホラな。やっぱり危ねえ……どうした総悟？」

咎^{とが}めるように言った言葉をどこか上の空で、ハイ、と返す沖田に、土方は怪訝な顔を向ける。

「…の気配…」

「？」

「いや…。何でもありません」

どうせまたいらぬ事を考えていたのだろうと、土方はそのまま黙り込んだ沖田に見切りをつけて、伸びている近藤を部屋に運ぶ。

沖田は先程の影のいた所を睨み、いつか感じた気配を思い出して呟いた。

「またてめえか？ 貴寄……」

いつかの気配（後書き）

私も少し絵を描いてみました。オリキャラのイメージです。下手だから皆さんの妄想力で補完してください。

貴寄

> i 3 6 4 8 6
— 4 5 7 4
<

一色

> i 3 6 4 8 4
— 4 5 7 4
<

花井

> i 3 6 4 8 7
— 4 5 7 4
<

瀬戸

> i 3 6 4 8 3
— 4 5 7 4
<

セピアにするとちょっとアラが隠れる…気がする。

煽り(前書き)

猛が動き出します。

煽り

「ヒマだ」

手当ても済んだしもう一度お妙さんに会いに…そう思って出かけようとしたらキレ気味の土方に、頼むからしばらくじっとしてて、と言われて、近藤は途方に暮れていた。

「いつも何してたっけ…」

今日の巡回当番は夜。

来客もなし。

書類関係は土方がやっているし、おまけに街で捕物があったとかでほとんどの隊士たちが出払っている。

290

「トシに仕事でも貰いに行くか」

別に上司のプライドもへったくれもない近藤は部下に仕事を貰いに行くため、よいしょと立ち上がった。

「局長」

部屋を出たところで、不意に声をかけられた。

「ん？君は確か…六番隊の貴寄君だったか。どうした？」

あまり言葉を交わしたことはないはずだが、さすが局長だけあって新顔の所属と名前位はしっかり覚えていらしい。

にこにここと笑う近藤に、猛も笑い返して会釈した。

「はい。あの…稽古、つけてくれませんか？」

「稽古？仕事は終わったのか？」

「あ、今日非番なんです」

猛は、すつと自身を指差す。隊服ではなく、着流し姿だ。

近藤は、ほう、と唸ると感心したように言った。

「そうか。熱心だなあ。いいぞ。道場の鍵取ってくるから先行っててくれ」

「ありがとうございます」

近藤は、ぼん、と猛の肩を叩くと鍵のある事務室へと向かった。

・
・
・

「さあ、かかってこい！」

今日は稽古の予定がなかったので、だだっ広い道場は静かだった。

やけに声の響くそこで、近藤は上着を脱ぎ、竹刀を構える。

「…いきます！」

猛も竹刀をぐつと構え、近藤に飛び掛かる。

パシ、パシ、バシ、

濁いた音が道場に響く。

近藤は簡単に避けることも出来そうな猛の竹刀をひとつひとつ丁寧に受け止めてやる。

「お、お、なかなかやるなア」

少し強い当たりがあって、近藤が一步後ずさる。

と…

「もう少し脇を閉め…っっ！？」

バキッ、とでかい音がして足元が不安定になる。
宙に浮く感覚に襲われる。

落ちつつ…る？

自分のおかれている状況に気が付くまで数秒…。

どうやら道場の床が抜けたらしい。

床下、地面に直接足がついて、床から首だけが出ている状況だ。

こりゃ動けない。

そう思って見上げると、頭上数センチ、勢いを殺しきれない猛の竹
刀が…。

「！」

バキッ

一段と大きな音が、道場に響いた。

・
・
・
・

「あれ？近藤さんは？」

局長の決済を仰ぐ必要のある　　というかただハンコをもらっただけで
実際は自分が処理している　書類を持参した土方は、空の局長室からの
前で独り言を漏らす。

「ああ、局長ならさっき道場に向かいましたよ」

返事をしたのは、たまたま通りがかった、ひとりの隊士。

「道場？」

今日、道場を使う予定なんかあったか？

土方が怪訝そうに眉を寄せると、隊士はそれに答えるように言った。

「何か非番の隊士が稽古を頼んだみたいで。確かあの…六番隊の…」

六番隊、だと…？

土方がぴくりと反応する。

「貴寄か！？」

「あ、そうですそうです、て副長？」

返事を聞くやいなや、土方はそこから駆け出した。

驚き呼び止める隊士の声になんて耳を貸さずに道場へ急ぐ。

貴奇は今日非番なんかじゃない。

あのがキ、近藤さんに何する気だ…っ！

全速力で走り、乱れた息を整えることもせず、目の前、道場の木戸を乱暴に開ける。

「近藤さ…っ！」

「あれ？トシ。どうした？血相変えて」

名前を呼ばれたその人は、呑気に笑ってこちらを向いた。

「足…どうした？」

道場の真ん中に座り込んだ近藤の足には、くるくると包帯が巻かれている。

そしてその傍らには、救急箱を手に同じく座り込む猛がいた。

猛が、怪我をした近藤を手当てした格好だ。

近藤は苦笑いをして土方に答える。

「いやあ、あの穴にハマってな。ちよつと擦りむいた。道場も老朽化してるんだなあ」

近藤が笑いながら指差した先には、床に空いた大きな穴があった。その数センチ横には、力任せに叩き付けられたであろう竹刀がぶつ刺さっている。

「すみません。僕が稽古なんて頼んだから…」

「いやいや。俺こそすまん。大層に手当てまでしてもらっちゃって」

和やかに笑い合う近藤と猛を交互に見て、土方は呆れたようにため息をついた。

「…貴崎、ちよつといいか」

「…はい」

・
・
・

裏庭をしばらく歩いて人気のない場所に着くと、ここらでいいかと土方が口を開いた。

「お前、今日非番じゃねえだろ」

ただ黙って着いてきていた猛が、土方の鋭い視線に一步後ずさる。

「…すみません。仕事が早く終わったので、どうしても局長に稽古をつけて欲しくて」

猛は俯いて目を逸らしながらもしっかりと答える。

「身動き取れねえ相手に、床に突き刺さるくらいの力で竹刀振り下ろすのが稽古か？」

やっぱり目ざといな…。

猛は悔しくて唇を噛むと、それが土方にバレないようにさらに俯いた。

「…局長がお強いので、つい…ムキになっちゃいました」

「すんでのところでビビったか」

「おっしゃる意味が分かりません」

顔を上げ、睨むような強い眼差しを向ける猛を、土方はさらに挑発する。

「総悟の次は近藤さんか？」

「ファンですよ。沖田隊長、局長、それに副長も」

だんだんと落ち着きを取り戻したのかはつきりと言つ猛を睨み、しばらくして土方は、フン、と鼻で笑つた。

「…とりあえず公務時間中に勝手な行動をしたことについて、反省文だ」

「分かりました」

・
・
・

猛と別れ、いつもの如く部屋でサボる沖田をたたき起こす。

沖田はサボりが見つかってても罪悪感なんて持つはずもなく、逆に起こされて不機嫌そうに土方を睨んだ。

「総悟、今日近藤さんと夜の巡回当番だな？」

「そうですね」

起きがけでぼんやりと目を擦りながら答える沖田に呆れつつも、土方は続けた。

「しっかり近藤さん見張つとけ。ちょっと貴寄を煽ってつきた」

それはつまり貴寄のヤローが巡回中に襲ってくるかもしれないってことで。

沖田は面倒そうに顔をしかめた。

「自分は屯所持機だからって危ないことしないで下せエ死ね土方」

「…コソコソされるより分かりやすいだろ。山崎にも直接貴寄を見張らせるから何かあったらすぐ呼べ」

沖田の態度に土方は若干眉を吊り上げたが、頼み事をしている以上は仕方がない。…というか上司が部下に仕事を言い渡すのは普通のことなのだが。

まあ、怒るのはやめておいた。

「へい」

命じられた沖田は珍しく言い返して来ない土方を横目で見て、気のない返事で手をはためかせた。

名探偵（前書き）

沖田さん独壇場です…笑

名探偵

「ちょっとだけ！ちょくつと休憩してくださいだからっ！」

かぶき町。夜のネオンがきらめく、大人たちの町。

今、俺は怪しげな宿に連れ込まれそうになっている…訳じゃない。

「また土方さんに怒られやすよ」

「総悟。いいか？巡回してもただ歩き回って終わりじゃない。情報収集も大切だ。酒場つてえのは昔っから情報が集まる場と言われているから、情報収集にはうってつけなんだ」

うんうん、と頷きながら近藤さんが言う。そう、俺たちは今、巡回を終えて帰ろうとしている。

真面目に仕事をしていたのに、とあるスナックの前に来た途端、近藤さんがそわそわしだした。

冗談じゃねエヤ。

せっかく無事に巡回も終わりそうなのに、そんなところに寄っていたらまた朝帰りだ。

いいか、もし近藤さんが例の店に寄りたいたただをこねたら…

不本意だが、土方の案に乗るとするか。

「じゃあひとりで行ってきて下せエ。眠いんで俺ア先に帰ってまさら。帰ります。“ひとりで”寂しく“夜道を”」

「えっ…？それはマズいな…」

ホラ、近藤さんがぶつぶつ言い出した。

「仕方ない。今日は諦めよう。うん」

お前がひとりで帰るっついたら諦めるさ。狙われてるお前を心配してたから。

土方の言う通り、近藤さんはなんやかんやで俺を護ろうとしてるらしかった。
名残惜しそつにちらちら『すまいる』を見ながらさつさと歩く俺に着いてくる。

「近藤さん、怪我は？」

「ああ。たいしたことない。猛君が大袈裟に手当してくれただけだ」

「ふーん…」

仕掛けてきて手当てして。いったい何のつもりだ？
今だってあの時と同じ、場所を掴ませない気配はずっと着いてきて
るが、ちつともかかって来ねエ。

このままじゃあ屯所に着いちゃうぜ？俺を警戒してんのかね？

「近藤さん。やっぱ例の店、行つてきなせエ」

「えっ…でもなあ…」

近藤さん、そわそわしすぎでさア。

素直な人だ。ちよつと嬉しそうな顔しやがった。

「俺なら大丈夫でさア。山崎と帰るんで」

「ザキ？」

「ほら、あの電柱の裏」

電柱から覗く山崎を指差す。てめえはバレバレなんだよ。馬鹿。

「「な、何でバラすんですかア！」」

「「いーからいーから」」

焦る山崎を適当になだめて、嘘をつく。

「どーせふたりとも土方のバカに俺を見張れとか言われたんでしょ。屯所もすぐそこだし俺は大丈夫なんで近藤さん、行って下せよ。さつきからそわそわしすぎだし」

ポン、近藤さんの肩に手を置く。
すごい嬉しそう。

「そ、そうか？じゃあちよっとだけ…。頼んだぞっ！ザキっ！」

「あ…はい」

近藤さんは山崎のやる気のねえ返事を聞くと、スキップなんてしながら『すまいる』へ向かった。

さあ、エサは蒔いてやったぜい。

「沖田隊長お〜」

山崎が恨めしそうにこっちを向く。うぎってエ。

「「あのガキ、こつでもしなきゃ出てきそつにねエ。それじゃ意味

ねえだろ」

「「ま、まあ…じゃあすぐに追い…」」

即座に近藤さんを追おうとする山崎の馬鹿を、ガシ、っと止める。
今行ったら意味がねエ。

「帰るぞ〜」

「えっ！？ちよっ…」

「「うるせエな。アイツがまだ見てんだよ」」

「「で、でも…」」

「「近藤さんなら大丈夫だ。行き先は分かっているしさつき服に盗聴器と発信器をつけておいた」」

その辺は用意周到。

さつき近藤さんの肩を叩いた時、くっつけといた。

山崎がマヌケ面を向けてくる。

「「あ、あの時！？でもそんなもんどころ…」」

驚く山崎の前で、さらに驚くだろうモノを取り出す。
見覚えのある、やけにレンズのでかい黒ぶちメガネだ。

「「あとはこの追跡メガネで…」」

メガネをかけてみると意外にでけエ。あいつら頭でけエからな。

山崎の奴、口をパクパクしてやがらア。

「どこのコ ン君んん!？」

「でけー声出すなバカ。ちょっと拝借してきただけでイ」

「いや、それなかったらコ ン君困るよ!蘭ねーちゃんに正体バレるよ!例の組織追えないよ!」

「大丈夫だ。これ予備の追跡メガネだから。灰 さんのだから」

ヤローのメガネなんて御免だしな。

「ちょっともうやめて!これ以上世界観壊すのやめて!」

うるさい山崎は放っておいて、メガネに映る光の点めがけ、名探偵ソウゴは華麗に出発した。

「ちょ、もつなんなの今回!沖田隊長自由すぎ!」

名探偵（後書き）

今回初めて最初から最後までキャラクターにナレーションをさせてみました。

やっぱり結構難しいですね（^^；

ちょっとはちやめちやな回になっちゃったかも…？笑

その首を

ドクン、ドクン

自分の動悸がうるさい。

やっぱり、副長の言う通りビビっているのか…。

あの時、心は決めたはずなのに。猛は躊躇する自分自身を薄く笑った。

首だけになった兄を思い出す。

それを見て狂った母と、そんな母を眠らせて自分も眠った父を思い出す。

お前は生きろと言った父の無念そうな顔を思い出す。

ぎゅっと奥歯を噛み締め、前を向く。

前方には無防備にひとりで歩く標的。

もう自分の気配には気付かれているかもしれない。

先程から近藤は、ちらりちらりと後ろを振り返っている。こちらの詳しい場所が掴めずにもどかしい様子だ。

ちらりと気配を臭わせては消してみる。

何度かそうしているうちに近藤は、すい、と横道へ入っていった。

誘いに乗ってきた…。

追いかけて、路地裏に入る。気配を断って後ろから…。

ガキイイン

振り下ろした剣は、すんでのところで受け止められてしまった。

「うわ。びっくりした」

気配を察知していたからか、近藤は言葉とは裏腹にさほど驚いていない様子はない。

「…わざわざこんな人気のないところに。ご苦労なことですね」

「お妙さんのところに危険をもち込む訳にはいかんからなあ」

狙われていると分かっている、何故？猛は、ぐっと眉を寄せる。

「なんで応援呼ばないんです」

「ん？必要ないと思ったからだ」

「…っ！あんまり俺を甘く見ない方がいいですよ」

「そーゆー訳じゃ…」

ガギンッッ

近藤の否定の言葉を打ち消し、猛が飛び掛かり、近藤を睨む。

「真選組局長、近藤勲…お首頂戴します」

「仕方ないなあ…」

完全にやる気になってしまった猛を前に近藤は、カチャリと剣を構える、と…。

グニャ

「えっ？」

手元で妙な感覚……。持った刀に目を遣る。
真っ直ぐに伸びているはずの刀身は何故だか、ぐにやりと曲がっている。

「ええええええ！？」

対峙してまもなくの時とは違って本当に驚いた様子の近藤に、猛は自らの刀をかざして冷たく言い放った。

「僕の刀は特別製です。中に絡繰が入っていて刀身は高熱を帯びている……。あなたの刀は二度、これに触れた」

なんつーモン持ってるんだ……。

「戦いの前に傷んだ刀、か。なんか嫌な記憶思い出したな」

そう、初めて銀髪と対峙した時……。

あの時は負けたんだっただか。

近藤は眉を寄せつつも、うっすら笑った。

ただの稽古

なんで…なんで傷を与えられない？

刀は、振っても振っても当たらなかった。

道場での一件で近藤は多少であれ足を負傷している。刀もこの絡繰の刀を相手にして、もうぐにゃぐにゃでボロボロだ。

なのに当たらない。

それどころか近藤は自身の刀の曲がった箇所を治すように、器用にその部分で刀を受け止めたりもしている。

これじゃ自分は、まるで熱い鉄で刀を打ち直す刀鍛冶だ。

「なん、で…」

「そりゃお前が本気じゃないからだ」

どこか余裕さえ感じられる表情で近藤が言う。

「俺は、本気ですよ」

「無意識に力を抑えてるのさ」

剣撃は緩めず、ぐっと睨むも、近藤の表情は変わらない。

「局長まで…俺がビビってると？」

「人を傷つけるのにビビるのは悪いことじゃねえ。当たり前のこと
た」

殺す、と言っているのに何なんだ。
猛は刀を握る拳をきつくし、叫ぶ。

「俺は…！あんたら幕府の人間が憎い！」

「そうか」

「…別にあんたが悪い訳じゃないことは分かってるんだ。でも…」

ぎりり、と歯を食いしばる猛にも、近藤は穏やかなまま表情を変えない。

「まあ仕方ねえなあ。俺は幕府に仕える、真選組の局長だ。立派な
“幕府の人間”だよ」

「幕府は兄貴を殺した。親父とお袋を殺した…っ！」

感情的になり、徐々に粗くなる剣筋を受けながら、近藤は、ふつ、と息をつく。

「俺は…剣の腕で総悟にや勝てねえし、頭のキレでトシにや勝てねえ。だから俺はただ局長として、組の責任は取るうと思っ」

「責任…」

「そうだ。ムシのいい話かもしれんが、俺の首ひとつで勘弁してくれんか。あいつらのことは許してやってくれねえか」

最初はからそのつもりだ。

俺は、局長を、こいつを、殺す。

猛は迷う心を奮い立たせるように、呟いた。

「憎い、憎いだ…」

うわあああ！

ザシュツ、と生々しい音がして、ぱたぱたと赤黒い液体が舞った。

刀は急所からは逸れて近藤の肩に傷をつけていた。

少しだけ顔を歪めた近藤と目が合って、猛は刀をその手から零す。

目の前の男は、憎き“幕府の人間”。

なのに…

なのに…。

「なのに…っ！あんた何でそんなにいい人なんだよっ！お願いだから、もっと嫌な奴でいてくれよ！」

刀を掴んでいた手は、空気を掴んで握り潰す。
戦意を喪失した拳を見つめ、近藤は呟いた。

「いい奴なんかじゃないさ。今もこんなしょうもない解決策しか浮

かばん。首をやるくらいしか、お前にしてやれることがねえんだ」
違う。

俺は、兄貴の首が欲しかった訳でも、このお人よしの首が欲しかった訳でもないんだ。

「首なんて、いらない…俺はただ…兄貴に生きててほしかっただけなんだ…」

俯き奮える猛を前に、近藤が言葉を紡ぎあぐねていると、路地の向こうからバタバタと騒がしい足音が駆けてきた。

「近藤さん!」

「局長!」

「ザキ、総悟? 帰ったんじゃ…」

先程別れた部下たちだ。

ひとりは見慣れないメガネをかけている。

イメチエン?

近藤が、ぼおっと見ていると、近寄ってきた山崎が驚いて声をあげる。

「大丈夫で…って、肩！血がつ！」

近藤の傷を見て表情を変えた沖田が、俯き動かない猛に、バツと視線を移す。

「てめえ！」

「よせ！何でもねえよ！」

刀に手をかけ、今にも猛に斬りかかろうとする沖田の肩を、近藤が掴む。

沖田は少し不服そうに眉を寄せ、刀から手を離した。

「言いたかないですけど明らかにこれ、謀反行為ですよ」

しかしいつも厳しい副長のもと、局中法度を聞かされている山崎としてはこれを簡単に見逃すことはできない。

「処罰は受けます」

当の猛も、観念したようにまっすぐに前を向いてはつきりと言った。

「稽古…つけてくれって言ってたよな」

近藤がぼつりと呟く。

「え……」

昏間は確かにそう言ったけど、それは嘘で。

猛が、ぼかんと口を開く。

「こりゃ……ただの稽古、そうだろ」

近藤は続けてはっきりとした声でそう言うと、にかっと笑った。

「……あゝあ。近藤さんのお人よしには敵いやせんや」

横にいた沖田が呆れたように言うと、

「まあ……局長が言うなら仕方ないですね」

山崎もため息をついて言った。

「と、いづいづとで……俺はお妙さんのとこに……」

「駄目ですよ！帰って手当てしますからっ！」

山崎は、全く懲りない近藤の傷ついた方の肩をわざと強めに掴む。

「痛あっ！ちよ、痛っ！」

何事もなかったかのように騒ぐ近藤たちを前に、猛が、ぽかんと立ち尽くす。

「なに突っ立ってんでイ。帰るぞ」

さっさと帰ろうと背を向けた沖田が言う。

猛はまた俯いて、ぐっと目頭を押さえた。

「ホント、馬鹿の付くお人よしだよ…あんなたち」

ただの稽古（後書き）

またお人よしネタ？って感じですが、許してやって下さい…笑
わりと簡単に解決しちゃいましたね。

光

「なんだそれ」

副長室。

呆れ返る土方の前には、事の次第を報告する沖田と山崎。

隠れて監察しているはずの山崎は当然のように一団と一緒に帰ってくるし、近藤はなにやら怪我をしているし…。

「仕方ないじゃないですか。局長が何もなかったって言い張るんですから」

「そつでさア。仕方ないよトシ」

報告はふわふわしていてよく分からないし、沖田は生意気に茶化してくるし、山崎は地味だし…。

「はあ…大丈夫なんだろうな？」

「大丈夫でさア。多分」

「見た感じもう敵意はなさそうでしたけど…」

「そりゃお前らの主観だろうが」

実際に現場にいた訳ではないから、貴寄はもう大丈夫、なんて言われても、はいそうですか、とは言えない。

追跡メガネとやらで会話を聞いていたという沖田の報告は適当だし、山崎にいたつては監察のくせに、どーなってそーなったか分かりません、ときた。

まああとは本人に聞くしかないな…。

土方がそう思った時、ちょうど呼び寄せた人物が部屋の前に着した。

「六番隊副隊長補佐、貴寄猛、馳せ参じました」

「入れ」

襖の向こうの影が名乗った名前に、あ、と山崎が声を漏らす。

「貴寄？」

「お前らの話じゃ心許ないから直接話を聞いて判断する」

「土方さんは陰湿だから。ネチネチ聞かないと気が済まないんでさ
ア」

ブン

サッ

ゴチッ

苛立つてついに出た土方の拳は宙を舞い床に落ちる。

「~~~~っ!」

「失礼します…:どうかしました?」

すっ、と開いた襖から現れた猛は、俯き拳を抑える土方を不思議そうに見た。

「何でもねえ。そこ座れ」

猛は用意された座布団に腰を下ろし、ふうーっと長い息を吐いた。

「じゃあまず、俺の素性から」

「もう調べてると思いますけど…:俺の兄貴、貴奇光は攘夷志士です」

「あア」

「兄貴は戦争も終わりかけの頃、国を憂いて戦地へ旅立ち…:“戦犯”として裁かれました」

そこまでは山崎の調査で聞いた点。聞きたいのはここからだ。

土方は、吸っていいか、と一声かけて煙草に火を点ける。

「兄貴は…名前の通り、貴家家の、そのご近所一帯の光だった。明るくて器量もあって、頼りがいがあった。みんな兄貴が大好きだった。特にお袋は兄貴を溺愛していました」

猛は少し、視線を落とす。

「だから、シヨックが大きかったんですね。お袋は、首だけになった兄貴を抱き抱えて、発狂、しました」

「おい、大丈夫か」

「平気、です」

猛は唇を噛み、少し震えながら、すみません、と言つと続きを話した。

「それから狂つたお袋は兄貴の首と生活を始めました。首に話しかけ、食事を作り、髪を梳いて…ついには俺に言いました。“どうして猛には身体が付いているの？”」

ごくり、と誰かが喉を鳴らす。

土方も目を細め、静かに続きを待つ。

「お袋はたまにひどく攻撃的になりました。“お前にだけ身体があ

つては光が可哀相でしょ”と。もう抵抗するのもやめたその時、斬られたのは俺じゃなくて、親父でした」

「……………」

「親父は血にまみれながらもお袋を連れていきました。お袋は幸せそうに笑って、親父は無念そうに俺に“生きる”と言いました」

猛はここで、気持ちを落ち着かせるように大きく息をつく。

「全ては兄貴を奪われたその日から変わった…。自分の無力を呪い、墓の前で幕府への復讐を誓いました」

なるほどな、と土方は煙草をふかしながら独り言のように呟く。

山崎はもちろん、沖田もいつになく真剣に話を聞いている。

「皆さんのことはもともと知っていました。武州では有名だったし、特に沖田隊長のことは本当に尊敬してたんです。そのあなたたちが憎んでやまない幕府の下についたと聞いて、ショックでした」

「俺たちやてめえの兄貴のことなんざ知らねえぜ」

「お、沖田隊長っ」

眉を寄せ複雑な表情で呟く沖田と俯く猛を、山崎が焦ったように見比べる。

確かに彼の兄の件も両親の件も、真選組に直接の関係はない。同じ“殺戮”でも勝てば“改革者”負ければ“反逆者”になる。戦争とは、そういうものなのだ。

猛もそれは分かっている。ふっ、と小さく笑った。

「そうですよ。八つ当たりです。情けないですけど」

自嘲ぎみに笑う猛を、責める代わりに土方が言う。

「俺や総悟を襲ったのはお前か？」

「違います。俺がやったのは攘夷浪士に真選組の動きをリークしたり、誰かが沖田隊長に差し向けた浪士が動きやすいように路地裏に沖田隊長を誘導したり、です。実際に攻撃に出たのは今回だけです」

猛は今度は言葉を詰まらせたりはせず、淡々と答える。見たところ嘘はついていないようだ。

「攘夷浪士に逃げられまくってたの、君の仕業だったんだ」

監察として土方らにさんざん文句を言われたことがあったため山崎は若干憎々しく猛を見遣るが、すみません、と下げた頭を上げようとしないうちに焦ったように、もういいよ、と声をかけた。

「やっぱり密偵は一人じゃなかったか…」

何の疑いもなく聞き入れる土方に、猛は大きな目を向ける。

「信じて、くれるんですか？」

「信じるも何も、俺を襲った奴らは明らかに金で雇われていた。武器も上等のモンだったしな。一庶民のてめえがんなもん用意できねえのは分かるさ」

総悟のは知らねえが、と付け足すと、土方は二本目の煙草に火を点ける。

「そうですか…。でもまあ、真選組の評判を落としたり局長を襲ったりしたのは事実です。局長はああ言ってたけど、処罰は受けます」

呟くような声で言って、猛は悲しげに笑う。

「そうだな」

土方はため息でいっそう深く、煙草の煙を吐き出す。

「副長」

「土方さん」

自分を呼ぶ部下ふたりに続く言葉はないが猛の減刑を請っているのは分かる。

なんだかんだこいつらも近藤さんと同じだ。

土方は呆れたようにまたため息をつく、点けたばかりの煙草を灰皿に押し付けた。

「六番隊副官補佐、貴寄猛」

「はい」

「雑用係に降格。向こう一年給料無し、不眠不休で働いてウチのPR活動に尽力しろ。以上」

「！」

「うわゝ鬼でイ」

「青少年には睡眠が必要ですよ。副長」

「文句あるならてめえが辞めろ」

「えっ！」

「そーだな。辞めれば。山崎」

「な、何でこんなときだけ珍しく結託すんのオオ！？辞めないからね！」

亡くした者を思うと悲しく、奪った者を思うと憎い。

でも、いつぶりだろう。今はこんなにも穏やかだ。

そうだ、兄貴の手紙を読もう。

兄貴の死と向き合うのが怖くてずっと読めなかったけれど今なら受け入れられる気がする。

お人よしの兄貴のことだ。自分の“今”が危ない時だって俺の“未来”を心配した文章が詰まっているだろう。

きっとそこには先へ進むための“光”があるから。

猛は、ぎゃあぎゃああと騒ぐこれまたお人よしたちを見ながら、そんなことを思った。

光（後書き）

これで猛編は終了です。

次からはあの二人が動き出します。

密談

とある港の倉庫内に、うごめく影がふたつ。

積み重ねたコンテナに腰かけたひとつが、近付いてきたもうひとつを見てにやりと笑った。

「ここに来たってゆーことは交渉成立、でええの？」

金髪の関西弁は瀬戸准平。

「左様です」

答えたのっぽのつり目は花井新太だ。

「そりゃよかった。ほなさっそく作戦会議しようや」

「了解であります。具体的に何を？」

聞かれて瀬戸は、うん、と首を捻る。
具体的にはあまり考えていないらしい。

「…とりあえず潰すんは近藤、土方、沖田やる？」

「左様でありますね」

「花井クンがやったんは、土方病院送りにしたやつやんな？」

「はい。その後にも入院中抜け出した副長を急遽そこらの浪士たちに襲わせました」

瀬戸は、へへ、と感心したように声を漏らすとそのまま続ける。

「俺ら以外に動いてる奴がおるんは知ってるやんな？」

「はい。六番隊の貴崎君と、五番隊の一色君、ですね…というか僕は一色君に罪を被せようとしてたのですけど」

「どーゆーこと？」

興味津々に尋ねてくる瀬戸に気を良くしたのか、花井は、ふっと笑って説明を始めた。

「副長を襲わせた浪士には京都産の銃を持たせました。そして副長が一色君を尾行している時に、浪士に副長を襲わせた…。そう、一色君に疑いがかかるようにね」

見た目通り陰湿なやり方をする花井に、瀬戸は目を見開き茶化すように言っ。

「うわっ怖あゝ。俺なんかちょこちょこっつと沖田クンにちょっかい

出しただけやわ」

「やはりあれは貴方だったわけですか」

「そ〜そ〜。俺、頭足らんからなかなかうまいこといかんわ」

へらへらと笑う瀬戸に、花井は呆れたようにため息をつく。

「瀬戸君は一色君と貴寄君が密偵だと、どうやって知ったんです？」

「え？見てて何となくやけど？花井くんもそーちゃうの？」

頭の軽そうな発言ばかりのパートナーに、花井はまた、はあ、とため息を吐いて言った。

「いえ。僕は副長の携帯に小型の盗聴器をつけていたのであります」

「えっ!？」

「すぐに電池が切れるので定期的に取り替えていたのですが…沖田隊長に怪しまれたのでやめました」

それで土方の携帯を持ち出していたわけだ。

瀬戸は驚いたのち、ぷっ、と吹き出した。

「はははっすごいな花井くん！結構アグレッシブやね！」

「君は…意外とあまり動いていないですね。協力を仰いだのも領けます…」

瀬戸とは反対に、花井はあまりにいい加減な瀬戸を前に眉を寄せる。

「まあそー言わんといてえや。協力のメリットはあるで。花井クンもそう思っつて手を組んでくれるんやろ？」

「どっせ金が目当てやろ？」

「そうですね」

君は金さえ出していればいい。

口にはせずつもつつぬけの心の声に、お互いがお互いを笑う。

「全面的にバックアップ、させてや」

「ふふ…お頼み申します」

理想郷

瀬戸との密談の次の日…。

もともと非番だった花井は久しぶりに実家に帰る。

この家ではいつも自分の帰宅なんて気にとめる必要のない“どうでもいいこと”だった。

でも、今日は違う。

「よく帰ったな。新太」

「…ただいま帰りました。父上」

普段はない出迎えに、新太は一瞬驚きをみせる。

いつも冷たい視線を投げかけてくるだけの父、古保が、今日はどこか穏やかだ。

「一族で一番の役立たずのお前が、まさか瀬戸とのパイプ役になるとはな」

「…お気に召したでありますか？」

「まあまあだ。瀬戸は少し胡散臭いからな。だが奴らの財力が魅力

的なのは事実だし、我々以上に春雨とも繋がりがあると聞く」

“まあまあ”そう言いながらも今日の古保の顔はいつもより緩んでいるように見える。

初めて父に認められた気がして、嬉しいやら照れ臭いやら。どんな顔をしていいのか分からず、新太は視線を逸らしてそっと呟く。

「春雨との交渉権を独占できれば…」

「私が大老になる日も近いというわけだ」

にやりと笑って続ける古保の後ろの薄暗い廊下から黒いマントが、ゆらり、と姿を現す。

「あなたが大老になれば…私たちも動きやすいというものですね」

「海市殿」

親子は、現れたマントに笠の男を前に、さつと頭を下げる。マントの男は、顔をあげて下さい、と告げると笠を脱いだ。

整った顔立ち、通った鼻筋…だが、それは顔の半分だけ。

もう半分は濁った緑色のおどろおどろしい化け物のそれだ。

「この地球は…天導衆だけに握らせておくには惜しい。まして春雨

など野蛮な一団は国を治めるには向かない」

海市は自分自身の言葉に酔うように目を閉じる。

「着々と力を付け…やがてこの地球ほしを手にするのは我々“計都教”けいとです」

「そうですね」

「血筋以外何の取り柄もない馬鹿が国を治める時代は終わる…。地位でも金でもない。真に強く賢い者のための国を造るのです！」

海市の高らかな演説に、古保は心酔したように息を吐いて頬を緩ませる。

「私はその理想に尽力させていただきますよう」

海市も思わず、ふっ、と声を零すと、真っ直ぐに親子を見た。

「私は義理堅いたちです。尽くしてくれた恩は必ず返しましょう」

理想郷（後書き）

“海市”は蜃気楼のこと。

“計都”はインドの神話とか天文学に出てくる天体です。暗黒で普段は見ることができないけど、太陽や月を隠して日月食を起こす星だそうです。

名前が思い浮かばないとつい天体とか自然現象とかで探しちゃいます。

が、あんまりしっくりきてません…（笑）

鍵

「花井イ？ああゝ。…古保か」

警察庁長官室。

警察のトップとは思えない柄の悪いグラサンに煙草のオヤジは、唐突に訪ねてきた部下の問いに若干不機嫌そうに答えた。

「ああ。話したことあるか？」

あからさまに面倒そうな態度をとってもまるで気にしないで聞いている土方に、松平は諦めたように息を吐くと続けた。

「話すもなにも同期だからね。おじさんたち」

「そうなのか！？確か、法務省の瀬戸も同期だろ？」

「よく知ってるな。お前まさか…」

こいつとそんな話をした覚えはない。と、いうか土方は自分が昔話を始めてもいつも上の空で適当に聞いていた気がする。

じゃあ何で知ってるの？

松平は眉を寄せる。

ひよっとしてお前…

「おじさんのストーカー？」

「違うわっ!」

急に考え込むから何かと思えば、しょうもない、気色悪い疑いをか
けられて、土方は思わずキシギミにつっこむ。

いやいや、こんなことで怒ってどうする、自分。
気を取り直してもう一度尋ねる。

「どんな男だ？」

「どつちも嫌い」

「いやそーゆーのじゃなくて…」

土方が困ったように眉を寄せると、松平は、ん〜、と少し考えてま
た話し出した。

「瀬戸はモテてなア。あ、俺の次くらいにな。要領のいい奴だから
上に気に入られて出世してきやがった」

松平は昔を思い出して不快になったのか、苦い顔で煙草をふかす。

「で、金持ちの嫁さんもらってからはもーお好き勝手よ。職権濫用
もいいとこだ。調べても調べても金に物言わせてぐっちやぐちや揉
み消されて終わりってなア」

「やっぱり天人との癒着があんのか？」

「嫁さんが商売人の家の娘だからな。金持ちの天人とはもうべったりよ」

土方は、ふん、と鼻を鳴らす。やはり山崎の調査報告のままの人物らしい。

続けてもうひとり。
土方が問う。

「…花井は？」

松平はまたちよつと苦い顔を作つて言う。

「古保は…典型的な金持ちのボンボンって感じだなありや。表じゃアくそ真面目で優等生ぶつてたが裏じゃ陰湿なことばっかやってやがった」

「奴も天人と繋がってんのか？」

「ん？あア…天人つつうか確か“計都教”^{けいと}って宗教組織を囲つてたな。いろいろ悪事をはたらいてたが証拠がねエからあげらんかったのよ」

「計都教？」

聞いたことのない組織名だ。呟くと、松平はそれに答えてやる。

「神だか天体だかの名前からとつたらしいが、天人でも人間でも…
種族にとらわれず実力のある者を集めた新興勢力っつー認識だった
ね」

「そんな組織聞いたことねえが…」

「お前らがまだ武州で芋侍してた時の話だからな。それに世間は奴
らをただのチンピラ集団だと思つて軽く見てたし？」

「その組織はどうなったんだ？」

「リーダーが死んで解体したっつー話よ。ま、嘘だろうが」

けっ、と不満げに松平が言う。相当ムカついているらしく、さっき
から煙草を吸う頻度がハンパない。

「何でンなこと…」

「奴ら昔っから隠れてコソコソすんのが好きなのよ。春雨つてえで
かい組織隠れみのにして秘密裏に動いてんだろ」

「何で分かつてて放置なんだ？」

「さつきも言っただろーが。証拠がねえんだよ。揉み消されてんのよ」

松平はもう何本目かの煙草を灰皿に押し付けると、もう忙しいから帰れ、と、しっしっ、と手をはためかせた。

「そうか…ありがとよ。とっつあん」

もうこれ以上は聞いても無駄のようだと判断し、土方はくるりと背を向ける。

が、ドアに手をかけた時、ふいに松平に呼び止められた。

「トシ」

「…何だ？」

「おじさんまだ娘と嫁さん食わしてかなきゃならんよ」

なんだ、保身かよ。

土方は、背中のまま返事をする。

「アンタに迷惑はかけねエよ…たぶん」

「いいやかかるね。絶対かかるね」

松平は、は、と大きくため息をつく、ほれ、と土方に向かって何かを投げて寄越した。慌てて受け取ったそれは、銀色の…

「…鍵？」

「中央資料館の地下第三資料室だ。中に、おじさんしか見られないエロい資料があるから」

おそらくは、土方が聞きたかったことの松平なりの“答え”への鍵だ。

土方は、ふっ、と笑ってまたドアに手をかけた。

「…サンキュ」

「…ちゃんと返しにしよう」

パタリ、と閉まった扉。土方の返事は、ない…。

調査（前書き）

メリークリスマスマ〜ス？

浮かれています。パーティー楽しいです（^^）

調査

副長、駄目でした！

そう言つて大した情報を持ち帰れなかつた山崎をぶん殴り、土方は中央資料館に来ていた。

「計都教…ホントにほとんど資料がねえな」

「土方さん見て下せエ。『世界マヨネーズ大全』」

「うわあゝそそられるうゝ！………じゃ、ねえだろ！着いてきたんなら真面目にやれ！」

一応山崎にも調査させたのだ。こんな、一部公務員なら誰でも閲覧できる資料室で、目当ての資料が見つかる訳もない。

ただ、念のため。

そう思つて調べていると、勝手に着いてきた沖田がぶーぶーと文句を言い出した。

「だってなんも見つからないじゃねエですか。早く例の鍵使えばいいでしょ？」

「一応もうちよつと人目が減つてからな」

土方が言うように、世間一般の休日だからか、職務上の資料を取り寄せる者の他に、プライベートで調べ物をする者なども多く、資料館はいつもより混み合っていた。

「別にいいでしょ。人が見てたつて。これだからムツツリは…」

「いや別にとつつぁんのエロい資料」とかいう冗談信じてコソコソしてるんじゃないからね！」

「え？エロい資料？そんなのがあるんですか。わくわくしてたんですか。引くわ〜」

「ムカつく！」

いじられてついヒートアップした土方の怒号に、静かに読書をする数人と資料館の職員がしかめっ面を向ける。

「でけえ声出すな死ね土方」

「…っ！」

てめえのせいだ、怒鳴ろうとするも、またしかめっ面を向けられそう、土方は、ぐっと言葉を飲み込む。

沖田は土方のそんな様子を鼻で笑った後、何事もなかったように資料に目を落とす。

「どの資料にもすぐ潰れた新興勢力ってくらいにしか書かれてない

ですねィ」

「…ああ。面白いくらいに情報がねえな」

土方も、怒りをぶつけるのは諦めてまた資料を手取る。

と、資料館にお昼を知らせるチャイムが響く。

それを合図に、昼食を取るためにぱらぱらと人が掃けていく…。

「そろそろ行くか」

五分もするとまばらになった人を確認すると、土方はようやくポケットから鍵を取り出した。

・
・
・

地下に下りると、ひんやりとした空気に包まれる。

目の前に並ぶたくさんの扉は、それぞれの鍵を持つ者しか開けることができないため、この地下にはめったに人が入らない。

しんとしたそこでは、ふたりの足音だけがカツカツと響き、何となく息苦しい。

しばらく歩きようやく目当ての扉を見つけると、土方はその鍵を差

し込んだ。

地下、第三資料室。

四畳半ほどのその部屋には、狭いながらも地面から天井まで、部屋を埋め尽くすように資料がズラリと並んでいた。

「おゝすげえや」

沖田が思わず声をあげる。

「おいおい。探すの時間かかるぞこりゃ」

土方が、資料の場所を聞いておけばよかった、なんて思いながら眉間に拳を当てていると…

「あ、あった」

「早！」

ぶらりと部屋を一周していた沖田がある本棚の前でぴたりと立ち止まって言う。

「だってこれほとんど娘とかキャバ嬢の写真ですぜい」

言われてみれば…。

周辺の本棚をぐるりと見渡すと、どれもこれもふざけた表紙にふざけたタイトルが書かれた、アルバムばかりのようだった。きつと部下にでもやらせたのだろう。

よく見るとちゃんと年代順に並んでいる。

今年、去年、一昨年…時代を遡って、一番古い資料が並ぶ本棚の一部。

他と違って、そこに並ぶものだけがちゃんとした“資料”だ。

背表紙に記された年代的に、多分松平がまだ真面目に働いていた時のものだろう。

にしても…

「真面目期間短えな！」

土方は思わずつつこむ。

だって真面目な資料の列は本当に数えるほどしかない。

この部屋を埋め尽くす大半は、馬鹿な写真だ。

まあ、探しやすいけど…。

土方が呆れているうちにも、沖田は少ない資料を物色する。

「えーと…あ、あった。新興勢力と一部官僚の癒着、と…法務省と密入・密輸」

沖田が一冊の資料を手に取り、こちらに向けた。

ふたりの姿は

「えーと…発足は十数年前、構成員は数十名の小規模組織で頭は海市って男」

沖田が資料を読み上げる。

資料には隠し撮りらしい白黒の写真も付いていて、写るのは顔の半分が化け物の男と、その傍らに女。

「この男が海市だな。天人と人間の混血か…このツラ、荼吉尼族か？隣の女は…」

資料を覗き込んでくる土方を鬱陶しそうに、近エ土方死ね、と払いのけ、沖田が続ける。

「この女は頭を支える右腕的存在で、名は葉月^{はつき}…夜兔族らしいでさア」

確か“アレ”も夜兔族だった。沖田はいけ好かない橙頭を思い出してわずかに眉を寄せる。

「真に強い者たちだけの理想郷を”ねえ。確かに傭兵部族は強いわな」

「え、理念に反する者たちを弾圧、殺害…。平等さなんて必要ねえって考えで、被害者は無能で暴政をはたらく者以外に、市民権を唱える者も対象…過激ですねイ」

「へい、と沖田は資料の間に挟まっていた数枚の紙を土方に差し出す。どうやら、計都教によって殺められたと予想される被害者のリストらしい。」

「公の記録では、突然死や失踪になつてる奴ばかりだな。これ全部こいつらがやったってんなら大変なことたぞ」

「こんなけ派手に動いてもバレねえのは金持ちの花井家の根回しがあつたからつてことですかイ？」

「とつつあんの調査が正しければな」

沖田は、ふうん、と鼻を鳴らすと、再び資料に目を落とす。

「その後海市は病により死亡とされる…これを発表したのが花井古保、怪しさ100%ですねイ」

「今も花井家が匿つてる可能性は高えな」

呟き、一息つくくと、土方は資料を覗くことは完全に諦めて沖田に続きを促す。

「瀬戸については？」

「瀬戸家は数百年続く老舗で、胡平が七代目の頭首になってからはさらに発展：自らの利益のためなら天人との違法売買も：まア勘違いした商売人によくある感じですよネイ」

「娘婿に法務省の大臣、誠十郎を迎えることでさらに天人との繋がりを深めたわけだ」

「非合法薬物の密売なんかを収入源としてる春雨とも当然深く繋がってやがる、と。完全な黒ですねイ」

これだけ調べあげて捕まえられないなんて。もしかしてとつつあんが仕事にやる気をなくしたのは、こついう裏の汚い事情を見てきたからかもしれない。

…いや、もともといい加減な性格なだけか。

カチヤ

「ん？」

ふたりが思案したり資料を読み込んだりして（沖田は『プー作とつつあんの亡き飼い犬だ 奮闘記』とか読んで）いると、ふいに扉

の方から音がした。

振り返ると扉は閉まったまま、異変はない。

「今、扉開いたか？」

「さあ？…ん？」

土方より数歩、扉の近くにいた沖田が足元の“それ”を拾い上げる。

カチカチカチ…

「何だそれ」

「知りやせん。あげます」

ぼい、と沖田は“それ”を放り投げる。

土方は慌てて手を出し“それ”を受け止める。

何だよこれ…。カチカチカチカチ、時計、じゃねえよな…。

いやこれ、もしかしてアレじゃね？

もしかしなくてもアレだよね!？

土方は、はっと我に返る。

「いらねえええ！これ爆弾だろ！ナチュラルに渡してくるな！」

「落ち着いて下せえ。まだ三分もありやす。さっさと逃げれ……」

扉に手をかけた沖田が言葉を詰まらせる。
嫌な予感……。

「……どうした？」

「開かねえや」

「は！？何で！？」

押しても引いても叩いても、扉は開かなかった。
鍵どころじゃない。ドアノブ自体が動かない。

「マジ勘弁してくれよ。こんなところでこの世で一番ムカつく奴と
心中とか嫌でさア」

「こっちのセリフだ！」

狭い部屋に土方とふたり、閉じ込められて……あ、そういえば。

「何か前にもこんなことあったな。マジ最悪なんのお前だけ死ね土方」

「前回はお前が仕組んだことだろうが！」

「そーでしたっけ」

そう。地愚蔵チロクザンとかいう引きこもり少年に監禁されたあの事件だ。結局は沖田の度が過ぎた悪戯だったのだが…。

嫌な記憶を思い出して土方が眉間にシワを寄せる。

だけど、今は…。

「…んなこと言ってる場合じゃねえな」

考える…

ここは地下。窓はない。携帯も繋がらない。ただひとつの扉は閉ざされていて、とても制限時間までに壊せそうもない…。

ダメだ。打開策が全く浮かばない

あと15秒、もう駄目…

締めかけた土方の腕が、ぐいと引っ張られる。

1 2

1 1

「土方さん！」

「あ!？」

6

5

4

・

・

「~~~~~！」

沖田が何か叫ぶと、目の前が、カッと明るくなる。

0
∴

部屋が光に包まれて、声は爆音に掻き消される。

部屋は崩れ、粉々になったコンクリートの砂塵と炭くずになった本
たちが舞う。

一通り崩壊が終わり、煙が引いた後、その部屋にもうふたりの姿は
なかった。

ふたりの姿は（後書き）

さて、ふたりはどーなってしまうたんでしょうか。

人事異動

中央資料館。

本とか資料とか、そういう難しいものは苦手だったし、あまり自分には馴染みのない場所、そんな風に思っていた。

一応、警察官としてやっていくと決めた時に手続きの一環として入館証は作ったが、今の今まで殆ど使わず仕舞いだった。

それが、こんな形で使うことになるなんて。

「トシと…総悟が？」

突然呼び出されて、久しぶりに来た資料館はなんだか焦げ臭かった。地下へ続く階段は『立入禁止』と書かれたテープで塞がれている。

山崎に知らせを受けた時はにわかには信じられなかった事実を、再度はつきりとたたきつけられる。

土方と沖田が、爆発に巻き込まれて姿を消した。

「ええ…。確かに地下の資料室に行かれるのを確認しました。名簿にも入館記録はありますが、出られた形跡は…」

この資料館の出入りには必ず入館証の提示が求められる。名簿には確かに土方と沖田の名前が確認できる。入館記録のみ、退館記録はない。

職員が言いづらそうに、事実を告げた。

資料館の出入口は職員のいたそこだけで…。爆発が起こるまでに地下に降りたのはふたりだけ。地下から出てきた者はない。

報告をしに来た山崎自身もこの事実を信じられず、地下へと駆ける。後を追った近藤が、爆発で変形した扉を開けようと必死になっている山崎に手を貸す。

ガタンと大きな音がして、扉が外れた。

目の前の光景に愕然とする。

「そん、な…」

部屋は丸焦げ、床に転がる真っ黒な塊は本なのか棚なのか、ヒトなのか…それすら分からない。

とにかく、生きて動く者はない。

「嘘だ…副長、沖田隊長…っっ！」

「あゝ。こりゃ駄目だな。全部炭クズだ。遺体すら残らねえ」

その場に崩れ落ちた山崎の後ろから声が飛ぶ。

現れた人物の冷たい物言いに近藤は憤り、きつと睨む。

「とっつあん！そんな、言い方…っ！」

「事実だろーが。ったく…人の資料めっちゃめっちゃにしゃがってよ」

はあ、とため息をついて、松平は黒焦げの部屋に足を踏み入れる。

部屋の中、天井、壁、足元…視線が止まる。

「……………」

しばしの沈黙の後、山崎が、すっと立ち上がり俯いたままぽつりと言う。

「…あのふたりはそんな簡単に死ぬタマじゃないですよ。きっとどこから脱出して…」

「じゃあなんで出てこねえ。生きてりやせめて連絡くらいよこすだろ？」

ただの願望に近い山崎の言葉は、すぐに松平によって否定される。

「それは…」

山崎は口ごもり、そのまま言葉を失った。

再び訪れた沈黙を破ったのは、松平だった。
渋い顔で煙草をふかす。

「新しい副長と一番隊隊長だが…」

「「！」「」

「まだあいつらが死んだと決まったわけじゃねえ！今そんな話は…」

「馬鹿野郎が。俺たちや警察だ。てめえがメソメソ冬眠してる間にもテロリストは活動しちゃうから。臨時でもなんでも空いた穴は埋めにゃならんだろう」

「……………」

そう。俺たちは警察だ。

敵地に乗り込む時も、ただ道を歩いている時でさえも…いつでも死ぬ覚悟はできていたはずだ。

いや、できていなければならぬ。

俯く近藤と山崎を、ちらりと見やり松平は続ける。

「他の隊から隊長引つ張つてきてもいいが…リーダーが代わると隊に影響を与えるもんだ。中間層の有能な奴から選ぶからお前らが支えろや」

「…でも、正直あのふたりの代わりができる人なんて今の隊長たちの中ですら…」

山崎の、最後の足掻き…。

いや、確かな事実でもある。

それにやはり、監察として土方以外の副長の下につくのは嫌だった。

しかし松平は、てめえの意見は聞いてねえ、と言わんばかりに冷たく決断を下した。

「人事異動を言い渡す。一番隊長、瀬戸准平。副長に花井新太だ」

えっ…？

「ま、待って下さい！そのふたりは…」

「長官命令、反論は無しだ」

「あ…っ！お言葉ですが…っ」

「あゝうるせえ！さっさと帰って引き継ぎの準備しろ！おじさんはここで思い出とサヨナラするから」

「えっ、ちょ、待っ…！」

何か言いたげな山崎を近藤共々部屋から押し出し、壊れた扉をもとの位置にはめ直す。

山崎は扉の外でしばらく何かわめいていたが、反応のない松平に見切りをつけてやがてそこから立ち去った。

「フン。鍵、返しに来いって言ったのによ」

呟き、松平はもう黒焦げのそこに落とした煙草を踏み付けながら、

小さく舌打ちをした。

人事異動（後書き）

松平のとうつあんの怪しい行動の真相は…？

もうすぐ今年も終わりますね。

みなさんよいお年を！（まだ年内更新するかもしれないですが…）

不満、疑念（前書き）

遅ればせながら、明けましておめでとございませう。

久しぶりに投稿です。

ちょっとお正月休みをいただいていたました。またちよくちよく更新します。

不満、疑念

「なんであんな新参者が副長なんだ？」

「ウチの隊長なんて、ただの隊士だった奴だよ」

その通達を受けた時、屯所中に激震が走った。

土方、沖田の死亡。そして、新たな副長と一番隊隊長の就任…。

驚き、悲しみの次に出てきたのは、不満だった。

「なんでも実家が金持ちらしいぜ」

「何だよウチまで権力主義になんの？」

「つーかまだふたりの葬儀も済んでねえのによ」

「犯人が見つかるまでこの件は伏せとくかららしいな」

一応、組織にいて給料ももらっているのだから、上司が変わったからといって仕事を投げ出す訳にはいかない。

だけど“侍”としては尊敬もできない人物に付き従うのは嫌だ。

押し込められない葛藤が不満となって、屯所中、あちこちの隊士たちの間で噴出しているのだ。

隊士たちが、ぶつぶつと固まって話していると、ちょうど話題の人物が通りがかる。

「ガタガタ煩いぞ！ さっさと仕事に行け！」

「……は、はい！」「」

一般隊士のそれから幹部たちのスカーフ付きの制服に着替えた花井が、吊った目をさらに吊り上げて怒鳴ると、隊士たちは驚き一気に散り散りになっていった。

「チツ…調子に乗っちゃって…」

「キャラ変わったよなあいつ」

立ち去りながらも聞こえないように陰口をたたく隊士たちの横を、すうと金髪が横切る。

金髪は少し笑った後、ふんぞり返る花井に歩み寄った。

「あ、副長さん。おはようございます〜」

「瀬戸君ですか」

同士の登場に、花井の顔が少し緩む。
瀬戸もまた、にやりと笑って言う。

「めっちゃうまいこといったやん」

「しかしうまくいきすぎて怪しいですね」

「俺らの親父どもが裏で松平に圧力かけたんやから当然の結果ちゃうの？」

「松平はそんなに簡単に話を聞き入れるタイプではないらしいのですが」

相変わらず猜疑心の強い奴…。

瀬戸は気付かれないくらいに一瞬面倒そうに花井を睨んで、すぐにまたニヤリと笑う。

「どんな頑固親父でも家族の話出されたら怯むと思うけどな」

まあ、それもそうですね…、花井がそう返しかけたその時、背後に気配を感じ、振り返る。

「おふたりで何のお話です？」

にこり、と上品に笑って男は尋ねる。

「一色、君」

奴はどこから聞いていた？

にこにここと笑う一色の表情からは何も読み取れず、花井が少しどもる。

「そんなに仲がよかったですか？ふたりとも」

威張ってみても、小心者。言葉に詰まる花井に代わって瀬戸が、へらっと笑った。

「嫌やなあ俺が馴れ馴れしいのはいつものことやん。それに今回新たに昇級した同士、不安いっぱいやから仲よおしたかってん」

これ以上は話さない、そう言わんばかりの瀬戸の笑顔を見て、一色は諦めたように目を閉じた。

「そうですか……。いきなり僕より上司になってしまいましたね」

「たまたまやって。暇してんのが俺しかおらんかったんやろ。ま、気楽に行こや」

ぼん、と瀬戸が一色の肩を叩く。

一色はかすかに不快感を表すが、すぐににこりとまた笑った。

「そうですね。じゃ、僕は仕事があるので」

「おう。ほなな〜」

去っていく一色と瀬戸を順番に見て、今まで黙り込んでいた花井が口を開く。

「瀬戸君」

「ん？」

「あまり屯所で話すのはやめましょう。誰が聞いているか知れない」

「…せやな〜」

小心者で、面倒臭い奴…。

瀬戸は心のなかで花井を笑う。

だけど、こちらにはそれも都合のいいこと…。

瀬戸がごちゃごちゃ考えていると、花井がまたぼつりと言う。

「またあの倉庫で落ち合いませんか？これからの事を話したい」

「ええよ。先行つといてや。時間見計らって後から行くわ」

行動時間はあるだけずらした方がいい。

花井は、分かりました、と頷くと、去り際に呟く。

「…あとは近藤だけありますね」

「そーやな」

くるりと向きを変えた瀬戸は、ひらひらと手を振り呟きに同意する。

自分も瀬戸に背を向けて歩きだす花井を、振り返った顔だけで見遣り瀬戸はくすりと笑った。

「甘いな…花井くんは」

殉職

孝暗たちと一悶着あった後、なぜかUNO大会が始まって夜通しUNOをしていたせいで、銀時たちは盛大に寝坊した。

準備やらなにやらで時間をとられて京都を出発するのも遅れ…結局その日、江戸に着いたのは日も沈みかけた夕方だった。

桂たちとも別れ万事屋へと歩を進めていると、出勤途中の夜の蝶たちの群れの中に見知った顔が見えた。
いち早く反応した神楽が、あ、と声をあげ走り出す。

「姐御くおみやげアル！」

山ほど抱えた紙袋の中のひとつを神楽が、ずいと差し出すと、お妙はにこりと笑ってそれを受け取った。

「あらありがとう。楽しかった？京都旅行」

「ウン！銀ちゃんはずっと食べてたヨ！」

神楽に遅れて、銀時、新八もやって来る。

「新八はずっと眼鏡だったヨ」

「目え悪いから眼鏡だヨっ！！」

相変わらずテンポのいい三人を見てお妙がクスリと笑いつつ神楽の土産話に耳を傾けていると、鼻をほじって何気なく辺りを見渡していた銀時が、あ、と声をあげた。

「あ、ゴリラ」

近藤がぼつりぼつりと歩いている。

神楽もそれに気づき、お妙を護るように、ぼつと身構える。

「ゴリラめっ！また性懲りもなく姐御のストーカーか！？」

近藤は、嘔み付かんばかりの神楽をちらりと見る。

「あ…チャイナさん。こんばんは。それじゃ…」

「「「「「！？」「「「「」

近藤は神楽に軽く会釈すると、そのまま行ってしまった。

何だ？あの気味の悪い反応…？

「銀ちゃん大変！ゴリラが変アル！」

「そうだね。近藤さんが姉上に気付かないなんて…」

ゴリラ呼ばわりされても言い返さず、いつも追いかけて回しているお妙さえもスルー…。

明らかにおかしい近藤の態度に皆が顔をしかめる。

銀時も同様にして怪訝そうに近藤の後ろ姿を眺め、呟く。

「腐ったバナナでも食ったか？…あ、いいモンみつけ」

そう言うと、銀時はその“いいモン”をがっしり掴み、引っ張り寄せる。

「ぐえっ」

首根っこを掴まれて奇声を発したのは、山崎だ。どうやら近藤の後をつけているらしい。

「何してんの？ゴリラ捕獲大作戦？」

「違いますよ。護衛です」

山崎は掴まれてしわくちゃになった制服を整えながら、少し目を逸らす。

こいつも、なんか変だ。

「護衛？あア、そついやまたいつちよまえに命狙われてんだっけ。
おたくのゴリラ」

「あゝ、まあ……」

山崎はそつけなく返事をする、じゃあ、と一言だけ告げて近藤の
後を追おうとする。

明らかにおかしい。新八が山崎の肩を掴む。

「何があつたんですか？近藤さん。てゆうか、山崎さんも」

山崎は決して普段からテンションが高い方でもない。だが今日は一
段と地味で陰気なオーラを漂わせている。それによく見ると目が真
っ赤だ。

「何でもないですよ」

新八の手を払いのけ、さっさと立ち去ろうとする山崎の背中に、銀
時が呟く。

「…斎藤、原田、武田、藤堂…沖田、土方」

「？」

銀時が呟いたのは、真選組隊士の名前だ。
何を言い出すのだろう、と新人たちが見上げた銀時の表情は、何かを確信したようなそれだった。

「何かあったの？総一郎君と副長さんに」

「！」

沖田と土方の名前に、山崎の後ろ姿が小さく反応したらしい。

「相変わらず無駄に鋭いですよね…。まあ、アンタたちならいいか。いろいろ世話になってるし」

山崎は振り返り、諦めたように笑って言った。

「副長と沖田隊長…」

「殉職しました」

「「「「!!」「」」」」

「ジュン、シヨク…?」

神楽が尋ねる。

難しい言葉は分からない。だから、自分の予想は間違いであってほしい…。

だが、神楽の淡い期待は銀時の答えによって簡単に打ち碎かれる。

「…死んだんだよ」

「…っ!」

言葉を詰まらせる神楽に代わって、新八が山崎に問う。

「どうして、ですか…?」

「例の…密偵の件、調べてる最中なかに爆弾での奇襲おかしな襲撃にあったようです…全て消し飛んで、遺体も残りませんでした」

「そんな…」

山崎は、ふう、と息をつくとまた視線を逸らして続ける

「あ…この事はどうか内密に。混乱を防ぐために犯人が見つかるまでは世間にも公表しませんから」

「お前…」

平静を装いきれずに奮え、痛々しいほど強く握られた山崎の拳を見て、皆かける言葉を失う。

「…調査とかそんなのはホントは俺がやんなくちゃならなかったこととで…。死ぬのは俺の方だった訳で…」

込み上げるものを抑えるように、だんだんと早口になって吐き捨てるように言う山崎だったが、やがて目を閉じて自分を落ち着かせるように深く深呼吸をした。

「でも、大丈夫です。ふたりがいなくても真選組は…局長は護ります。あんな奴らの思う通りにはさせません」

そう言い残すと山崎は、それじゃ、と背を向け今度こそ振り返らずに行ってしまった。

「ふ、ふん！あんな奴らくたばってせいせいしたアル。あんな、奴…」

いつになくおとなしかった神楽が、急に声を発する。

神楽の拳もまた、強く握られている。

「神楽ちゃん…」

「忘れていたけど、あの人たちは警察官なのよね…常に危険と隣り合わせなんだわ」

皆が視線を足元へ落とす様子を、銀時は黙って見つめる。

攘夷戦争の時分は、昨日まで話していた奴が急に自分の前からいなくなる事なんて日常茶飯事だった。

目の前で仲間の首が飛ぶことだってあった。

でも、こいつらは違う。

戦争なんて知らないんだ。

顔なじみが死んだと聞いて驚きはあってもどこか冷静でいられる自分に苦笑する。

それほどまでに死に慣れすぎてしまっているという事か？

いや、それとも…

「遺体が出てこなかった、か。それってどーなんだ？」

銀時が呟いた声は、皆が黙り込んだこの状況ではいやによく響いた。下を向いた三人の顔が銀時を向く。

「ふたりは亡くなってないってことですか？」

銀時は自分が思っていたことを口に出していたことに気付き我に返ると、ついでにもうひとつ、気付く。

「さアな。まさか“おまえ”じゃねえよな？」

「えっ？」

急に自分たちの少し後ろに話しかける銀時を不審に思い新八が振り返ると、そこには苦笑いをする黒い隊服の少年が立っていた。

「気付いてましたか？」

「君は確か…猛君？」

新八が尋ねると、猛は、はい、と答えた後すぐに銀時にさがるような視線を向けた。

「あの、坂田さんにお願いがあって…」

「俺には幻滅したんじゃないの？」

「…すみません」

銀時がおちよくるように言つと、猛はばつが悪そうに頭をかいた。

「立ち話もなんだし、またウチ来いよ」

銀時は、にっ、と笑顔を作ると、万事屋への道を指差した。

依頼

「んで？何？頼みって」

万事屋に着くと、銀時は早速本題を促す。

世間話は先日したし、あまり時間がないのか先程から見るからに時間を気にしてそわそわしている猛が気になる。

「あの…」

猛はここまでできて少し迷ったように視線を泳がせて、やがて意を決してこちらを見た。

「局長を、護ってくださいですか？」

「ん？」

「近藤さんを？」

一般市民に警察の、しかもトップを護れ、なんておかしな話だ。だが先程見た近藤の様子ならそれも頷けた。

猛が続ける。

「はい。実は今回土方さんと沖田さんがなくなったことで新しい副長と一番隊隊長がたったんです」

「へえ」

「おそらく彼らが今回の事件の犯人…。今後残る局長を狙いにくるはずです。だから俺と山崎さんは局長を護ろうと決めたんですけど…」

詰まらせた言葉を急かすように、銀時たちはいつせいに猛に視線を向ける。

促されて猛は膝の上で拳を握り、悔しそうに事情を話す。

「山崎さんは“真選組副長”直属の監察です。新副長に付き従う形になるでしょう。しかも俺たち隊士も新しい副長の“規律”の指針によって行動を大きく制限されはじめました」

さっきからしきりに時計を気にしていたのはそのせいか。おそらく今もこっそり仕事を抜け出してきたのだろう。

「だから、自由に動けて且つ強い知り合いつていたら…坂田さんしか思い浮かばなくて…」

猛が、情けないです、と苦笑して言うと、銀時は意地悪に笑って問いかける。

「真選組潰すって言ってなかったっけ？」

「すみません。あの時は前が見えてなかった…。坂田さんの言った

通りだったんですね」

“時間の無駄”

“もう終わったこと”

言葉だけ聞くと冷たいようだが、実際あんなことをしたって心は晴れなかった。

復讐を忘れて、どれだけ心が晴れたことか。

「幕府は今でも嫌いです。でも、近藤さんは：真選組の人たちは人として尊敬しています」

「そーか」

あんなのを尊敬していいのかは知らないけど。

初めに会いに来た時よりすっきりとした猛の顔を見て、銀時は安心してように笑った。

だが、そんな銀時の隣。

不安げに座る神楽が、小さく零す。

「ねえ、タツキイ」

「タツ…？何ですか？」

呼ばれたこともない無理矢理ぎみのあだ名に一瞬戸惑った猛だったが、向けられる真剣な眼差しに気付き、俯く神楽を覗き込む。

「サドとマヨはホントに死んだアルか？」

泣きそうなのを必死でこらえているような少女な顔…。

猛は返事に困ったように眉を寄せると、やがてゆっくりと答えた。

「分からないです。でも、“いない”ことには変わらないから…」

俺たちがなんとかしなきゃ、自分に言い聞かせるように呟く猛の頭としょぼくれる神楽の頭に銀時は、ぼん、と手を乗せた。

「そーだな」

前向きに

新体制になった真選組の朝は、某有名ドラマの大学教授の“総回診”ならぬ“総巡回”で始まる。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

「おはようございます」

「おはよう」

副長の花井が目をぎらつかせて各隊舎を回り、隊士たちの様子を伺う。

そしてこれは、昼と夜も行われる。

以前も規律やら統制やらは設けていたが、それはこんなにプライベートまでもを縛り付けるものではなかった。

これではまるで監獄の囚人と看守だ。

そんな隊士たちの不満のこもった目に気付きながらも、花井はやめない。

それだけ花井は“反乱”を恐れていた。

巡回も終わり、部屋に戻ろうと廊下を歩いている、と…。

「おっはよ〜」

「おはよアル〜」

「おは…アル？」

すれ違った隊士の馴れ馴れしい挨拶と、変な挨拶に眉を潜め、花井は振り返る。

「君たちは…見ない顔だな？」

そこにいたのは見慣れない三人組。地味な眼鏡が丁寧に挨拶をする。

「あ、おはようございます。今日からしばらくお手伝いすることになりました。万事屋の者です」

「万事屋？」

聞いたことのない名称だ。

花井は訝しげに三人を頭の先から足の先まで見やる。

眼鏡以外の二人はなぜか幹部だけが許されるスカーフ付きの隊服を着ている。

しかもその二人、髪色が…。

視線がぶつかりると銀髪の男は、へらりと笑った。

「あゝ…なんでも屋みたいなモンだよ。なんかごたごたで人が足りないとかで雑用頼まれた、みたいな？」

「な…！いったい誰がそんなこと許可し…」「局長ですよ」「

言葉を遮るようにして現れた声に振り返ると、数日前に粗相そそうをやらかして雑用に降格になった、猛が立っていた。

「貴寄…君。局長が？雑用とはいえ、一般市民を屯所に…？」

責めるように言う花井に、猛はにっこり笑って返す。

「この人たちはなんだかんだでウチと馴染みが深いそうです」

「馴染みだからってここには機密情報もあるのに。局長も何を考えておいでなのか」

「大丈夫です。もともとこの人たちはウチの内部事情も熟知してらっしゃる。副長は知らないでしょうけどね」

猛が挑発的な態度で言うと、花井は一瞬何か言いたげに口を開くがやがて、ふう、と息だけを吐き出した。

「…まあいいでしょう。雑用係の“先輩”としてしっかり仕事を教えて差し上げるといい」

最後に嫌味を残して、花井は立ち去る。

「何ネあいつ！カンジ悪いアル！」

銀時に押さえ付けられて黙って見ていた神楽が、花井が立ち去った瞬間に堪えきれない声をあげる。

「あれが花井さん、新しい副長です」

猛が眉根を下げて困ったように笑って言うと、銀時、そして新八も、なるほどね、と呟いて神楽に同意する。

「高圧的な人だなあ」

「見るからに調子乗っちゃってるね」

もう少し花井について話を聞こう、そう思ったところで…。

「おお、万事屋じゃないか。本当に来たのか」

廊下の向こう側から、近藤が現れる。無理もないが、やはり少し元気がないようだ。

「近藤さん」

「悪いな。ゴタついちゃって」

近藤は申し訳なさそうに言うと、薄く笑う。

「いーのいーの。しっかりギャラは貰うからね」

「はは…じゃあ、俺は仕事があるから」

近藤は銀時の言葉に弱々しく笑うと、ふらふらと自室へ消えて行った。

いつもウザいくらい元気で変態なのに…。

事の次第を心配そうに見ていた神楽が口を開く。

「どうしよう銀ちゃん、ゴリラがただのつまらない人になっちゃったアル」

「えっ…進化？」

「違うでしょっ！…明らかに元気ないですよね。近藤さん。最近ストーカーにも来ないし。あ、それはいいけど」

しょぼくれた近藤を前にして、心配から逆に冷静さを取り戻し、少し元気が出たらしい新人がボケた銀時に軽くつつこむ。

それに、まだふたりが死んでしまったと決め付けることはないんだ。いつものようにポジティブに考える万事屋一行の中で、傍らの猛だけはなおも真剣な眼差しで呟く。

「そうですねよ……。あれじゃすぐやられちゃいます」

思い詰めた様子 of 猛を目の前に銀時は、ふう、と息をつく、ぼんと猛の肩を叩いた。

「んな心配そうな顔すんな。俺らは公務とかなから誰に規制されるでもなくずっとゴリラ監視員やってやるよ」

「そうネ！ゴリラ保護委員会発足アル！」

本当は悲しい気持ちもあるだろうけど、神楽も新八ももうそんなそぶりは見せない。
強いな、そう思うと同時に自分の弱さを実感して、猛は、ふっと自分を笑った。

「ありがとうございます」

前向きに（後書き）

ちょっとしんみりしますがもつしばらく辛抱を…。

シリアスとギャグまぜるのって難しいですね。

対面

銀時たちと別れて、近藤はとり憑かれたように書類整理に勤しむ。そうしていないと嫌でも思い出してしまっからだ。

だが生物というのは悲しいかな、こんな時でも腹は減る。ぐう、と腹の虫が鳴いて、ふっと気が緩む。

そういえば駅前に新しい定食屋ができてたっけ。

ずっと思ってみようと思っていたが、ちょっとオシヤレすぎて気が引けていた。

ひとりで行くのもなんだし…そうだ、

「…」

“トシ、総悟”

そう言おうとして近藤は、はっとする。

もう、あいつら“いない”んだっけ…。

書類から目を離し、無機質な天井を見やる。

「ミツバ殿、すまない…俺が面倒見るって言ったのにな…」

こんな俺だからミツバ殿も心配したのかもな、なんてマイナスの考えばかりが浮かんできて、近藤は再び書類に向かう。

「局長、まだやってたんですか？いい加減寝て下さい」

部屋の前を通りがかった山崎が痛々しく目を細めて言う。
近藤はあの日からろくに寝ていない。

「ザキか。…眠れねえんだよ。あいつらが夢に出てきて、起きた時に無力な自分に嫌気がさす」

そう言って苦笑いする近藤に、山崎も弱々しく笑う。

「そんなの、俺もですよ…」

「ザキ。お前ら、何調べてたんだ？」

「！」

土方たちがコソコソ何かをしているのは知っていた。いつものこと

だからあえて聞くことはしなかったが、こうなった今は話が別だ。

「せめて事情が知りたい。俺だけカヤの外は勘弁してくれよ」

そう。せめて、あいつらのしようとしていたことを…。

山崎もこの先、ひとりでどう動くべきか思いあぐねていたところだ。近藤の真剣な眼差しもあって、全て話すことに決めた。

「…分かりました。話します。ここ数日、俺たちがしていた事と、今真選組に起こっていること」

・
・
・

ところ変わって、日も落ちた港。

きよろきよろと辺りを警戒して男がひとり、倉庫に吸い込まれていく。

男はすでに中で待ち構えていたもうひとりに歩み寄り、へらりと笑った。

「お待たせ」

吊り目の男が振り返る。

「やあ瀬戸君。遅かったですね」

「ごめんごめん。何かしつこお追い回されてたから撒いてきてん」

きつと自分たちを怪しんでいる、責寄か山崎あたりだろう。

花井は、そうですか、と相槌を打つと、すつと一步横に退く。

怪訝そうにその行動を見た瀬戸と、退いた花井の影から出てきた男の目が合う。

「君が瀬戸君かい？」

「そーやけど…。おたく誰？」

「私は海市。花井家にお世話になってる者だよ」

瀬戸は何かを思い起こすように目の前、顔の半分だけ鬼の男をじつと見つめると、あ、と声をあげてにやりと笑った。

「あつれ〜？死んだはずの人やん」

「ご存知で？」

「知ってるで〜。ウチの職業柄、天人の情勢には詳しいねん」

瀬戸がまたにやにや笑って言うと、海市も目を細め、笑う。

「天人：例えば春雨、とかもですかね？やはり、仲がよろしいんで？」

「ビジネスの関係ってやつ？よお家に来るから」

「私もぜひお近づきになりたいですねえ……」

瀬戸は口は笑ったまま、挑発するように、目だけ海市を睨む。

「ほんで？仲良くなって元老の首でも狩るん？」

「何をおっしゃいます」

ピリリ、と空気が張り詰める音が聞こえる。

傍で見ていた花井が生唾をのんでいると、瀬戸が急に、ぷつと噴き出した。

「冗談。東のモンはこれやから嫌やわ。ノリつつこみくらしいしたらどうなん？」

続いて、海市も笑う。

「すみませんねえ。初心者ですから」

「まあ今度知り合いに口利きしといたるわ。さすがに元老とは話さねへんけど」

「それはどうも」

凍った空気が何とか溶けて、花井がようやく口を開く。

「瀬戸君、一点お願いが」

「お願い？」

瀬戸は海市から目を逸らして花井に向き直る。

それを確認して、花井はゆっくりと言葉を続けた。

「海市さんたちのことは花井家で匿っていたのですが…今僕の家が何者かにマークされてるんです」

「何者か？」

「おそらく松平の手の者でありましょう」

「あゝ。俺らの昇進の時に圧力かけたんやもんな。ちょっと本気出させちゃったか」

事の深刻さを理解しているのかいないのか、瀬戸は相変わらずへらへら笑う。

花井はそんな瀬戸をもどかしそうに見て、だが我慢して少しだけ眉を寄せるにとどめて言った。

「放っておいてもいいのですが、万が一にも海市さんが見つければ厄介です。新たな場所を用意したいところですが…」

「まあ、花井家の私財は調べ尽くされてるやろな」

「そういう事です。もちろん瀬戸君もお父様が同様に圧力をかけたために調べられてはいるでしょうが、お母様なら…」

公務員は公務員同士、互いに牽制し合うこともあり、どうしても私財を隠しきれないところがある。

だが、個人の私財はそうそう調べ尽くせるものではない。

瀬戸家のように莫大な資産を持つ家なら尚更だ。

瀬戸もそれを理解していたため、にやりと笑って了承の意を示し、言う。

「ええよ。でもすぐには用意できひんなあ…あ、しばらく倉庫使ってもええけど」

少し困ったように言ってみせる瀬戸に、海市が笑顔を返す。

「十分ですよ」

「そ？ほんじゃここに移ってきたらええわ。後ろのお仲間も一緒に」

瀬戸の言葉で、コンテナの裏からもつひとつ、影が現れる。

「あら、気付いてらしたのね」

出てきたのは茜色の髪、頭の両横に大きな白い椿の髪飾りをつけた、チャイナドレスの女。

妖艶に、睨むように瀬戸に笑いかける。

「君は、葉月ちゃん？実物かわええな」

確か、海市の右腕で夜兔族の…。

残忍で猟奇的、血を見るのが好き、そんな噂を聞いた気がする。

「ありがとうございます。褒めても何もでませんことよ」

「いやあ、かわええ娘は鑑賞してるだけでご褒美やから」

「お口が上手いこと」

「西の人間は口が取り柄やからね」

ふたり、目が合いくすくすと笑う。

「これからよろしく」

「いちばんね」

対面（後書き）

またちよつとばかし絵を…。

葉月

> i 3 8 9 1 2 — 4 5 7 4 <

今回はちよつと色塗りしてみました。べた塗りですが…。
まあなんとなくこんな感じってことで (^ ^ ;)

海市は考え中です。

もうひとりの対面（前書き）

久しぶりにあの人が登場です。

もっひとつの対面

『どっという事やの隆！？幕府の駒に先越されるやなんて！』

京。とある旅館。

通話ボタンを押した瞬間、キンキンとした耳をつんざく声が静かな廊下に響く。

「落ち着いて下さいよ」

一色は思わず顔をしかめ、電話から耳を離し宥^{なだ}めるように言う。
が、女の興奮は収まらない。

『何で早う言わへんの！？圧力やったらうちかって…』

「副長や、隊長になることが目的ではないでしょう。勞せずして真選組の主力が消えて好都合じゃないですか」

『せやかて…』

「真選組は彼らに任せましょう。僕は僕で、他で動いてますから心配なさらず」

『他…』

「ごめんなさい。忙しいので」

『隆！待…』

どうせ質問攻めで時間を食うことになる…。
それでは待たせている“あの男”に失礼だ。

一色はなかば強引に会話を終わらせると、ブツリと電話を切った。

「うるさいお人だ」

呟くと男の待つ部屋の襖に手をかける。

開いた隙間、目が合って男の笑った顔が見える。

「電話は終わったか？」

「ええ。待たせてしまってすみません」

一色は丁寧にお辞儀をして、窓べりでキセルをふかす男にそつと歩み寄る。

この男とは本来ならお互いの立場上、こんなふうに出会うことはありえない。

だが一色は、にこにここと笑顔で男の前に自分の手を差し出した。

「はじめまして。高杉さん」

高杉は差し出された手をちらりと見ただけで、右手はキセル、左手は窓の棧さんにかけたままニヤリと笑って言う。

「近頃は訪問者が多いな」

「かつての仲間の親族…でも来ましたか？」

「よく知ってるじゃねえか」

京には各所に自分の手の者がいる。桂の次の駒として高杉の動向も探っていたから、猛が高杉を訪ねたということも耳に入っている。

だが、一色は先を越されたことに別段焦りを感じなかった。なぜなら高杉がきつと半端な覚悟の猛を軽くあしらってしまうことが容易に予想できたからだ。

「彼なら寝返りましたよ。いまや一隊士として雑用なんか勤んでいます」

一応その後が気になるのでは、と一色が言うも、高杉は、そうかと興味なさそうに呟いただけで口に含んだ煙を吐き出す。

「お前も真選組壊滅作戦の勧誘か？」

「いいえ。真選組なんて小さなもの、眼中にありません。それにあそこはもう壊滅寸前ですから」

一色が告げると、高杉は目を細め、くつくつと喉を鳴らす。

「副長と一番隊隊長が死んだんだっただか」

「よくご存知で」

今度はふたり、目を合わせてクツクツと渴いた笑いを零す。もうお互いに知っていることを言い合っても仕方がない。

一色は笑いを止めて、本題に入ることにした。

「貴方の“世界を壊す”っていうの、僕も仲間に入れて下さいませんか」

「朝廷も世界の一部だぜ？」

「構いませんよ。でも“順番”は最後にして欲しいですねえ」

全て壊してから、最後に潰し合うという腹づもりらしい。よほど自分たちの腕に自信があるのか。

ナメられたもんだ。

高杉はなおも笑い、しかし睨むように目を細める。

「ウチのメリットは？」

「武器、兵士の貸与と…情報を」

「情報？」

「ええ。中央のね。あそこにも孝暗様を神と崇める者たちを潜り込ませてあります」

得意げに情報だなんだ言うからには、その間者とやらはある程度の地位にいるのだろう。

相当前から準備していたらしい。

そしてその壮大な計画の締め括りは…

「で、責任を全部こっちになすりつけて終わりってわけだ」

「そうです。世界を壊すお人だ。別にいまさら屁でもないでしょう？」

もはや隠す気もないらしく、一色は平然と言ってのける。

そして高杉がそれに否定を示さないことを確認すると、またにこりと笑った。

「じゃあ、交渉成立です。詳しい打ち合わせなんかはまた」

それだけ言い残すと一色は、ずっと高杉に背を向ける。
そんなうさん臭い男の去りゆく背中を鼻で笑い、高杉は皮肉るよう
に言葉をかけた。

「お前の“神”は孝暗か？」

一色は振り返り、にやりと笑う。

「なあ？」

奇立ちと

仕事も早く終わったことだしちょっと例の倉庫にでも寄ってくか。そんな軽い気持ちで足を運ぶと、非番を満喫しているはずの花井が、イライラした様子でそこにいた。

「くそっ！」

どうしたのかと近くで様子を見ていた海市に視線を送る。が、海市は肩をすくめ、分からない、という仕草を試みるだけだ。

「どーしたん？花井くん。珍しいやん。イラついて」

仕方なく、本人に尋ねる。

「瀬戸君…。あの雑用係のことですよ」

ようやく瀬戸の存在に気付き、花井は少し冷静になって言った。

雑用係…？

ああ、あいつらか。

「最近近藤にひっついてる三人組？」

「そうです…四六時中局長にくっついていて手が出せない…」

「あ。確かにな。それでイライラしとってんや」

人ごとのように言う瀬戸にさらに苛立ち、花井が何か言いかけた時、遮るように声が飛ぶ。

「一緒に殺してしまえばいいのよ」

「葉月さん」

葉月があまりにもさなりと言つものだから、花井は思わず素っ頓狂な声を出す。

葉月は、くすりと笑って続けた。

「私がやってさしあげましょうか」

「葉月ちゃん自ら出撃？」

「だって、邪魔なのでしょう？別にゴリラだけを選別して殺す必要はないじゃない」

葉月の意見はもつとも。だが、瀬戸は困ったように眉を寄せる。

「でも俺らはまだ派手に動く訳にはいかんねん。その後動きにくくなるからな」

「だから私がやってあげるって言ってますのよ」

葉月は挑発的に瀬戸を見つめる。

一方で瀬戸の視線は逸れ、視線はそのまま逸れた先の男を捉えた。

「それは駄目だよ。葉月。私たちもまだ姿を見せる訳にはいかないからね」

葉月は振り返ると、少し不満そうに唇を尖らせる。

「海市様…どうしてですか？」

「花井パパが大老になって好き勝手できるようになるまでは」？

瀬戸が、にやりと笑うと海市も特に動じずに笑い返す。

「よく分かってらっしゃる」

「つまりはそーゆーことで春雨と仲良くしたいんやろ？ウチ的にも今親父が中央で睨まれてるから、大老になった花井パパが味方になってくれるとありがたいけどな」

「でしょう？まだ春雨の幹部にご紹介はして下さらないんで？」

笑顔だが焦らされて苛立ちぎみの海市に向けて、瀬戸はまたいつものごとくわざとらしく困り顔を作ってみせる。

「うん。昔はな、阿呆提督ってゆーアホの提督と仲良おしてんだけど、何かゴタゴタがあったかなんかで若い兄ちゃんが提督になつてからはまだ会ってないねんな」

「神威ですね」

「神威様？」

飛び出した名前に、葉月がほんの少しだけ反応を示す。

花井も少し遅れて言葉を発した。

「ああ、夜兎族で吉原の新しい統治者の…？」

「そうそう。なんかあんまりお金にキョーミないみたいでな。親父も困ってんねん」

「でも春雨としてはまだまだ地球との繋がりは断ちたくないはず。それに交渉役はどちらかというと副団長の阿伏兎でしょう？」

「まあな。でもアホ提督よりは扱いにくくなってるで」

「…でしょうね」

男三人、その先の言葉を選ぶように、それぞれ出方を伺うように…。

彼らがただ黙っていると、唇を尖らせたままの葉月が割り込んできた。

「だったらゴリラを殺すのはいつになりますの？モタモタしていたら他に先を越されてしまうわ」

一番最初に目が合った花井が、助けを求めるように海市、瀬戸と視線を移す。

視線を向けられて瀬戸は、しょうがないな、と小さく息を吐いた。

「それやったらここにおびき出したらええんちゃう？ここやったら好き勝手暴れられるやろ？」

「…そうですね。それがいいかもしれません。それはできるかな？
新太」

海市が尋ねると、花井は先のことが決まって少し安心したのか微かに口端を持ち上げた。

「お望みならば」

「うふ。楽しみだわ」

騒ぐ、夜兎の血…。

葉月の瞳がゆらりと怪しく光った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2718x/>

裏切りの剣

2012年1月15日02時53分発行